

# 明星本『正広自歌合』の

## 本文と校異(1)

前田雅之\*

雅加筆『伊勢物語』と共に明星大学日本文化学部言語文化学科(現人文学部日本文化学科)の博物館学芸員課程用教材として購入されたものである。

次に、書誌を述べると、

外題なし

内題 自誦合 三百六十番 春秋 次第不同

表紙 瓢箪文様等を織り出した緞子表紙 二四・一cm×一六・八cm

料紙 斐楮交漉 綴葉装

丁数・行数 墨付八一丁・每半葉 十行

(明星本 奥書)

(明星本 巻頭)

はじめに

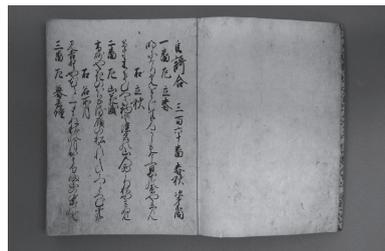
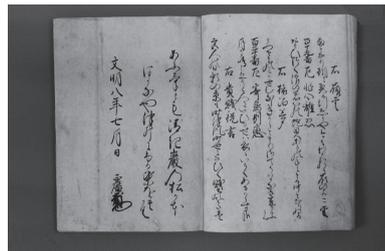
明星大学人文学部日本文化学科は、室町期の歌人正広(応永一九・一四一二〜明応二・一四九三年)自筆の、通常、『正広自歌合』(他には『正広三百六十番自歌合』など)と呼ばれる「自歌合」を所蔵している。本稿の目的は、これまでほとんど知られていなかった明星大学人文学部日本文化学科所蔵本(以下「明星本」と略称)の翻刻、および、他本の校異を明らかにすることである。だが、その前に、明星本の書誌情報、および、『正広自歌合』の伝本の様態に触れておきたい。

### 一、明星本の書誌および『正広自歌合』の伝本の様態

はじめに、伝来から述べていくと、明星本『正広自歌合』は、二〇〇〇年、ある古書肆から、写字台文庫旧蔵『源氏和秘抄』・伝榮雅筆、祐

なお、正広自筆の「自歌合」には他に宮内庁書陵部蔵本がある。これは奥書の日付も一致する、言ってみれば、兄弟・姉妹本のような存在だが、こちらは、藤丸唐草文様を織り出した緞子表紙 二一・七cm×一五・五cmとやや小ぶりである。

書誌に関する記述の最後として、旧蔵者について述べておきたい。明





通が同席した記事はないし、明星本についての情報もない（むろん、寛文年間に限定された『日録』の範囲も大きく関係している）けれども、おそらく鷲峰が正通と忠房の間をとりもって貸与を実現したのであろう。さらに、松平文庫本と祐徳稲荷中川文庫本とは、



の系図から判明するように、<sup>(1)</sup>忠房と直條の関係は、正通・吉村同様に、叔父・甥関係にあった。また、井上敏幸氏の研究が明らかにしているように、直條は、鷲峰とも交流があったのである。<sup>(2)</sup>

こうしてみると、稲葉正通—伊達吉村、正通—林鷲峰—松平忠房—鍋島直條という譜代・外様の差異を超えて大名間の文化ネットワークがこの当時縦横に存在していたことが諒解されよう。これを私の言葉で表現すれば、古典的公共圏の近世的展開ということになるが、本稿ではこれ以上、この問題には踏み込まず、『正広自歌合』の伝本の様態について、述べておくことにしたい。

現在、『正広自歌合』の確認できる伝本は、以下の通りである。排列は奥書の日付順とし、「詠法華二十八品歌」を持っている伝本は（＋詠法華）と略記して付記した。

①内閣文庫本（＋詠法華） 「自調合 春秋三百六十番 次第不同 釈正広」

（和学講談所旧蔵）

文明三一四七一年二月十五日 正広

長享二一四八年卯月廿日 正広<sup>(3)</sup>在判

②大谷大学図書館本 「自調合 三百六十番 春秋」

文明五一四七三年七月日 正広（消跡あり）<sup>(4)</sup>

③稲田利徳本 大谷本の忠実な写し

④明星本 「自調合 三百六十番 春秋 次第不同」

文明八一四七六年七月日 正広（花押）

⑤伊達文庫本 明星本の写し（伊達吉村の奥書）

⑥島原松平文庫本 明星本の写し

⑦祐徳稲荷中川文庫本 島原松平文庫本の写し

⑧書陵部本（＋詠法華） 「自調合 三百六十番 次第不同」

文明八一四七六年七月日 正広（花押）

⑨三手文庫本（＋詠法華） 「自調合 三百六十番 次第不同」

文明一五一四八三年五月廿九日 正広（在判）

⑩書陵部本続群書類従（＋詠法華） 延徳二一四九〇年卯月二日

\* 本文をみると俄に信用しかねる。本文は内閣文庫本で校訂されている。

以下は奥書なし

⑪ノートルダム清心女子大本（黒川文庫） \* 本文は大谷本系

⑫彰考館文庫本（＋詠法華）（歌合部類一三 『正徹三百六十番自歌合』とする） \* 本文は大谷本系

⑬静嘉堂文庫本 \* 本文は三手文庫本に近いが、大谷本系で校訂されている。

⑭神宮文庫本（村井古巖献呈本、以下、神一とする） \* 本文は、内閣文庫系に近い。

⑮国会図書館本（＋詠法華）（松下集二）、「和学講談所旧蔵」「自譚合三百六十番 次第不同」\*影写本 楮紙薄様（稲田利徳解説）

\*成立の下限は正広死去の明応二（一四九三）年か。

⑯内閣文庫本統群書類従（＋詠法華）

⑰神宮文庫林崎文庫本（＋詠法華）（以下、神2とする）\*本文は統

群書類従系（同系の原形を保っていると思われる）

⑱活字本統群書類従（＋詠法華）\*本文は書陵部本、対校内閣文庫本

以上、一八本が確認できているが、⑱の活字本統群書類従は、⑩書陵部本統群書類従を底本としているので、厳密に言えば、一七ということになるが、『統群書類従』という一大叢書の全容は、活字本でしか見られないという現状（写本で全巻所蔵している所蔵者はいない）に鑑み、敢えて加えた次第である。

次に、奥書を持っている伝本を引用して列挙しておきたい。

①、内閣文庫本（＋詠法華二十八品和歌）

あふけとも清き巖の松かもと

はかなやつるにふるはをそかく

文明三（一四七一）年二月十五日

正広

応永三十一年九月五日清巖の御年四十四正広十三歳より仕まつらせて春秋を送待しに長祿三年五月九日御年七十九にて此世をさり給ふて御跡に正広有て歌道の事は三十一字をならふる斗にて月日を送り侍るに応仁元年五月より世の中みたれ侍るに草庵もすて都のほかにかさすらひ侍る歌

道は数寄斗のことにてつとめ侍るをおろかなることのはのなり行さまをも見んとてとりあつめしるしをき侍り後にとくやふるへし。

長享二（一四八八）年卯月廿日

正広<sup>⑤</sup>在判

②、大谷大学図書館本

あふけとも清き巖の松か本

はかなやつるにふる葉をそかく

文明五年七月日

正広（消し跡）

\*若干「五」が破損のために読みにくいだが、大谷本の忠実な写しである稲田本によって「五」と確定する。在判と思われる箇所は削り取られている。

また、以後も削られていて読みにくいが同筆の巻末注記がある。

簾こすの戸にひとりや月の深ぬらん

日比の袖の涙たつねて

日比正広（と書かれていたが、消されている）

墨付六十二枚（これは別筆）

さらに、別筆で注記がある。

右之哥合者、三井玄養法眼被秘蔵点状候、細川殿給被

直々者被相伝候也

寛永三霜月□□

\*但し、消された結果、極めて読みにくいためにこの読みでよいか、未だに確定できていない。寛永三（一六二六）年の「細川殿」なら忠興となるが、一切詳細は不明である。

③、明星本

あふけとも清き巖の松か本

はかなやつるにふる葉をそかく

文明八（一四七六）年七月日

正広（花押）

書も、

④、書陵部本（+詠法華二十八品和歌）

あふけとも清き巖の松か本

あふげども清き巖の松が本

はかなやつるにふる葉をぞかく

はかなやつるにふる葉をそかく

文明八 年七月日

正広（花押）

⑤、三手文庫本（+詠法華二十八品和歌）

あふけとも清きいはほの松かもと

はかなやつるに古葉をそかく

正広 在判

文明十五（一四八三）年五月廿九日書之

墨付六拾五葉（同筆）

⑥、統群書類従書陵部本および神宮文庫林崎文庫本（神2）（+詠法華

二十八品和歌）

あふけともきよきいはほの松かもと

はかなやつるにふるはをそかく

延徳式（一四九〇）年卯月三日

上記奥書のうち、自筆とされるのは、明星本と書陵部本（奥書の前丁

に「月明荘」という印記があるから、反町弘文荘から納入したものと思われるが、『弘文荘待價古書目』（CDROM版）には同書名は見えない）である。大谷本は、自筆に似ているが、確定できない。いずれの奥

の歌を記す。歌の位置は、自歌合の末尾、また、「詠法華二十八品和歌」がある場合は、その後となる。歌の内容は、「清き巖」が師である正徹（字が「清岩」）を、「松が本」である正広（正広の家集は『松下集』と言う。稲田氏の指摘のように、正徹の号である招（松）月庵の遥か下の存在（＝松下）という意味合いで命名されたものである<sup>⑥</sup>）は仰いでいるけれども、結局、「ふる葉」（＝自分の古い歌）をかき集めることになつてしまったという謙辞であろう。だが、後述するように、正広は、「ふる葉」に改訂を繰り返しているから、単なる「ふる葉」ではなかった。この和歌は、「自歌合」の編纂目的も告げている。即ち、亡き師正徹に捧げるために編まれたということである。よって、何度にも渡る改訂作業も、より完成した形にしたいという正広の喘ぎのようなものと考えれば、それなりに納得がいくかとも思われる。

奥書で一等注目されるのは、前に少し触れておいたが、③明星本と④書陵部本である。ともに自筆であり、奥書日付を同じくするからに他ならない。だが、本の大きさが若干異なること以上に、両本には、二つの大きな違いが見られる。

一つは、明星本には「詠法華二十八品和歌」が付載していないのに対して、書陵部本は付載していることである。むろん、明星本が現在の形に装幀されていく過程で「詠法華二十八品和歌」が削られた可能性もあるけれども、明星本が明確に見たと判断される②大谷本にも「詠法華二



国会図書館本↓(国)

大谷大学本↓(大)

ノートルダム清心女子大黒川文庫本↓(ノ)

彰考館本↓(彰)

明星本↓(明)

伊達文庫本(宮城県図書館蔵)↓(伊)

島原松平文庫本↓(島)

祐徳稲荷中川文庫本↓(祐)

書陵部本↓(書)

三手文庫本↓(三)

静嘉堂文庫本↓(静)

内閣文庫本↓(内)

神宮文庫村井古巖旧蔵本↓(神1)

統群書類従本(活字本)↓(統)

統群書類従書陵部蔵本↓(統書)

統群書類従内閣文庫本↓(統内)

神宮文庫林崎文庫本↓(神2)

3、比較を容易にするために、明星本はゴチックで印字する。

4、\*印は筆者が校異の過程で気づいたコメントである。

5、「また」(国)などとあるのは、ここで丁が切れたことを示している。

6、×印は(国)にはあるが、×のついた伝本には該当する字(主として略されていることが多い)を示している。

7、(一オ)といった記号は、明星本の丁数オモテ・ウラを示す。

8、今号では、春秋百二十番と夏冬六十番を翻刻し、以下は次号に

する。

〔翻刻と校異〕

外題

(国) 松下集 二 春秋

(大) 自歌合

(彰) 題簽なし。

(明) 題簽なし。

(書) 題簽なし。

(ノ) 正広自歌合

(静) 松下歌合 完

(三) 題簽なし。

(内) 原題簽はなし。但し、後から「自譚合 釈正広」と貼り付けている。

(神1) 正広自歌合

(統書) 正広三百六十番自歌合

(統内) 正広三百六十番自歌合

(神2) 正広自歌合

内題

(国) 自譚合 三百六十番 (春秋) 次第不同 春秋

(大) 自歌合 三百六十番 春秋

(彰) 正徹自歌合三百六十番 春秋 次第不同

(明) 自歌合 三百六十番 春秋 次第不同

(書) 自歌合 三百六十番 春秋 次第不同

(ノ) 自歌合 三百六十番 春秋 次第不同

(静) 自歌合 三百六十番 春秋 次第不同

(三) 自歌合 一丁目、冒頭 自家汗 三百六十番 次第不同





(続書) え 相 かね  
 (続内) え 相 かね  
 (神2) え 相 かね

右 暮秋霜「(大)

(国) 冬もこは見よとや霜の花 園 に草木をかざる秋の行 らん

(大) み その

(ノ) 菌 その

(彰) その

(明) 冬もこは見よとや霜の花 菌 に草木をかざる秋の行 らん

(伊) 園

(島) 菌

(祐) はなその

(書) 菌

(三) ゆく

(静) ゆく

(内) その

(神1) 見× その

(統) み 苑

(続書) み 苑

(続内) み 苑

(神2) み 苑

四番 左 初春霞「(島)(祐)

(国) うち出る雲の浪 まの朝 日影 にはふ霞 や春のはつはな

(大) いたる あさ日かけ匂 ふ

(大) いたる あさ日かけ匂 ふ はる 初

(ノ) うち出る雲の波 まの朝 日影 にはふ霞 や春のはつはな

(彰) いたる なみ 句 かね

(明) うち出る雲の波 まの朝 日影 にはふ霞 や春のはつはな

(伊) 波

(島) 波

(祐) なみ かけ

(書) なみ かけ

(三) 打 いたる

(静) いたる

(内) なみ かけ匂 ふ

(内) のは虫損。

(神1) 打 出す

(続) 打 出す

(続書) 打 出す

(続内) 打 出す

(神2) 打出 波 かけ 出す

右 七夕雲「(彰)

(国) 七夕にかすか山 姫立 雲の衣 ふきやるをちの秋 かせ

(大) ひめ ころも吹 や 遠の 風

(ノ) ころも吹 や

(彰) 七夕にかすか山 姫立 雲の衣 吹 やるをちの秋 風

(明) 吹

(伊) たつ 吹

(島) たつ 吹

(祐) たなはた やまひめたつ ころもふき 風

(書) 吹や 風  
 (三) 風  
 (静) 風  
 (内) たつ  
 (神1) あき風  
 (統) ころも吹や遠の  
 (統書) ころも吹や遠の  
 (統内) ころも吹や遠のあき  
 (神2) ころも吹や遠の  
 五番 左 每春花香  
 (国) 昔 よりかはるうき世を春の花 さらにけちめもなき句 哉  
 (大) 昔 よりかはるうき世を春の花 さらにけちめもなき句 哉  
 (ノ) 昔 よりかはるうき世を春の花 さらにけちめもなき句 哉  
 (彰) むかし  
 (明) 昔 よりかはるうき世を春の花 さらにけちめもなき句 哉  
 (伊) ひ  
 (島) むかし はな ひ  
 (祐) むかし はな にほひ  
 (書) むかし はな にほひ  
 (三) 更に かな  
 (静) 更に かな  
 \* (静) は、「うき世を」の「を」に「の」と傍書(ミセケチはなし)。  
 (内) むかし ひ  
 (神1) むかし ひ  
 (統) むかし ひ

(統書) むかし 浮世 更に ひ  
 \* (統書) は「結目」にミセケチ「けちめ」と傍書。  
 (統内) むかし 浮世 更に ひ  
 (神2) むかし 浮世 更に ひ  
 右 嶺上月(明)(伊)(神1)(二ウ)  
 (国) はれのほる月にうき雲はらひても我 声くもる嶺の松 かせ  
 (大) 晴の  
 (ノ) 晴の  
 (彰) 晴の  
 (明) はれのほる月にうき雲はらひても我 ころもる嶺の松 風  
 (伊) ころもる嶺の松 風  
 (島) ころもる嶺の松 風  
 (祐) ころもる嶺の松 風  
 (書) 我かこゑ曇 ×  
 (三) わか わか  
 (静) わか ころもる まつ  
 (内) 晴の わかこゑ曇 ×  
 (神1) 晴の わかこゑ曇 ×  
 (統) 晴の 浮雲 わかこゑ曇 ×  
 (統書) 晴の 浮雲 わかこゑ曇 ×  
 (統内) 晴の 浮雲 わかこゑ曇 ×  
 (神2) 晴の 浮雲 わかこゑ曇 ×  
 六番 左 独摘若菜(ノ)  
 (国) つみいるゝ若菜は雪のはなかたみ目ならふ人もみえぬのへ哉

(大) 摘 い わかな 花 め  
 (ノ) 若 な わかな 花 め  
 (彰) 若 な わかな 花 め  
 (明) つみいる、若 なは雪の花 かたみめならふ人もみえぬ野へ哉  
 (伊) 若 な 花 め  
 (島) 若 な 野  
 (祐) 若 な 野辺  
 (書) な 野辺  
 (三) な 野  
 (静) な 野  
 (内) 摘 い 花 め 見 野  
 (神1) な 花 め 野  
 (統) わかな 花 筐 め 野辺  
 (統書) わかな 花 筐 め 野辺  
 (続内) わかな 花 筐 め 野辺  
 (神2) わかな 花 筐 め 野辺

右 荻似人来」(大)(彰)  
 (国) 吹 たひに問 人ありとおとろけはすたれうこかす風の下 萩  
 (大) 度 問ふ 簾  
 (ノ) とふ 簾  
 (彰) とふ 簾  
 (明) 吹 たひにとふ人ありとをとろけは簾 うこかす風の下 荻  
 (伊) とふ 簾  
 (島) とふ を 簾  
 (祐) ふく とふ した

(三) 簾  
 (書) 簾  
 (静) \* (静) は「下萩」の「萩」ミセケチ「萩」と傍書。  
 (内) とふ 簾 した  
 (神1) とふ 簾  
 (統) とふ 簾  
 (統書) とふ 簾  
 (続内) とふ 簾  
 (神2) とふ 簾 はき  
 七番 左 春暁月」(国)(内)(静)  
 (国) 棹 姫 の霞 の袖の山 かつら引 とく櫛 かのこる夜の月  
 (大) さほひめ ひき 残る  
 (ノ) さほ さほひめ 残る  
 (彰) さほひめ 棹 姫 の霞 の袖の山 かつら引 とく櫛 かのこる夜の月  
 (明) 棹 姫 の霞 の袖の山 かつら引 とく櫛 かのこる夜の月  
 (伊) 残る  
 (島) さほひめ かつみ やま 残る  
 (祐) さほひめ かつみ やま 残る  
 (書) さほ 残る  
 (三) さほ 残る  
 (静) さほ 残る  
 (内) さほ 残る  
 (神1) さほ 残る  
 (続) さほ ひき 残る

(続書) さほ ひき くし 残る  
 (続内) さほ ひき くし 残る  
 (神2) さほ ひき くし 残る

右 河辺月

(国) 宮 人のみし夜の月に花 薄 まねくそのこる宇治のかはかせ

(大) 世 すすき うち 河

(ノ) よ 川

(彰) 見 うち 川

(明) 宮 人のみしよの月に花 薄 まねくそのこる宇治の川 かせ

(伊) よ 川

(島) よ 川

(祐) 見 よ はなすすき 川 風

(書) 見 川

(三) 見 河

(静) 見 川

(内) 見 すすき 川

(神1) 見 川

(続) みや 残る 河 風

(続書) みや 残る 河 風

(続内) みや 残る 河 風

(神2) みや 見 残る 河 風

\* (神2) は「月にも」の「も」にミセケチ 書き損じか。

八番 左 帰鷹「二オ(明)(伊)(神1)(二オ) の袖につく鷹 かね

(国) たをやめの誰 に引 とく帯ならむ霞

(大) たれ かり金

(ノ) たれ ん

(彰) たれ

(明) たをやめのたれに引 とく帯ならむ霞 の袖につく鷹 金

(伊) たれ 鷹 金

(島) たれ かり

(祐) たれ ひき かつみ かり

(書) たれ かり

(三) ん 金

(静) ん 金

(内) ん かり 金

(神1) と かり 金

(続) と かり

\* (続) は他本「たれに」を「たれと」と作る。(続) 系はいずれも同文。

(続書) と かり

(続内) と かり

(神2) と ん かり

右 初鷹「(彰) 湊 田やあまのかるてふ稲 舟 をほなみにみればわたる鷹 金

(国) 湊 田やあまのかるてふ稲 舟 をほなみにみればわたる鷹 金

(大) みなと かね

(ノ) みなと かね

(彰) みなと いな かり かね

(明) 湊 田やあまのかるてふ稲 舟 をほなみにみれば渡る鷹 金

(伊) (もミセケチに) 渡る

\* (明) の「ほなみに」は一見「ほなみも」に見える。(伊) は明星本を見た証



(神2) われ

波

十番 左 松藤

(国) 花ちらす風のやとりを松にみて恨 やかくる春 のふちなみ

(大) 藤 浪

(ノ) 藤 浪

(彰) 藤 浪

(明) 花ちらす風のやとりを松にみて恨 やかくる春 の藤 なみ

(伊) し

(島) 藤 浪

(祐) 藤 浪

(書) 藤 浪

(三) 藤 浪

(静) 藤 浪

(内) 藤 浪

(神1) 藤 浪

(統) 藤 浪

(統書) 藤 浪

(統内) 藤 浪

(神2) 藤 浪

右 秋霜「ニウ(明)(伊)(神1)(彰)(ニウ)

(国) 染 かねてのこるか松に夢路をは 夜のまにからす秋の初霜

(大) はつ

(ノ) よ 枯す はつ

(彰) よ はつ

(明) 染 かねてのこるか松に夢路をは よのまに枯らす秋の初霜

(伊) よ 枯す はつしも

(島) よ 枯す はつ

(祐) よ 枯す はつ

(書) よ 枯す はつ

(三) よ 枯す はつ

(内) よ 枯す はつ

(神1) よ 枯す はつ

(静) よ 枯す はつ

(統) よ 枯す はつ

(統書) よ 枯す はつ

(神2) よ 枯す はつ

十一番左 遠山霞薄

(国) そと浜 の霞 とみるや富士のねの山を岩 ほの天 のは衣

\* (国) が「そと浜」とする。最終形態か。「うと浜」の例は多い。「そと浜」に

は正徹の例がある。「うと浜」の可能性も否定できない。

(大) う 見 ふし 天 ×羽衣

(ノ) う 見 ふし 羽衣

\* (ノ) は「岩」のあとに小字で「ほ」と傍書。書き損じ故だろう。

(彰) 見 ふし

\* (彰) は「うと浜」の「う」にミセケチ「そ」と傍書。(国) で校訂したか。

(明) うと浜 の霞 とみるや富士のねの山を岩 ほの天 の羽衣

(伊) う かすみ 羽 はころも

(島) う はころも

(祐)	う	はま	見	ふし	あま	はころも
(書)	う	はま	見			
(三)	う	はま	見			
(内)	う	はま	見			
(神1)	う			いはほ		
(静)	う					
(統)	う			根	いはほ	羽
(統書)	う			根	いはほ	羽
(続内)	う			根	いはほ	羽ころも
(神2)	う			根	いはほ	羽

右 初秋朝雲」(国)(静)(ノ)

(国)	今朝たつはいつれの雲	そ一葉吹風	も音	せずちる雨もなし
(大)	けさ			散
(ノ)			をと	
(彰)			をと	
(明)	今朝立×はいつれの雲	そ一葉吹風	も音	せずちる雨もなし
(伊)	立×			
(島)	立×	くも		
(祐)	立×	くも		
(書)	立×		をと	
(三)				
(静)				
(内)	×朝立×		かせ	
(神1)	立×			

\* (内) は「今」がない、独自本文。

(統)					
(統書)					
(続内)					
(神2)					

十二番左 戸外春風

(国)	花のかを松	の戸とつる音	さえてなを雪ちらす春の山	かせ
* (国)	は「さして」とも読めるが他本同様に「さえて」ではないか。			
(大)	香まつ			
(ノ)	香まつ			
(彰)		と	をと	猶
(明)	花の香をまつの戸とつる音	さえて猶	雪ちらす春の山	風
(伊)	香まつ			
(島)	香まつ			
(祐)	香まつ			
(書)	香まつ			
(三)	香			
(静)				
(内)	香			
(神1)	香			猶
(神2)	香			猶
(続内)	香			猶
(続書)	香			猶
(神1)	香			猶
(内)	香			猶
(神2)	香			猶

右 月契多秋」(大)(彰)



\* (統) は他 (内閣) 本「ありて」とするのを「あかて」と作る。独自本文。

(統書) あかて恨 むなり尾花 花  
 (統内) あかて恨 むなり尾花 花  
 (神2) あかて恨 むなり尾花 花

十四番左 水郷柳 (島) (祐)

(国) 橋 姫 の思 ひの煙 春 そへて柳 になひくうちの川かせ

(大) ひめの思 の 河風

(ノ) はし 宇治 河風

(彰) 思 × 河

(明) 橋 姫 の思 ひの煙 春 そへて柳 になひく宇治の川風

(伊) 宇治 風

(島) ひ けふりはる も 宇治 風

(祐) おもひ けふりはる やなきも 宇治 風

\* (島) は (明) の「柳に」の「に」を「柳も」と読んだ。(祐) は (島) を受けた。(明) の「に」は「も」に似ている。

(書) 宇治 風

(三) おもひ 河

(静) おもひ 河

(内) やなき 河

(神1) 宇治 河風

(統) おもひ 河風

(統書) おもひ 河風

(統内) おもひ 河風

(神2) おもひ 宇治 河風

右 七夕木 (彰)

(国) 春ならて今 一しほやほしさきの松も契 に色まさるらん

(大) 星

(ノ) 星 崎

(彰) 星 崎

(明) 春ならて今 一しほや星 崎 の松も契 に色まさるらん

(伊) 星 崎

(島) いま 星 崎

(祐) いま 星 崎

(書) 星 崎

(三) 星 崎

(静) 箱 崎

(内) 箱 崎

\* (内) は「箱崎」と作る。

(神1) いま 箱 崎

(統) いま 箱 崎

\* (統) は (星イ・傍書) 異本は (内)。

(統書) いま 星 崎

\* (統書) は (神2) と同じく、「星」とつくる。

(統内) いま 星 崎

(神2) いま 星 崎

十五番左 初春待花

(国) 神の代の春にそあくる天地も花のためにや開 そめけん

(大) 世も へ の為 ひらけ初 け

\* (大) は他本「天地も」を「天地へ」と作る。初期形態か。





右 山鹿

(国) 楨 ひはらつれなき色 を秋山 になして妻 とふさをしかの声  
 (大) 楨原  
 (ノ) 楨原  
 (彰) 楨原 つま ほ 小男鹿  
 (明) 楨原 つま  
 (伊) 楨原 つま  
 (島) 楨原  
 (祐) 楨原 いろ やま  
 (書) まき  
 (三) こゑ  
 (静) こゑ  
 (内) 楨原 こゑ  
 (神1) 楨原 小男鹿  
 (続) 楨原 小男鹿  
 (続書) 楨原 小男鹿  
 (続内) 楨原 こ 小男鹿  
 \* (続内) は「妻こふ」と読める。  
 (神2) 楨原 小男鹿  
 十八番左 初春雪「(明)(伊)(神1)(四オ)  
 (国) ふる年につもるはきえて九重や又 めつらしき春の初雪「四(国)  
 (静)  
 (大) 消て  
 (ノ) 消て  
 はつ

(彰) 消て

(明) ふる歳につもるはきえて九重や又 めつらしき春の初雪  
 (伊) はつゆき  
 (島) また  
 (祐) とし また  
 (書) 消て  
 (三) に  
 (静) はつ  
 \* 「九重や」の「や」にミセケチ「に」。よって独自本文となった。独自の本文となった。(静)は原則的に(国)と同じ。帳合も同じ。  
 (内) 積る 消て はつ  
 (神1) 消て はつ  
 (続) 消て  
 (続書) 消て  
 (続内) 消て はつ  
 (神2) 消て  
 右 初秋月「大」(彰)  
 (国) たつた姫秋きにけりと月のまゆ出 て誰 にかむかひ初 けん  
 \* (国) は他本「そむらん」とするの、「初けん」と作る。しかし、意味的に「らん」がよい。「そめけん」は(三)・(内)の本文を襲ったか。  
 (大) 立田 いて、 向ひ らむ  
 (ノ) 立田 いて、たれ そむらん  
 (彰) 立田 たれ らん  
 (明) 立田 姫秋きにけりと月のまゆ出 てたれにかむかひ初 らむ  
 (伊) 立田 たれ そむらん

(島)	立田	「めけん」ミセケチ「むらん」	たれ	む	(祐)	野	たもと	
(書)	立田	いてゝたれ	たれ	む	(書)	野		
* (書) 〓 (明)。					(静)			
(三)					(神1)			
(静)					* (神1) は末句「たよりに」に作る。独自本文。「使」と「使」と読んだか。			
					(続)	辺		
					(続書)	野辺		
					(続内)	野辺		
(内)	断田				(神2)	野辺		
(神1)	立田							
(続)	龍田				右	月秋友		
* (続) は末句「向ひそむらん」と作る。独自本文。					(国)	くもるなようきもつらきも月ひとり我	なくさむる蓬	生の宿
(続書)	龍田				(大)		独×我	
(続内)	龍田				(ノ)		われ	
(神2)	龍田				(明)	曇	なようきもつらきも月ひとりわれなくさむるよもきふのやと	
十九番左 行路梅(島)(祐)					(伊)	曇	われ	
(国)	道のへにしはしそとまる梅	かゝの袂	ひかふる風のつかひに		(島)	曇	われ	
(大)		むめ	たもと		(祐)	曇	われ	
(ノ)	みち野		たもと		(書)		われ	
(彰)					(三)		独×我	
* (彰) は(神1)と末尾が同文。					(静)			
(明)	みち野へにしはしそとまる梅	かゝの袂	ひかふる風の使		(内)		われ	
(伊)	みち野				(神1)		われ	
(島)	みち野				(彰)	曇	×な	

(統) 曇る 憂も われ  
 (統書) 曇る 憂も われ  
 (統内) 曇る 憂も われ  
 (神2) 曇る 憂も われ

廿番 左 若菜

(国) さほ姫 の霞 うちへ野へに立 みとりの袖や若 なつむらん

\* (国) は他本「つむ」を「立」に作る。最終形態か。

(大) ひめ の つむ わか なる

(ノ) かすみ の 摘 みとり わか なる

(彰) の つむ 奈なる

(明) 棹 姫 の霞 うちへ野へにつむ緑 の袖やわかななるらん

\* (大・明) は「つむ」と作る。

(伊) 棹 つむ緑 わか なる

(島) 棹 つむ緑 わか なる

(祐) ひめ 辺 つむ わか なる

(書) 立 菜 つむ む

\* (書) 〓 (国)、(明) とは異なる本文。

(三) つむ わか 摘 ら

(静) つむ なる

\* (静) は、「野へに立」の「立」ミセケチ「つむ」、「わかなつむらん」の「つむ」ミセケチ「なる」。(国) 本から(大) 本に戻っている。

(内) 棹

\* (内) は(国) と同じ本文。

(神1) 棹

\* (神1) は(国) と同様、「立」につくる。(内)・(統) と同文。

(統) 辺 わか 摘 ら  
 \* (統) は(国)・(内) と同じ本文。  
 (統書) 辺 わか 摘 ら  
 (統内) 辺 わか 摘 ら  
 (神2) 辺 わか 摘 ら

右 萩風 (国) (明) (伊) (静) (神1) (彰) (四ウ)

\* (静) は「萩」ミセケチ「萩」と傍書。

(国) 大かたに出るはきかん春の花 秋も心を萩のうは風

\* (国) は他本「いつか」を「出る」と作る。「いつか」と書こうとして「出る」となったか。

(大) いつか おき

(ノ) いつか む

(彰) おほ いつか こゝろ

(明) 大かたにいつかはきかむ春の花 秋も心を萩のうはかせ

(伊) いつか む こゝろ

(島) いつか はる こゝろ

(祐) いつか むはるのはな こゝろ おき

(書) いつか む おき

(三) いつか む

(静) いつか む

\* 「萩」ミセケチ「萩」。

(内) おほ いつか こゝろ

\* (内) は「おほとり」の「とり」に縦線を引き「かた」と傍書。

(神1) おほ いつか む

(統) つか  
 (統書) つか  
 (統内) つか  
 (神2) つか  
 かせ  
 かせ  
 かせ

廿一番左 遠尋花

(国) もろこしは大 和に有 てよしの山 花に及 はぬ苔 のふるみち  
 (大) あり 吉野 をよ 古道  
 (ノ) あり 吉野 をよ 古道  
 (彰) あり 吉野 をよ 古道  
 (明) もろこしは大 和にありて吉 野山 花にをよはぬ苔 の古道  
 (伊) あり 吉野 をよ 古道  
 (島) あり 吉野やまはな をよ 古みち  
 (祐) あり やま をよ 古みち  
 (書) あり 吉野 をよ 道  
 (三) ありと芳 野山 をよ 道  
 (静) ありと芳 野山 をよ 道  
 (内) をよ 道  
 (神1) 吉野 をよ 古道  
 (統) やまと ありと吉野 をよ 道  
 \* (統) は他本「大和にありて」を「やまとにありと」と作る。独自本文か。  
 (統書) やまと ありと吉野 をよ 道  
 (統内) やまと ありと吉野 をよ 道  
 (神2) やまと ありと吉野 をよ 道

(国) 初瀬山尾 上の月に鐘 のこゑともに名たかき秋の空 かな  
 (大) はつせ山おのへ 声 哉  
 (ノ) はつせ 声  
 (彰) 泊 そのへ 声  
 (明) 泊 瀬山尾 上の月に鐘 の声 とともに名たかき秋の空 哉  
 (伊) 泊  
 (島) 泊 かね 哉  
 (祐) 泊 かね 哉  
 (書) 泊 かね 哉  
 (三) はつせ山 哉  
 (静) せ 哉  
 (内) はつせ山おのへ 哉  
 (神1) 泊 かね 高き 哉  
 (統) 泊 かね 高き  
 (統書) 泊 かね 高き  
 (統内) 泊 かね 高き  
 (神2) 泊 かね 高き  
 廿一番左 花盛久  
 (国) 開のこす花 こそなけれ十かへりの松もやまじる高砂の山  
 (大) さき はな  
 (ノ) さき  
 (彰) 咲  
 (明) さきのこす花 こそなけれ十かへりの松もやまじる高砂の山  
 (伊) さき  
 (島) さき

右 十五夜月(大)

」

(祐) さき はな やま

(書) さき と

\* (書) は他本「十」を「と」につくる。訓みと意味は同じ。

(三)

(静)

(内)

(神1)

(続)

\* (続) は他本「のこす」を「残る」と作る。

(続書)

(続内)

(神2)

右 水辺菊(ノ)(彰)

(国) 天 川あふ瀬もかくや白菊のほしをうかふる庭のやり水

(大) 河 せ しら 遣

(ノ) せ せ しら 星

(彰) 天 川 瀬もかくや白菊の星をうかふる庭の遣水

(明) 河 逢 せ しら 星

(伊) 河 逢 せ しら 星

(島) 河 逢 せ しら 星

(祐) 河 逢 せ しら 星

(書) 河 逢 せ しら 星

(三) 河 逢 せ しら 星

(静) 天 河 逢 せ しら 星

(内) 天 河 逢 せ しら 星

(神1) あまの 星

(続) 河 せ

(続書) 河 せ

\* (続書) 〓 (神2)。

(続内) 河 せ

(神2) 河 せ

\* (神2) は(続)・他本「うかふる」を「うかむる」とする。誤写か。

廿三番左 花随風(明)(伊)(神1)(五オ)

(国) とらぬ花も我世をさかの山身をうき雲の風にまかせて

(大) はな わか 任 て

(ノ) わか

(彰) とらぬ花もわか世をさかの山身をうき雲の風にまかせて

(明) とらぬ花もわか世をさかの山身をうき雲の風にまかせて

(伊) わか

(島) わか

(祐) わか

(書) □

\* (書) は「花」の後は虫食いのためか判読しにくい。おそらく「も」だと思わ

れる。

(三) はな わか ×× 任 て

\* (三) は「うき」が脱字。

(静) \* 「随て」ミセケチ「まかせて」と傍書。

(内) 嵯峨

(神1)

(統) わか

(統書) わか

(統内) のわか

\* (統内) は他本「花も」を「花の」に作る。独自本文。

(神2) わか

右 臥待月

\* (統書) 風にミセケチ「臥」と傍書。

(国) 秋はきの下葉の露もさ夜深 てひとりね待 の月をみる哉

(大) 萩 独 ね

(ノ) 小 ふけ まち

(彰) ふけ

(明) 秋萩 の下葉の露もさ夜ふけてひとりねまちの月をみる哉

(伊) 萩 まち

(島) 萩 ふけて まち かな

(祐) 萩 ふけて まち 見

(書) 萩 ふけ まち 見

(三) 更て

(静) 更て

(内) かせ 更

\* (内) は「秋萩」ではなく「秋風」と作る。誤写か。

(神1) 萩 見

(統) 萩 小 更て独 ねまち

(統書) 萩 小 更て独 ねまち

(統内) 萩 小 更て独 ねまち

(神2) 萩 小 更て独 まち

廿四番左 霞春衣(島)(祐)

(国) 諸人のうへにとり着は知 からむ春の衣 をたつ霞 かな

(大) もろ 上 き かな

(ノ) 上 きしる ん

(彰) きしる かな

(明) 諸人の上 にとりきはしるからむ春の衣 をたつ霞 かな

(伊) 上 きしる 哉

(島) 上 きしる ん

(祐) 上 きしる ん ころも かすみ

(書) 上 きしる かな

(三) 上 きしる

(静) しる

\* (静) は「とり丞」の「丞」ミセケチ「着」、「知」ミセケチ「しる」と傍書。

(内) もろ 上 きしる ん

(神1) 上 きしる ん

(統) きしる かな

(統書) きしる かな

(統内) きしる かな

(神2) きしる かな

右 初秋露(大)(彰)

(国) もろこしやいつくの国の露 ならむ西 よりちらす秋の初 風

(大) ん 秋のちらす

(ノ) ん 秋のちらす

(彰) むろこしやいつくの国の露 ならん西 より秋のちらす初 風  
 (明) 秋のちらすはつかせ  
 (伊) とき 得る もり  
 \* (伊) の「得る」は誤写か  
 (島) に  
 \* (島) は「若年も」の「も」ミセケチ「に」と傍書。  
 (祐) おひ やまかせ  
 (書) 秋のちらすはつかせ  
 (書) 秋のちらす かせ  
 \* (書) 唐 や  
 (三) 秋のちらす  
 \* (三) は(国)と傍書。  
 (三) 秋のちらす  
 \* (三) は(国)と同文。  
 (静) 秋のちらす かせ  
 \* (国) と同じ。  
 (内) 秋のちらすはつかせ  
 \* (内) は(明)と同じで(国)と異なる。  
 (神1) 秋のちらす  
 (続) 秋のちらす  
 \* (続) は(大)・(明)・(内)と同じ。  
 (続書) 秋のちらす  
 (続内) 秋のちらす  
 (神2) 秋のちらす  
 廿五番左 残雪「(国) (静)  
 (国) 時 をえて老 その杜 も若 年にいたく雪をはらふ山 風  
 (大) 森 森 森  
 (ノ) 森 森  
 (彰) 森 森

(明) 時 をえて老 その杜 も若 年にいたく雪をはらふ山 かせ  
 (伊) とき 得る もり  
 \* (伊) の「得る」は誤写か  
 (島) に  
 \* (島) は「若年も」の「も」ミセケチ「に」と傍書。  
 (祐) おひ やまかせ  
 (書) 秋のちらすはつかせ  
 (書) 秋のちらす かせ  
 (三) 秋のちらす  
 \* (三) は他本「森」を「松」に作る。誤読故か。  
 (静) 秋のちらす かせ  
 (内) 秋のちらすはつかせ  
 (神1) 秋のちらす  
 (続) 秋のちらす  
 (続書) 秋のちらす  
 (続内) 秋のちらす  
 (神2) 秋のちらす  
 右 萩風「(明) (伊) (神1) (五ウ)  
 \* (静) 「萩」ミセケチ「萩」と傍書。  
 (国) 萩はらやなれも嵐 にふしなから 我 おとろかす夢の通 路  
 (大) 萩はらやなれも嵐  
 (ノ) 原 われ  
 (彰) 萩はらやなれも嵐  
 (明) 萩はらやなれも嵐 に臥 なから われおとろかす夢のかよひ路  
 (伊) 臥 われ かせ

(島) 駄 「われ かよひ  
 (祐) 原 あらし 「われ かよひち  
 (書) 原 われ ち  
 (三) かよひ路  
 (静) \*「萩」ミセケチ「萩」と傍書。  
 (内) 原 あらし  
 (神1) 原 われ ち  
 (統) 原 かよひち  
 (統書) 原 かよひち  
 (続内) 原 かよひち  
 (神2) 原 かよひち

廿六番左 月前梅  
 (国) まきの戸をおし明 かたの梅 かゝに霞 てしたふ月そのこれる  
 (大) 榎 の を むめ かすみ 残れ  
 (ノ) 榎 の を あけ 香 残れ  
 (彰) まきの戸ををし明 かたの梅 かゝに霞 てしたふ月そのこれる  
 (明) \* (明) の「梅かえ」は「梅かゝ」と誤りやすい。  
 (伊) を を  
 (島) を を かすみ  
 (祐) を を  
 (書) あけ  
 (三) 残れ  
 (静) 残れ

(内) 明け  
 (神1) 榎 の を  
 (統) 榎 の 残れ  
 (統書) 榎 の 残れ  
 (続内) 榎 の 残れ  
 (神2) 榎 の 残れ

右 原上月「彰」  
 (国) みし人のいく世をとひて夢の原 露を涙 に月やとらん  
 \* (国) の「夢の原」では文意不明。「夢」と「草」の草書体は似ている故に誤ったか。おそらくそうであると思われる。  
 (大) 幾 問て草 はら  
 (ノ) 幾 草  
 (彰) 見 幾 草  
 (明) みし人の幾 世をとひて草 原 露を涙 に月やとらん  
 (伊) 幾 草  
 (島) 幾 草  
 (祐) 見 幾 草 はら なみた む  
 (書) 草 はら む  
 (三) 草  
 (静) 見 草  
 \* 「草の原」と記す。何を見たか。  
 (内) 見 幾 草  
 (神1) 見 草  
 (統) 見 草 泪  
 (続書) 見 草 泪

(続内) 見 草 泪  
 (神2) 見 草 泪

廿七番左 尋花

(国) 桜 かりあけはいつくの花を みる形 見の雲の夕 暮 の 雨  
 (大) さくら いかなる花 かたみ  
 (ノ) くれ

(彰) 桜 かりあけはいつくの花を みる形 見の雲の夕 暮 の 雨  
 (明) かりあけはいつくの花を みる形 見の雲の夕 暮 の 雨  
 (伊) みる形 見の雲の夕 暮 の 雨  
 (島) はな  
 (祐) はな 見 かたみ ゆふくれ  
 (書) はな みる くれ  
 (三) はな みる くれ  
 (静) む みる くれ  
 (内) むかたみ みる くれ  
 (神1) 見 かたみ みる くれ  
 (続) 見 かたみ みる くれ

(神1) 見 かたみ みる くれ  
 (続) 見 かたみ みる くれ

(続) 見 かたみ みる くれ  
 (神1) 見 かたみ みる くれ

(続) 見 かたみ みる くれ  
 (神1) 見 かたみ みる くれ

(続) 見 かたみ みる くれ  
 (神1) 見 かたみ みる くれ

(続) 見 かたみ みる くれ  
 (神1) 見 かたみ みる くれ

(続) 見 かたみ みる くれ  
 (神1) 見 かたみ みる くれ

(続) 見 かたみ みる くれ  
 (神1) 見 かたみ みる くれ

(続) 見 かたみ みる くれ  
 (神1) 見 かたみ みる くれ

(続) 見 かたみ みる くれ  
 (神1) 見 かたみ みる くれ

(続) 見 かたみ みる くれ  
 (神1) 見 かたみ みる くれ

(続) 見 かたみ みる くれ  
 (神1) 見 かたみ みる くれ

\* (神2) は (続) の異本が反映されていない。

右 待月 (大)

(国) 出ぬまは扇 をあけて先 やみんまたれてをそき山のはの月  
 (大) いて 待た 遅き 端  
 (ノ) いて まつ 端

(彰) いて 待た 遅き 端  
 (明) いてぬまは扇 をあけて先 やみんまたれてをそき山のはの月  
 (伊) いて 待た 遅き 端  
 (島) いて 待た 遅き 端  
 (祐) いて 待た 遅き 端  
 (書) いて 待た 遅き 端  
 (三) いて 待た 遅き 端  
 (静) いて 待た 遅き 端  
 (内) いて 待た 遅き 端  
 (神1) いて 待た 遅き 端  
 (続) いて 待た 遅き 端

(続) いて 待た 遅き 端  
 (神1) いて 待た 遅き 端

(続) いて 待た 遅き 端  
 (神1) いて 待た 遅き 端

(続) いて 待た 遅き 端  
 (神1) いて 待た 遅き 端

(続) いて 待た 遅き 端  
 (神1) いて 待た 遅き 端

(続) いて 待た 遅き 端  
 (神1) いて 待た 遅き 端

(続) いて 待た 遅き 端  
 (神1) いて 待た 遅き 端

(続) いて 待た 遅き 端  
 (神1) いて 待た 遅き 端

(続) いて 待た 遅き 端  
 (神1) いて 待た 遅き 端

(続) いて 待た 遅き 端  
 (神1) いて 待た 遅き 端

(続) いて 待た 遅き 端  
 (神1) いて 待た 遅き 端

(続) いて 待た 遅き 端  
 (神1) いて 待た 遅き 端

(続) いて 待た 遅き 端  
 (神1) いて 待た 遅き 端

廿八番左 山霞 (明) (伊) (神1) (ノ) (六オ)  
 天津袖なつるはしらす岩 国 や山は春きて立霞 かな

(国) 天津袖なつるはしらす岩 国 や山は春きて立霞 かな  
 (大) たつかすみ  
 (ノ) たつかすみ  
 (彰) たつ かな

(明) 天津袖なつるはしらす岩 国 や山は春きてたつ霞 かな  
 (伊) そ たつ  
 \* (伊) は「つみせけちそ」「なつる」ではなく「なそる」、意味から変えたか。  
 (島) たつ  
 (祐) たつかすみ  
 (書) たつかすみ  
 (三) 哉  
 (静) かすみ  
 (内) かすみ  
 (神1) たつ  
 (続) いはくに  
 (続書) いはくに  
 (続内) なつる いはくに  
 \* (続内) は「なつる」に「本ノマ、」と傍書。  
 (神2) いはくに たつ  
 右 山霧」(彰) たつ  
 (国) 夕日影 山は下 てるもみち葉に紅 くゝる嶺 の秋 きり  
 (大) 紅 葉ゝ くれなる 峯  
 (ノ) した 紅 葉ゝ  
 (彰) 紅 葉は あき  
 (明) 夕日影 山はしたてる紅 葉はに紅 くゝる嶺 のあきぎり  
 (伊) した 紅 葉ゝ あき  
 (島) した 紅 葉は あき  
 (祐) した くれなる あき  
 (書) した 紅 葉は 峯

(三) 霧  
 (静) 霧  
 (内) かけ した 紅 葉は あき霧  
 (神1) のした は みね 霧  
 \* (神1) は(大)(明)(国)「山は」とするのに、「山の」とする。誤写か。  
 (続) 紅 葉ゝ くれなる あき霧  
 (続書) 紅 葉ゝ くれなる あき霧  
 (続内) 紅 葉ゝ くれなる あき  
 (神2) 紅 葉ゝ くれなる あき霧  
 廿九番左 河辺柳」(島)(祐)  
 (国) 風しふく川そひ柳 一 かたに青葉みたれてちるつはめ哉  
 (大) 河 かな  
 (ノ) 河 かな  
 (彰) 河 かな  
 (明) 風しふく河そひ柳 一 かたに青葉みたれてちるつはめ哉  
 (伊) 河 かな  
 (島) 河 やなき  
 (祐) 河 ひと  
 (書) 河 有は 散つ  
 (三) 有は 散つ  
 \* (三) は他本「青葉」を「有は」と作る。書き損じか。 かな  
 (静) 河 かな  
 \* 「雨十月」ミセケチ「青」と傍書。  
 (内) 河  
 (神1) 河



(明)	照	射せし思	ひを秋にしひか	ね	弓張	月に鹿や鳴	らむ
(伊)	照	射					
(島)	照	射					
(祐)	照	射	おもひを				
(書)			おもひ				
(三)							
(静)							
(内)	照	射					
(神1)							
(統)	照	射	おもひ				
(統書)	照	射	おもひ				
(統内)	照	射	おもひ				
(神2)	照	射	おもひ				
卅一番左	梅風						
(国)	句	きて万	梢に梅一	木わか春なる山	風	の	声
(大)							
(ノ)							
(彰)	句	ひ	我	春			
(明)	にほ	ひきて万	梢に梅一	木我	春なる山	風	のこゑ
(伊)	にほ	ひ	我				
(島)	にほ	ひ	ひと木我				
(祐)	にほ	ひ	ひと木我				
(書)	にほ	ひ					
(三)							
(静)							

(静)	は	(国)	と同じ。
(内)	句	ひ	
(神1)	にほ	ひ	
(統)	句	ひ	よろつ
(統書)	句	ひ	よろつ
(統内)	句	ひ	よろつ
(神2)	句	ひ	よろつ
右	萩風		
(国)	萩	原	やほに出て後
(大)			
(ノ)			
(彰)	は	ら	やほにいて、後
(明)	は	ら	やほにいて、後
(伊)	は	ら	はあまのすむとまやを浪のうつ嵐
(島)	は	ら	はあまのすむとまやを浪のうつ嵐
(祐)	は	ら	はあまのすむとまやを浪のうつ嵐
(書)			
(三)			
(静)			
(内)	おき	は	ら
(神)			
(書)			
(三)			
(静)			
(内)			



(伊) 河内め なか

(島) 河内め なか はる

(祐) 河内め かすみ いと なか はるのあをやき

(書) 河内め いと なか はるのあをやき

(三) 河内め いと なか はるのあをやき

(静) 河内め そてを なか

(内) 河内め そてを なか

\* (内) は他本「袖」を「そて」につくる。

(神1) 河内め 手深を

\* (神1) は「手深を」につくる。「を」もそうだが、なぜ「手深」にしたのか、

訓みは「そて」なのか、不詳。

(統) 河内 緒

\* (統) は「霞の袖に」に「露の手染めをイ」と傍書。

(統書) 河内 緒

(続内) 河内 緒

(神2) 河内 緒

あを

右 萩露「大」(ノ)

\* 国会図書館本では、春秋部三十三番右歌から三十九番右歌題までが欠落している。よって、これらの箇所では、明星本を基準本文とする。

(国) 欠文 高 円 の昔 よいかに萩 の戸の露分 出つる月のみや人

(大) むかし むかし いつ 宮

(ノ) むかし むかし いつ 宮

(彰) たかまと むかし いつ 宮

(明) 高 円 の昔 よいかに萩 の戸の露分 出 る月の宮人

(伊) ×

\* (伊) は高沙の「沙」ミセケチ「円」と傍書。

(島) ×

(祐) むかし はき いつ 宮

(書) むかし わけ出×る 宮

(三) むかし 出×る 宮

(静) むかし 宮

(内) 宮

(神1) 宮

(統) むかし 宮

(統書) むかし 宮

(続内) むかし 宮

(神2) むかし 宮

卅四番左 鶯(島)(祐)(静)

春さむきやふしかくれにつたひきてなかなぬもまじる菌 の鶯

(国) 欠文

(大) 寒 き その

(ノ) その

(彰) 春さむきやふしかくれにつたひきてなかなぬもまじる菌 の鶯

(明) 春さむきやふしかくれにつたひきてなかなぬもまじる菌 の鶯

(伊) 春さむきやふしかくれにつたひきてなかなぬもまじる菌 の鶯

(島) 春さむきやふしかくれにつたひきてなかなぬもまじる菌 の鶯

(祐) 春さむきやふしかくれにつたひきてなかなぬもまじる菌 の鶯

(書)

(三) み

\* (三) は(静)と同じく「さむみ」、また、「なかぬまも」と作る。こちらは目移りによる書き損じか。

(静) み

\* (静) は「さむみ」の「み」に「きイ」と傍書。

(内) 藪

(神1)

(統) 寒き

(統書) 寒き

(統内) 寒き

(神2) 寒き

右 虫(彰)

とはるへきたれ松 むしの秋ふけて生 田の小野に声 よはるらん

(国) 欠文

(大) 待 虫

(ノ) まつ

(彰) 虫

(明) とはるへきたれ松 虫 の秋ふけて生 田の小野に声 よはるらん

(伊) 虫

\* (伊) は森野の「森」ミセケチ「小」と傍書。

(島) まつ

(祐) まつ

(書) 深 て

(三) まつ 更 ていくた おの

(静) 誰

(内) 誰

(神1) 誰 深 て

(統) 誰 虫

(統書) 誰 虫

\* (統書) は「とはぬ」の「ぬ」にミセケチ「る」と傍書。

(統内) 誰 虫

(神2) 誰 虫

卅五番左 花句

花に吹 山風 よりも夕月夜ひかりにとをく行くにほひかな

(国) 欠文

(大) かせ

(ノ) かせ

(彰) かせ

(明) 花に吹 山風 よりも夕月夜光 にとをく行くにほひ哉

(伊) 光

(島) 光

(祐) はな

(書) かせ

(三) かせ

(静) 光

(内) 光

(神1) 遠く

(統) 遠く

(統書) 遠く





(彰)

(明) 吹風 のしからみかけて春 まても松 にはなさぬ鳶の紅葉は

\* (明) は「吹風に」の「に」にミセケチ「の」と改訂。「音」を「春」に変えたか。但し、意味的には「音の方がよい。(明)の誤写の可能性が高い。

(伊)

(島)

(祐)

(書)

の をと

\* (書) は(明)と同じく「吹風に」の「に」にミセケチ「の」、但し、「をと」とあるように、「春」ではない。意味的には秋の歌であるので、「音」がよい。

(三)

(静)

に 音

もみちは

\* (大) (ノ) (三) (内) (統) (静) は「吹風に」とし、(大)・(統)・(静)は「音までも」とする。

(内)

(神1)

\* (神1) は(大)に近い。

(統)

(統書)

(統内)

(神2)

に 音

まつ

ゝ

卅八番左 初春祝 (明) (伊) (神1) (八せ)

すゑとをくのどけかるべき若 年の山口 みえて出る日のかけ

(国) 欠文

(大)

わか年

影

(ノ)

(彰) は「のどけひ」の「ひ」にミセケチ「か」と傍書。 見 いつる 影

\* (彰) は「のどけひ」の「ひ」にミセケチ「か」と傍書。 すゑとをくのどけかるべき若 年の山口 みえて出る日のかけ

(明)

(伊)

(島)

(祐)

とをく

見

(三)

(静)

(内)

(神1)

末 遠く

見

いつる

影

(統) 末 遠く

見

いつる

影

(統書) 末 遠く

見

いつる

影

(統内) 末 遠く

見

いつる

影

(神2) 末 遠く

見

いつる

影

右 初秋雨 (静) (彰)

都より四方にあまねくちらすへき露の初 や秋の村 雨

(国) 欠文

(大)

(彰)

都より四方にあまねくちらすへき露の初 や秋の村 雨

(明)

(伊)

とをく

見

いつる

影



\*ここから再び(国)が基準本文

四十番 左 山霞(国)

(国) 色かへぬ松にも春をしら鳥のとは山 とをくたつ霞 かな

(大) 遠 哉

(ノ) 遠 ぐ

(彰) 遠 ぐ

(明) 色かえぬ松にも春をしら鳥のとは山 遠 ぐ たつ霞 かな

(伊) え 立 ×

(島) え 遠 ぐ かすみ

(祐) え やま遠 ぐ かすみ

(書) へ 遠 ぐ

(三) 立 ×

(静) 立 ×

(内) 鳥羽 遠 ぐ 立 ×

(神1) え 鳥羽 遠 ぐ 立 × かすみ

\* (神1) の「色かえぬ」は「色からぬ」とも読める。

(続) 遠 ぐ 哉

(続書) 遠 ぐ 哉

「色からぬ」と一旦書いて、それから「ら」の上に「え」と上書きしたと思われる。とすれば、(神2) はそれを逆にうけとったか。

(続内) 遠 ぐ かすみ哉

(神2) ら 遠 ぐ 哉

\* (神2) は「色かえぬ」の「え」にミセケチ「ら」と傍書。

右 山霧(明)(伊)(神1)(彰)(ハウ)

(国) あくる夜の雪をくつして富士おろしなかとみるや秋のかはきり

(大) 明る ふし

(ノ) ふし

(彰) あくる夜の雪をくつして富士おろしなかとみるや秋の川きり

(明) 川霧

(伊) 川霧

(島) 川霧

(祐) 川霧

(書) 川霧

(三) 川霧

(静) 川霧

(内) 見

(神1) 川霧

(続書) 川霧

(続内) 川霧

(神2) 川霧

四十一番左 磯春草

(国) さえかへりつもるはきえて春の草わか雪 かくる磯の浪 かな

(大) 消て

(ノ) 我か雪

(彰) 我雪

(明) さえかへりつもるはきえて春の草わか雪 かくる磯の浪 哉

(伊) 波

(島) はる なみ 哉



(統) さく 河  
 (統書) さく 河  
 (統内) さく 河  
 (神2) さく 河  
 右 鹿声近枕」(大)(彰)  
 (国) ともしせし別 を鹿 や宮 城のく枕 によりて声 恨 らん  
 (大) みやき 野の こゑうらむ  
 (ノ) 野の うらむ  
 (彰) 箭 を 野の うらむ  
 \* (彰) は他本「別・わかれ」とするのを「箭」と作る。理由は不明。  
 (明) ともしせし別 を鹿 や宮 城のく枕 によりて声 うらむらん  
 (伊) しか 野の うらむ  
 (島) 野の うらむ  
 (祐) わかれ 野のまくら うらむ  
 (書) 照射 うらむ  
 (三) 野の うらむ  
 (静) 野の うらむ  
 (内) 野の こゑうらむ  
 (神1) こゑうらむ  
 (統) 照射 わかれ 野の うらむ  
 (統書) 照射 わかれ 野の うらむ  
 (統内) 照射 わかれ 野の うらむ  
 (神2) 照射 わかれ 野の うらむ  
 四十三番左 帰鷹」(明)(伊)(静)(神1)(九オ)

(国) はかなしな雲の浪まの春 の鷹 かすかく水と跡 そ消 ゆく  
 (大) 数 行  
 (ノ) 数 行  
 (彰) はかなしな雲の浪まの春 の鷹 かく水と跡 そ消 行  
 (明) 数 行  
 (伊) 数 行  
 (島) 数 行  
 (祐) はる かり数 あと きえ  
 (書) 間 かり 消 行  
 (三) 間 かり 消 行  
 (静) 波 かり の 消 行  
 (内) 波 かり の 消 行  
 \* (内) は「かすかく水と」ではなく「かすかく水の」と作る。意味を考えて変えたか。独自本文。  
 (神1) 波 かり数 きえ  
 (統) 波 数 きえ行  
 (統書) 波 数 きえ行  
 (統内) 波 数 きえ行  
 (神2) 波 数 きえ行  
 右 左右聞鷹  
 (国) しかの山やこゆる雲路にくる鷹の過 るも有 て わたる声 く  
 (大) すくる あり  
 (彰) すくる  
 (ノ) 志賀 路 来る こゑ  
 (明) しかの山やこゆる雲ちにくる鷹の過 るも有 て 渡るこゑく

(伊) ち 渡る  
 (島) ち 渡るこゑ  
 (祐) ち 渡るこゑ  
 (書) あり 渡るこゑ  
 (静) あり 渡るこゑ  
 (三) あり 渡るこゑ  
 (内) あり 渡るこゑ  
 (神1) あり 渡るこゑ  
 (神2) あり 渡るこゑ  
 \* (内) はほとんど別の歌になっている。「くる鴈」が「行鴈」そして、「声く」が「かり金」であるからだ。どうしてこうなったかは現段階では不詳である。「行鴈」「かり金」は「鴈」が二度使われており、奇異な印象を与える。

行 あり ×こゑ

\* (神1) は(内)と同様、「行鴈」と作る。

(続) 来 すくる あり 渡る  
 (続書) 来 すくる あり 渡る  
 \* (続書) は「すくるもあかて」の「か」にミセケチ「り」。書き損じか。

(続内) 来 すくる あり 渡る  
 (神2) 来 すくる あり 渡る

四十四番左 花盛(島)(祐)

(国) 山桜 枝 もとをゝにかたふきて木毎 にあまる花の色 哉  
 (大) さくら こと  
 (ノ) 遠を かな  
 (彰) 遠を  
 (明) 山桜 枝 も遠 をにかたふきて木ことにあまる花の色 哉  
 (伊) 遠を こと  
 (島) 遠を こと いろかな

(祐) えた 遠を こと いろ  
 (書) こと かな  
 (三) いろ  
 (内) 遠を こと かな  
 (神1) 遠を こと かな  
 (続) 遠を こと かな  
 (続書) 遠を こと かな  
 (続内) 遠を こと かな  
 (神2) 遠を こと かな

右 野月(国)(ノ)(彰)

(国) 秋の月半 は露の光 かな千くさを分る武蔵のゝはら  
 (大) 哉 草 原 むさし  
 (ノ) なかは、 ひかり 年 むさし  
 \* (ノ) は他本「千草・千種」とするの、「千年」と作る。連想による誤記か。

(彰) なかは 哉 原 むさし  
 (明) 秋の月なかは、露の光 哉 千草 を分るむさしの、原  
 (伊) なかは、 草 原 むさし  
 (島) なかは、 ひかり 草 わく 原 むさし  
 (祐) なかは、 ひかり 草 原 むさし  
 (書) なかは、 ひかり 草 わく 原 むさし  
 (三) なかは、 草 原 むさし  
 (内) なかは、 ひかり 草 原 むさし  
 (神1) ひかり哉 草 原 むさし

(統)	なかは、	ひかり	種	むさしの、原
(統書)	なかは、	ひかり	種	むさしの、原
(統内)	なかは、	ひかり	種	むさしの、原
(神2)	なかは、	ひかり	種	むさしの、原
四十五番右	山路花			
(国)	雲となり花	とひらけて山桜	かへさは道をうつむ雪かな	
(大)	成花	路	路	
(ノ)		路	路	
(彰)		路	路	
(明)	雲となり花	とひらけて山桜	かへさは路を埋	雪かな
(伊)		さくら	路埋	哉
(島)		さくら	路	哉
(祐)	はな	さくら	路	哉
(書)		さくら	路	哉
(三)				哉
(静)				哉
(内)		路		
(神1)				
(統)		さくら	埋	む哉
(統書)		さくら	埋	む哉
(統内)		さくら	埋	む哉
(神2)		さくら	埋	む哉
右	月前鴈(明)	(伊)	(大)	(神1)
(国)	かつらきや夜わたる月に岩橋を	かくるとみるやつく鴈	金	

\* (国) は (大)・(明) 系「渡る」と作るのに「かくる」と作る。最終形態か。

(大) わた

(ノ) わた 見 かり

(彰) 葛城 わた 見 かり

(明) かつらきや夜わたる月に岩橋を 渡るとみるやつく鴈 かね

(伊) よ 渡 かりかね

(島) 「わた かりかね

(祐) いはしを」わた 見 かりかね

(書) \* (書) は (内) (三) (国) と同様に、「かくる」と作る。

(三) よ

\* (三) は (国)・(静) の初期本文と同文。

(静) わた

\* (静) は「かくる」をミセケチして「わたる」と傍書。(大)・(明) は「わたる」(国)・(内)・(統) が「かくる」、そして、(静) は「かくる」↓「わたる」。

前後関係はどうなるか。「わたる」↓「かくる」だと考えられるが、そうすると、

(静) は先祖返りしたか。だが、その前に「夜わたる」となっているのだから、

常識的に考えれば、「かくる」がいい。正広がそれに気づいて、最終稿を「かくる」としたのである。

(内) \* (内) は「かくる」と作り、(国) と一致する。

(神1) \* (神1) は (国)・(内)・(統) と「かくる」で一致。

(統) 葛城よ 見

(統書) 葛城よ 見

(統内) 葛城よ 見

(神2) 葛 城 よ

見

\* (統) 系は「かくる」。

四十六番左 落花随風

(国)

\*この四字題が最終形態か。

(大)

(ノ)

(彰)

(明)

(伊)

(島)

(祐)

(書)

(三)

(内)

(神1)

(静)

(統)

(統書)

(統内)

(神2)

×

×

×

×

×

×

×

(国) さそふへき契 あれはとなひくらんよしや嵐

の花に吹 こゑ

\* (国) は他本「あれはそ」とあるのに、「あれはと」と作る。最終形態か。但し、字形は「そ」にも似ている。「そ」と書こうとして、「と」と書き損じたか。

(大)

契り

そ

声

(ノ)

契り

そ

ふく

(彰)

そ

声

(明)

さそふへき契

あれはそなひくらんよしや嵐

の花に吹 声

(伊)

そ

声

(島)

ちきり

そ

あらし

声

(祐)

ちきり

そ

あらし

ふく

(書)

そ

ふく

(三)

そ

こゑ

(静)

そ

む

こゑ

(内)

そ

(神1)

そ

(統)

契り

そ

声

(統書)

契り

そ

声

\* (統書) は「花も」の「も」にミセケチ「に」。ということとは、(神2) が見た

統群書を(統書) は他本で校訂したか。他本は内閣文庫本自歌合。

(統内)

契り

そ

声

(神2)

契り

そ

も

声

\* (神2) は、(統)・他本「花に」を「花も」と作る。誤写か。

右 十三夜月(彰)

(国)

出て世に今

夜も月の名取 川はるゝか空

にとこの山 風「九

(大)

出て、

こよひ

河

床

(ノ)

いて、

今宵

河

床

(彰)

いて、

今宵

河

床

(明)

いて、世にこよひも月の名取

川はるゝか空

に床 の山 風

(伊) いてゝ こよひ 床 かせ  
 (島) いてゝ こよひ 床 かせ  
 (祐) いてゝ こよひ 床 やま  
 (書) いてゝよ こよひ 河  
 (三) いてゝ こよひ 河  
 (静) いてゝ 河  
 (内) とり河 床 かせ  
 (神1) かせ  
 (統) 今宵 そら  
 (統書) 今宵 そら  
 (続内) 今宵 河 そら  
 (神2) 今宵 そら

四十七番左 江帰鴈  
 (国) ふかき江に契 あさくも帰る 鴈 つなかぬ舟の浪 さそふとて  
 (大) 浅く帰る 波  
 (ノ) ちきり 波  
 (彰) ちきり 波  
 (明) ふかき江に契 あさくも帰る 鴈 つなかぬ舟の浪 さそふとて  
 (伊) かり なみ  
 (島) ちきり  
 (祐) ちきり  
 (書) ちきり かへるかり  
 (三) かへる  
 (静) かへる  
 (内) 船

(神1) 契り 波 さとふてそ  
 (統) \* (統) 「波さとふてそ」は活字の組間違いか。  
 (統書) 契り 波  
 (続内) 契り 波  
 (神2) 契り 波  
 \* (統書)・(神2) が「さそふとて」であるから、(統)の組間違いは間違いないだろう。

右 沢辺鳴(内)(静)  
 (国) あさ沢 にかすかく水のうたかたをはかなしとてや鳴の鳴らん  
 (大) 哥  
 (ノ) なく  
 (彰) 数  
 (明) あさ沢 にかすかく水の哥 かたをはかなしとてや鳴のなくらん  
 (伊) 哥 なく  
 (島) なく  
 (祐) なく  
 (書) なく  
 (三) は 哥 なく  
 (静) さは 数 かく なく  
 (内) さは 数 なく  
 (神1) さは 数 なく なく なく なく なく なく  
 (続書) 浅沢 数 なく  
 (続内) 浅沢 数 なく



(内)

四十九番左 嶺帰鷹 (国) (島) (祐)

(国) 春の夢たれかはかよふ嶺 の庵 うき橋 かけてわたる鷹 かね

(大) 誰 か

(ノ) 峯 渡る かり 金

(彰) 春の夢たれかはかよふ峯 の庵 うきはしかけて渡る鷹 金

(明) 峯 渡る かり 金

(伊) 峯 渡る かり

(島) みね はし かり

(祐) みね いほ はし かり

(書) 峯 はし 金

(三) 草誰 か

\* (三) は他本「夢」を「草」とする。誤読だろう。

(静) 誰 か 渡る かり 金

(内) 誰 か 峯 渡る かり

(神1) 峯 渡る かり

(統) 峯 渡る かり

(統書) 峯 渡る かり

(統内) 峯 渡る かり

(神2) 峯 渡る かり

右 初鷹 作字

(統内) 成

(国) まなふへき文 にはあらてかきつらねくる鷹向 ふ窓 の北風

(大)

まなふへきふみにはあらてかきつらねくる鷹向 ふ窓 の北風

(彰) 来る むかふ かせ

(明) 来る むかふ かせ

(伊) 来る むかふ かせ

(島) 来る むかふ かせ

(祐) 来る むかふ かせ

(書) 来る むかふ かせ

(三) 来る むかふ かせ

(静) 来る むかふ かせ

(内) 来る むかふ かせ

(神1) 来る むかふ かせ

(統) 来る むかふ かせ

(統書) 来る むかふ かせ

(統内) 来る むかふ かせ

(神2) 来る むかふ かせ

五十番 左 霞中花 (ノ)

(国) たをやめのかさぬる衣 のやへ桜霞 にあまる匂 をそみる

(大) たをやめのかさぬる衣 のやへ桜霞 にあまる匂 をそみる

(ノ) きぬ 八重 かにすみ にはひ

\* (ノ) は「八桜」の間に小書きで「重敷」と傍書。後筆による校訂。

(彰) 八重 かにすみ にはひ

(明) たをやめのかさぬるぎぬの八重桜霞 にあまるにはひをそみる 見

(伊) きぬ 八重 かにすみ にはひ

(島) は きぬ 八重 かにすみ にはひ

\* (島) は「は」に読める。

(祐) きぬ 八重 かすみ

(書) きぬ 八重 にほひ

(三) きぬ 八重 にほひ

(静) きぬ 八重 にほひ

(内) きぬ 八重 にほひ

(神1) きぬ 八重 にほひ

(続) きぬ 八重 にほひ

(続書) きぬ 八重 にほひ

(続内) きぬ 八重 にほひ

(神2) きぬ 八重 にほひ

(明) きぬ 八重 にほひ

(伊) きぬ 八重 にほひ

右 舟中月 (明) (伊) (神1) (彰) (十ウ)

(国) 沖 津空 もろこしまての月やみき袖の湊 によるの舟人

(大) 奥 奥 もろこしまての月やみき袖の湊 によるの舟人

(ノ) 奥 奥 もろこしまての月やみき袖の湊 によるの舟人

(彰) 奥 奥 もろこしまての月やみき袖の湊 によるの舟人

(明) 奥 津空 もろこしまての月やみき袖の湊 によるの舟人

(伊) 奥 奥 もろこしまての月やみき袖の湊 によるの舟人

(島) 奥 奥 もろこしまての月やみき袖の湊 によるの舟人

(祐) 奥 奥 もろこしまての月やみき袖の湊 によるの舟人

(書) 奥 奥 もろこしまての月やみき袖の湊 によるの舟人

(三) そら 奥 奥 もろこしまての月やみき袖の湊 によるの舟人

(静) そら 奥 奥 もろこしまての月やみき袖の湊 によるの舟人

(内) おきつ 奥 奥 もろこしまての月やみき袖の湊 によるの舟人

(神1) おきつ 奥 奥 もろこしまての月やみき袖の湊 によるの舟人

(続)

(続書)

(続内)

(神2)

五十一番左

夜梅

(国) くもりなく句

(大) 曇り 句

(ノ) 曇り 句

(彰) 曇り 句

(明) くもりなくにほひきにけりさく梅

(伊) くもりなくにほひきにけりさく梅

(島) くもりなくにほひきにけりさく梅

(祐) くもりなくにほひきにけりさく梅

(書) くもりなくにほひきにけりさく梅

(三) くもりなくにほひきにけりさく梅

(静) くもりなくにほひきにけりさく梅

(内) くもりなくにほひきにけりさく梅

(神1) くもりなくにほひきにけりさく梅

(続) 曇り 句

(続書) 曇り 句

(続内) 曇り 句

(神2) 曇り 句

右 深夜荻 (大)

(国) 深 にけりまつ人ならはいかにも恨

やかけん荻のうは風

かき

かき

かき

かき

(大) ふけ 待 くらみ  
 (ノ) ふけ 待 人 くらみ  
 (彰) ふけ 待 人 くらみ  
 (明) ふけにけり待 人ならはいかにとも恨 やかけん萩の上 かせ  
 (伊) ふけ 待 上 かせ  
 (島) ふけ 待 上 かせ  
 (祐) ふけ 待 上 かせ  
 (書) ふけ 待 人 上 かせ  
 (三) ふけ 待 人 上 かせ  
 (静) ふけ 待 人 上 かせ  
 \* (静) は「萩」にミセケチ「萩」と傍書。  
 (内) 待 人 上 かせ  
 (神1) 待 人 上 かせ  
 (続) 更に 待 人 上 かせ  
 (続書) 更に 待 人 上 かせ  
 (続内) 更に 待 人 上 かせ  
 (神2) 更に 待 人 上 かせ  
 五十二番左 月前花 (静)  
 (国) ちらぬまにいとしも花を思 ふとやをし明 かたの木 間もる月  
 \* 他本は「思へとや」だが、(国) は「思ふとや」とする。最終形態か。それとも誤写か。  
 (大) おもへ  
 (ノ) おもへ  
 (彰) 思へ  
 (明) ちらぬまにいとしも花を思 へとやをしあけかたの木のまもる月  
 (伊) のま  
 (島) のま

(伊) へ へ へ  
 (島) へ へ へ  
 (祐) へ へ へ  
 (書) へ へ へ  
 (三) ま おもふ お  
 \* (三) は(国) と同文で「おもふ」。  
 (静) へ  
 \* (静) は「思ふ」の「ふ」にミセケチをして「へ」と傍書。  
 (内) へ へ  
 (神1) へ へ  
 \* (神1) は「木のま」の「ま」が誤脱。  
 (続) へ  
 (続書) おもへ  
 (続内) おもへ 有明  
 \* (続内) は他本「をし明かた」とするのを「有明かた」とする。連想による書き損じか。  
 (神2) おもへ  
 右 月掛嶺 (追加) (彰)  
 (国) ××  
 (大) 追加  
 (ノ) 追加 二字小字で記されているが、不明。  
 (彰) 追加  
 (明) 追加  
 (伊) 追加  
 (島) 追加

(祐) 追加

(静) ××

(書) ××

\* (書) には追加がない。理由は不明。

(三) ××

(内) ××

(神1) 追加

\* (神1) に「追加」があることは、(大)(明)系であることの根拠にならないか。なお、その位置は、題の下ではなく、歌「夕まくれ」の右に傍書。

(統) ××

(統書) ××

(統内) ××

(神2) ××

(国) 夕ま暮 誰か待いつる嶺 ならんこなたの月は明 るひかりに

(大) た 出る 峯 光

(ノ) くれた 出る 峯 光

(彰) た 出る 光

\* (彰) は「行」にミセケチ「待」と傍書。書き損じだろう。

(明) 夕まくれたか待出る嶺 ならむこなたの月は明る光 に

(伊) くれた 出る 光

(島) くれた 出る 光

(祐) くれた 出る 光

(書) くれた 出る 光

(三) たか 出る 光

(静) くれたか 出る 光

(内) 出る 峯 光

(神1) た 出る 光

(統) たか 出る 光

(統書) たか 出る 光

(統内) たか 出る 光

\* (統内) は他本「こなた」を「となた」に作る。書き損じか。

(神2) たか 出る 光

五十三番左 堤柳(明)(伊)(神1)(十一オ)

\* (神1) は「堤柳」の「提」にミセケチ「堤」と傍書。書き損じによるか。

(国) 舟待 や淀 のつゝみの柳陰 かすめるうちに人そあつまる

(大) よと 堤 内

(ノ) よと 堤 内

(彰) よと 堤 内

\* (彰) は「行」にミセケチ「待」と傍書。二回目。

(明) 舟待 や淀 の堤 の柳陰 かすめる内 に人そあつまる

(伊) まつ よと 堤 内

(島) まつ よと 堤 内

(祐) まつ よと 堤 内

(書) まつ よと 堤 内

(三) まつ よと 堤 内

(静) まつ よと 堤 内

(神1) 船まつ 陰 内

(統) 船まつ 内

(続書) 船まつ

かけ

(続内) 船まつ

かけ

(神2) 船まつ

かけ

右 七夕木(国)

(国) 秋の風 さそはねは又あやにくに梶の葉おとすけふの諸人

\* (国) は(大)(明)系が「ちらす」とするの、「おとす」と作る。

(大) かけのほちら もろ

(ノ) ちら

(彰) ちら はちら もろ

(明) 秋の風 さそはねは又あやにくに梶の葉ちらすけふの諸人

(伊) ちら

(島) ちら

(祐) ちら

(書) ちら

(三) ちら

\* (三) は「おとす」で(国)と同文。(国)(三)(神1)(内)が同文。

(静) ちら

\* (静) は「おとす」の「おと」にミセケチ「ちら」と傍書。

(内) かせ

\* (内) は(国)と一致する。

(神1) かせ 今日 もろ

\* (神1) は「おとす」で(国)(内)と一致。

(続) ちら

(続書) ちら

(続内) ちら

(神2)

ちら

五十四番左 夕雲雀(島)(祐)

(国) あともなき夢のうちの夕雲雀さのみ雲るに誰を恋らん

(大) 跡 内野

(ノ) 跡 内野の

(彰) 跡 内野の

(明) 跡 もなき夢の内野々夕 ひはりさのみ雲るにたれをこふらん

(伊) 跡 内野

(島) 跡 内野

(祐) 跡 内野

(書) 跡 内野

(三) 跡 内野

(静) 跡 内野

(内) 跡 内野の

(神1) 跡 内野

(続) 跡 内野

(続書) 跡 内野

(続内) 跡 内野

(神2) 跡 内野

右 沢鳴(大)(彰)

(国) 玉章に秋の思のかすかくや野沢の鳴にまじる鴈かね

(大) つさ 数

(ノ) つさ おもひ 数

(彰) つさ 数 かり

(明) 玉札 に秋のおもひの数 かくや野沢の鴨 にまじる鴈金  
 (伊) 札 おもひ 数 鴈金  
 (島) 札 おもひ かり金  
 (祐) 札 おもひ かり  
 (書) 思ひ かり  
 (三) おもひ しき かり  
 (静) 思ひを数 書や 金  
 (内) 思ひを数 書や かり金  
 \* (内) は「秋の思いを数書や」とする。「の」が「を」になっている。独自本文。  
 (神1) 思ひを数 かり  
 \* (神1) は「思ひを数かく」で(内)と一致。  
 (統) おもひ 数 かり  
 (統書) おもひ 数 かり  
 (続内) おもひ 数 鴨 かり  
 \* (続内) は他本「鴨」となっているのに、「鴨」と作る。書き損じか。  
 (神2) おもひ 数 かり

(祐) 崎 けふり ころも かせみ哉  
 (書) 崎 ころも かせみ哉  
 (三) 崎 斗 ころも かせみ哉  
 (静) 唐崎 斗 ころも かせみ哉  
 (内) 唐崎 斗 ころも かせみ哉  
 (神1) 唐崎 斗 ころも かせみ哉  
 (統) 辛崎 辛崎 ころも かせみ哉  
 (続書) 辛崎 辛崎 ころも かせみ哉  
 (続内) 辛崎 辛崎 ころも かせみ哉  
 (神2) 辛崎 辛崎 ころも かせみ哉  
 右 初秋衣「明」(伊)(神1)(ノ)十一ウ  
 (国) 河社衣 やしのほし合 の雲の浪 まの秋 のはつ風  
 (大) ころも あひ かせ  
 (彰) 河社衣 やしのほし合 の雲の浪 まの秋 の初風  
 (明) ころも あひ かせ  
 (伊) 河社衣 やしのほし合 の雲の浪 まの秋 の初風  
 (島) ころも かせ  
 (祐) ころも かせ  
 (書) 星 間 あき かせ  
 (三) 星 間 あき かせ  
 (静) 星 間 あき かせ  
 (内) ころも 星合 初 かせ  
 (神1) ころも 星合 初 かせ  
 (続) あひ 波 初 かせ

(続書) あひ 波  
 (続内) あひ 波  
 (神2) あひ 波

五十六番左 余寒

(国) 春やとき梅さく軒につらゝみて花のかさむき霜 のあさ風

(大) 朝 かせ

(ノ) 朝 かせ

(彰) 朝 かせ

(明) 春やとき梅さく軒につらゝみて花のかさむき霜 の朝 かせ

(伊) 朝 かせ

(島) しも かせ

(祐) しも かせ

(書) 香 朝 かせ

(三) 咲軒 朝 かせ

(静) 朝 かせ

(内) 香 朝 かせ

(神1) ら 朝 かせ

(続) 寒き 朝 かせ

(続書) 寒き 浅 かせ

(続内) 寒き 朝 かせ

(神2) 寒き 朝 かせ

右 萩風「静」(彰)

\* (静) は「萩」にミセケチ「萩」と傍書。

(国) うき秋の思 ひや我 にゆふま暮 声 する風 の軒の下萩

(大) × 夕 ころ

(ノ) おも われ くれ

(彰) × 夕 ころ

(明) うき秋のおもひやわれにゆふまくれころする風 の軒の下萩

(伊) おも われ くれころ

(島) おも われ 夕 まくれころ かせ

(祐) おも われ 夕 まくれころ かせ

(書) われ 夕 まくれころ

(三) おも 夕 くれ

(静) くれ

\* (静) は「下萩」の「萩」にミセケチ「萩」と傍書。

(内) われも ま ころ おき

\* (内) は「われもゆふま暮」と作る。「に」を「も」と読んだか。独自本文。

(神1) われも夕 まくれころ

\* (神1) は「われも」で(内)と一致。

(続) おも われ 夕

(続書) おも われ 夕

(続内) おも われ 夕 はき

\* (続内) は他本「下萩」を「したはき」と作る。誤読か。

(神2) おも われ 夕

五十七番左 桃花「内」

(国) たをやめのひかふるみきか開 桃の花 にかたふく春のよの月

(大) さく

(ノ) さく

夜

(彰) むか さく  
 \* (彰) は他本「ひかふる」を「むかふる」と作る。書き損じだろう。  
 (明) たをやめのひかふるみきかさく桃の花 にかたふく春の夜の月  
 (伊) さく  
 (島) さく  
 (祐) さく  
 (書) さく  
 (三) はな  
 (静) 夜  
 (内) さく  
 (神1) さく  
 (統) さく  
 (統書) さく  
 (続内) さく  
 (神2) さく  
 右 河月「大」(内)  
 (国) すむ月の桂 の花や梅 津川 さてもそ浪に影 匂 ふうらん  
 (大) かつら かけ む  
 (ノ) かつら にはほふ  
 (彰) かつら にはほふ  
 (明) すむ月のかつらの花や梅 津川 さてもそ浪に影 匂 ふうらん  
 (伊) かつら かけにほふ  
 (島) かつら かけにほふ  
 (祐) かつら むめ かは かけにほふ  
 (書) かつら にはほふ

(三) かつら 河 にはふ覧  
 (静) 河 ×む  
 (内) かつら 河 し 波 にはほふ  
 \* (内) は「さてし」と作る。「も」を「し」と読んだか。独自本文。  
 (神1) かつら 河 波 にはほふ  
 (統) かつら 河 波 かけにほふ  
 (統書) かつら 河 波 かけにほふ  
 (続内) かつら 河 波 かけにほふ  
 (神2) かつら 河 波 かけにほふ  
 五十八番左 岡躑躅「(国)(明)(伊)(神1)(十二オ)  
 (国) あまやすむ霞 のみほの舟岡に春はいさりをたくつし哉  
 (大) かすみ  
 (ノ) や  
 (彰) 蚕  
 \* (彰) は他本「春は」を「春や」と作る。理由は不明。  
 (明) あまやすむかすみのみほの舟岡に春はいさりをたくつし哉  
 (伊) かすみ  
 (島) かすみ かな  
 (祐) かすみ かな  
 (書) を  
 (三) の  
 \* (三) は(静) 初期本と同じく「あまの」とする。両者は近い関係にあるか。  
 (静) \* (静) は「あまの」の「の」にミセケチ「や」と傍書。「たゝ」の「ゝ」にミセケチ「く」と傍書。

(内) 焼×

\* (神1)・(内) は「たく」の表記が「焼」で一致。 焼×

(神1) 海士 船 焼×

(統) 海士 船

(統書) 海士 船

(統内) 海士 を 船

(神2) 海士 船

右 関月(彰)

(国) 在明は都 のかたのしら川 やおなしあつまの関屋もる月

\* (国) は末句が「月」と作る。最終形態か。(静) も同じ。

(大) 有 方 白 河 影

(ノ) 有 白 影

(彰) 有 白 影

(明) 有明は都 のかたの白 川 やおなしあつまの関屋もる影

(伊) 有 白 影

(島) 有 影

(祐) 有 みやこ 影

(書) 有 白 影

(三) 有 河 影

\* (三) は(国)・(静)と同文。

(静) 有 河

\* (静) は(国)と同じく「もる月」(他本「影」)となっている。

(内) 有 方 河 東 かけ

\* (内) は(大)と(明)と同じ。(国)になりきっていない段階か。

(神1) 有 東 かけ

\* (神1) は(大)(明)(内)と一致。

(統) 有 みやこ 白 河 同し かけ

(統書) 有 みやこ 白 河 同し かけ

(統内) 有 みやこ 白 河 同し かけ

(神2) 有 みやこ 白 河 同し かけ

五十九番左 関居見花(島)(祐)

(国) 夕 まくれまれの人めもすみはてゝ花 にひまある木 本の宿

(大) 夕 まくれまれの人めもすみはてゝ花 にひまある木 本の宿

(ノ) ゆふ 暮× の やと

(彰) 暮× の やと

(明) 夕 まくれまれの人めもすみはてゝ花 にひまある木のものやと

(伊) のもと やと

(島) のもと やと

(祐) はな のもと やと

(書) 隙 の やと

(三) 隙 の やと

(静) 暮× 有× の本 やと

(内) 暮× の やと

(神1) 間暮× 稀 の やと

(統) 間暮× の やと

(統書) 間暮× の やと

(統内) 間暮× せ の やと

\* (統内) は他本「すみはてゝ」を「せみはてゝ」と作る。書き損じか。

(神2) 間暮× の

右 閑居萩

\* (静) は「萩」にミセケチ「萩」と傍書。

(国) うきことそ半 まきるゝ萩 原 や松 立 ならふ風 のこゑく

(大) はら

(ノ) なかは

(彰) なかは 声

(明) うき事 そなかはまきるゝ萩 原 や松 立 ならふ風 のこゑく

(伊) 事 なかは 声

(島) 事 なかは 声

(祐) 事 なかは 声

(書) 事 なかは 声

(三) 事 事 たち かせ 声

(静) 事 事 たち かせ 声

\* (静) は「萩」にミセケチ「萩」と傍書。

(内) なかは おきはら 声々

(神1) 事 事 なかは まつたち 声

(統) 事 事 なかは まつたち 声

(統書) 事 事 なかは まつたち 声

\* (統内) は他本「その事そ」とするのに、「その事と」と作る。書き損じか。

(神2) 事 事 なかは まつたち 声

六十番 左 見花

(国) 高 砂 の松 の心 よいかならむ今 年もありて花にのみぬる

\* (国) は(大)(明)が末句「みえぬる」とするのに、「のみぬる」と作る。最終形態か。

(大) たかさこ んことし みえぬる

(ノ) たかさこ ことし みえぬる

(彰) たかさこの松 の心 よいかならんことしもありて花にみえぬる

(伊) たかさこ んことし みえぬる

(島) たかさこ こゝろ んことし みえぬる

(祐) たかさこ こゝろ んことし 見えぬる

(書) たかさこ ことし みえぬる

(三) まつ ん

\* (三) は(国)・(静)初期本・(内)と同文。

(静) は文末は「のみぬる」の「のみ」をミセケチ「みえ」と傍書。先祖帰りか。

\* (内) は(国)と一致する。

(神1) まつ 見えぬる

\* (神1) はここでは(大)(明)と一致する。

(統) んことし か みえぬる

\* (統) は文末は「大」「明」と同じ。だが、他本「ありて」を「あかて」と作る。

(統書) んことし か みえぬる

\* (統書) は「ありて」の「り」ミセケチ「か」。別本を見ての校訂だろう。

(神2) んことし か みえぬる

\* (神2) が「ありて」なので、「あかて」は誤写だろうが、それが定着したか。

右 水郷月〔明〕(伊) (大) (神1) (十二ウ)

(国) 心 あれや月を入江の蘆 すたれ巻 て夜ふかくともす火もなし

(大) 簾 まきて

(ノ) 簾 まきて

(彰) まきて

(明) 心 あれや月を入江の蘆 簾 巻 て夜ふかくともす火もなし

(伊) 簾

(島) こゝろ あし

(祐) こゝろ あし 「まきて

(書) 簾 あし

(三) あし よ

(静) こゝろ え

(内) こゝろ 深く

(神1) あし ひ

(統) あし ひ

(統書) あし ひ

\* (統書) は「心ありや」の「り」にミセケチ「れ」。書き損じ故だろう。

(統内) あし 深く ひ

(神2) あし ひ

六十一番左 花未飽〔静〕(ノ)

(国) 花未

\* (国) が漢文の語法的には合っている。最終形態か。

(大) 未花

(ノ) 未花

(彰) 未花

(明) 未花

(伊) 未花

(島) 未花

(祐) 未花

(書) 未花

(三) 花未

\* (三) 〓 (静) 〓 (国)。

(静) 花未

(内) 未花

(神1) 未花

(統) 未花

(統書) 未花

(内) 未花

(神2) 未花

(国) さのみかくあくればむかひ日くるれば心 のそふを花 やいとはん

(大) 明 れ 向ひ

(ノ) 暮 れ

(彰) さのみかくあくればむかひ日くるれば心 のそふを花 やいとはん

(明) さのみかくあくればむかひ日くるれば心 のそふを花 やいとはん

(伊) こゝろ はな

(島) こゝろ はな

(祐) こゝろ はな

(書) こゝろ はな む

(三) こゝろ はな

(静)

\* (静) は「心のとふ」の「と」にミセケチ「そ」と傍書。

(内)

暮れ

(神1)

む

(統)

明れ

暮れ

(統書)

明れ

暮れ

(神2)

明れ

暮れ

右 月前煙

(国)

空 晴 て中 くしつかた 煙 月にはへたる秋 のやまさと

\* (国) は末句他本が「やまもと」とするの、「やまさと」と作る。最終形態か。

(大)

はれ

山も

(ノ)

はれ

も

(彰)

空 はれて中 くしつかた 煙 月にはへたる秋 の山も

けふり

も

(明)

空 はれて中 くしつかた 煙 月にはへたる秋 の山も

(伊)

はれ

けふり

山も

(島)

はれ

ゆふけふり

山も

(祐)

そらはれ なか

ゆふけふり

あきのやまも

(書)

はれ

も

(三)

そら

さと

(静)

\* (国) Ⅱ (静) 初期 Ⅱ (三)。

本

\* (静) は文末「山里」の「里」にミセケチ「本」と傍書。先祖返りか。(大) 系で校訂したか。

(内)

賤か けふり

(神1)

はれ

賤かゆふ

(統)

はれ

賤か

(統書)

はれ

賤か

(神2)

はれ

賤か

(神1)

はれ

賤か

(統)

はれ

賤か

(統書)

はれ

賤か

(神2)

はれ

賤か

(国)

うすゝみの霞

のうちに色

こぎや絵鳴か磯

の松

のむら立

(大)

墨

村

(ノ)

うすゝみの霞

のうちに色

こぎや絵鳴か磯

の松

の村立

(明)

うすゝみの霞

のうちに色

こぎや絵鳴か磯

の松

の村立

(伊)

うすゝみの霞

のうちに色

こぎや絵鳴か磯

の松

の村立

(島)

うすゝみの霞

のうちに色

こぎや絵鳴か磯

の松

の村立

(祐)

うすゝみの霞

のうちに色

こぎや絵鳴か磯

の松

の村立

(書)

うすゝみの霞

のうちに色

こぎや絵鳴か磯

の松

の村立

(三)

うすゝみの霞

のうちに色

こぎや絵鳴か磯

の松

の村立

(静)

うすゝみの霞

のうちに色

こぎや絵鳴か磯

の松

の村立

(内)

うすゝみの霞

のうちに色

こぎや絵鳴か磯

の松

の村立

(神1)

うすゝみの霞

のうちに色

こぎや絵鳴か磯

の松

の村立

(統)

うすゝみの霞

のうちに色

こぎや絵鳴か磯

の松

の村立

(統書)

うすゝみの霞

のうちに色

こぎや絵鳴か磯

の松

の村立

(神2)

うすゝみの霞

のうちに色

こぎや絵鳴か磯

の松

の村立

(統)

うすゝみの霞

のうちに色

こぎや絵鳴か磯

の松

の村立

(統書)

うすゝみの霞

のうちに色

こぎや絵鳴か磯

の松

の村立

(続内) 墨 たち  
 (神2) 墨 たち

右 七夕雲(国)(彰)

(国) 雲のなみ今 夜なこえそ七 夕 の契 を 天 の川上 のまつ

(大) 浪 河 松

(ノ) 波 こよひ

(彰) 波 こよひ

(明) 雲の浪 こよひなこえそ七 夕 の契 を 天 の川上 のまつ

(伊) 浪 こよひ

(島) 浪 こよひ

(祐) 浪 こよひ

(書) 浪 こよひ

(三) こよひ

(静) こよひ

(内) こよひ

\* (内) は「川上」を「河なみ」と作る。「な」は「か」の誤写だろう。

(神1) 浪 こよひ

(続) 波 今宵

(続書) 波 今宵

(続内) 波 今宵

(神2) 波 今宵

六十三番左 水辺藤(明)(伊)(神1)(十三オ)

(国) 山たかみ木 間に落 て石はしる滝に音 かる春 の藤 なみ

(大) のま 浪

(ノ) の

(彰) のま

\* (彰) は「滝に」の「に」が不明瞭。消したのか、どうか。

(明) 山たかみ木のまに落 て石はしる滝に音 かる春 の藤 なみ

(伊) のま

(島) のま

\* (島) は(明)の「に」を「も」と読んだか。

(祐) のま

\* (祐) は(島)をそのまま写した。だからここでも「も」となる。

(書) のま

(三) のま

(静) のま

(内) のま

\* (内) は末句を「松の藤なみ」と作る。独自の変改か。独自本文。

(神1) 高見 のま

(続) 高み のま

\* (続) は他本「音かる」とあるのを「音する」に作る。

(続書) 高み のま

\* (続書) は「春の藤」の「春」にミセケチ「松」とする。

(続内) 高み のま

(2) 高み のま

\* (続) は本来の形が「春の藤」だったことを示す。

右 月如鏡(大)

\* (静) は「女」にミセケチ「如」と傍書。

(国) 玉 あくれば袖 に妻 かゝみ影 をならふる在 明 の月

(大) くしけ開れ つま鏡  
 (ノ) くしけ つま鏡  
 (彰) つま かけ  
 (明) 玉くしけあくれば袖につま鏡 影をならふる有明の月  
 (伊) くしけ つま鏡  
 (島) くしけ つま かけ  
 (祐) くしけ そて つま かけ  
 (書) くしけ つま鏡 有  
 (三)  
 \* (国) || (静) || (三)  
 (静)  
 (内) くしけ明れ 鏡 かけ 月そのこれる  
 \* (内) は末句を「月そのこれる」と作る。独自の更改か。独自本文。  
 (神1) くしけ 鏡 月そ残れる  
 \* (神1) の末句は(内)と同文。  
 (統) くしけ明れ つま 有明  
 \* (統) は「有明の月」に「月そ残れるイ」と傍書。  
 (統書) くしけ明れ つま 有明  
 \* (統書) は「有明の月」に「月そ残れるイ」と傍書。  
 (統内) くしけ明れ つま 有明  
 \* (統内) は「有明の月」に「月そ残れるイ」と傍書。(統内)も(内)で校訂したか。  
 (神2) くしけ明れ つま 有明

いる。書き損じに拠るか。それに気づいて、歌の冒頭「春」の上に「〇」印を付している。

(国) 春も今朝岩戸を明て千はやふる神世の袖を立霞哉  
 (大) けさ 早振 たつ  
 (ノ) あけ 早振 代  
 (彰) あけ ちは 代  
 (明) 春も今朝岩戸をあけて千早振 神代の袖をたつ霞哉  
 (伊) あけ 早振 代 たつ  
 (島) あけ 早振 代 たつかすみかな  
 (祐) あけ ち 代 そて たつかすみ  
 (書) あけ 早振 代 たつ  
 (三) あけ 早振 たつ  
 (静)  
 (内) 早振 代  
 (神1) けさ 早振 代も かな  
 \* (神1) は他本「神代の」を「神代も」と作る。独自本文か。  
 (統) 早振 代 たつかすみ  
 (統書) 早振 代 たつかすみ  
 (統内) 早振 代 たつかすみ  
 (神2) 早振 代 たつかすみ  
 右 暁荻風(彰)  
 (国) いかゝせんかけのたれたの長 夜にみたれそへたる荻のうは風  
 \* (国) は「長」を「の」と「夜」の間に傍書。他本は「いかゝねんかけのたれお(を)」にするが、(国)は「いかゝせんかけのたれた」と作る。「た」(大)と

「お」(於)を間違ったか。ただし、「いかゝせむ」は最終形態か。

(大)	ね	を	長き	上
(ノ)	ねむ	お	長き	上
(彰)	ね	を	な	上
(明)	いかゝねんかけのたれおの長	き	夜にみたれそへたる萩	の上
(伊)	ねむ	お	長き	上
(島)	ね	お	長き	上
(祐)	ね	お	長き	上
(書)	ねむ	お	長き	上
(三)		お		上
* (国)    (静) 初期    (三)、「たれお」では(三)は(書)と同一表記。				
(静)	せむ	お		上
* (静)は「いかゝ」の「ゝ」に「ねい」と傍書。「萩」ミセケチ「萩」と傍書。				
(静)が(国)系以外の(明)系を見て対校していることは確実。				
(内)	ね	お	長	上
* (内)の「みたれはへたる」と作る。「は」の字は前に記した字を消して書いており、もともとは「そ」だった可能性はある。独自の改変か、誤写か。				
* 他の用例を見るに、(国)の「かけのたれた」ではなく、(明)他の「かけのたれお(を)」という表現が正しい。しかし、このようになっていないことも無視できない。「いかゝせん」との絡みもある。				
(神1)	ねむ	お	長	上
(続)	ね	尾	長	上
(続書)	ね	尾	長	上
(統内)	ね	尾	長	上
(神2)	ね	尾	長	上

六十五番左 初見山花

(国)	明	そむる山	桜	戸の花	のかほまたれしほとをいかゝ恨
(大)			さくらと	待	れ
(ノ)	あけ				
(彰)	あけ				
(明)	あけ	そむる山	桜	戸の花	のかほまたれしほとをいかゝうらみん
(伊)	あけ	初	る		
(島)	あけ		やまさくら	はな	
(祐)	あけ				
(書)	あけ				
(三)	あけ				
(静)					
(内)					
(神1)					
(続)					
(続書)					
(統内)					
(神2)					
右 隣家種花	(明)	(伊)	(静)	(神1)	(十三ウ)
(国)	うちとけておきふす宿	のかひまみを誰	そと見れば花	の種	
(大)		たれ	み	あさかほ	
(ノ)		見	み		
(彰)		たれ		朝かほ	
(明)	うちとけておきふす宿	のかひまみを誰	そとみれば花	の種	
(伊)		み			

(島) 「たれ」たれ み はな  
(祐) 「たれ」たれ み はな あさかほ  
(書) み  
(三) み  
(静) み  
(内) み  
(神1) 打と やと い み 朝 かほ  
(統) 打と やと い み 朝 かほ  
(統書) 打と やと い み 朝 かほ  
\* (統書) は「かひまみ」の「ひ」にミセケチ「い」。(統)と同じ。  
(続内) 打と やと い み 朝 かほ  
(神2) 打と やと い み 朝 かほ

六十六番左 夕霞  
(国) 墨染の夕の寺に今ひとへ春の衣をたつかすみかな  
(大) 一重 ころも 立×霞 哉  
(ノ) すみそめ 一重 ころも 霞  
(彰) すみそめ 一重 ころも 霞  
(明) すみそめの夕の寺に今一重春の衣をたつ霞かな  
(伊) すみそめ 一重はる ころも 霞  
(島) すみそめ いまひと重 ころも  
(祐) すみそめ ゆふへ いまひとへ ころも  
(書) 一重 哉  
(三) すみ × さほ姫のなとてかすみの衣たつらん  
\* (静) 〓 (三) 〓 (神1) 〓 (内) 〓 (統) 系。(三) はここで(国)と別れる。「夕寺」となっており、「の」が脱字。初期形態の復活。

(静) すみ さほ姫のなとて霞の衣たつらん  
\* (静) は(内)・(統)と同じ本文。但し「いまひとへ春の衣をたつ霞かなイ」と傍書。(明)・(国)系と(内)・(統)系が混淆しているか。「棹姫……」の字句を持つ歌はこの歌しかない。(統)系には(内)が喰い込んでいるから、このようになつたか、それとも、(統)系自体の本文に古層が残っていた可能性が高い。  
(内) さほ姫のなとて霞の衣 たつらん  
\* (内) は三句以降が「さほ姫のなとて霞の衣たつらん」という独自文になっている。  
(神1) 棹姫のなとて霞のころもたつらん  
\* (神1) は(内)系と本文である。(大)(明)系ではない。  
(統) さほ姫のなとてかすみの衣たつらん  
\* (統) は(内)と同じ下句。同系統本。  
(続書) さほ姫のなとてかすみの衣たつらん  
(続内) さほ姫のなとてかすみの衣たつらん  
(神2) さほ姫のなとてかすみの衣たちらん

右 七夕鳥(大)(ノ)(彰)  
(国) をしなへてけふかさきやみえさらん天津雲の橋わたすとて  
(大) 渡  
(ノ) けふかさきや見  
(彰) をしなへてけふかさきやみえさらん天津雲の橋渡すとて  
(明) 渡  
(伊) 見  
(島) 渡  
(祐) 見  
(静) 渡

(書) 　　む

(三)

(内) 見 　　はし渡る

\* (内) は末句を「はし渡るとて」とする。独自本文。

(神1) 　　む 　　渡 ×と

\* (神1) は「渡」とあるから、「わたる」と読んだ可能性が高い。(内) と同文。

(統) 　　鵲 　　井

(統書) 　　鵲 　　井

(統内) 　　鵲 　　井

(神2) 　　見 　　井

六十七番左 早春水 (内)

\* (内) が「早春水 早秋朝」と表記する故。他も同じ。

(国) けふそ春心 　　の水も手に汲 　　もはやうちとくる松か本 　　かな

(大) 　　て 　　哉

(ノ) 　　と

(彰) けふそ春心 　　の水も手に汲 　　もはやうちとくる松か本 　　哉

(明) 　　と

(伊) けふそ春心 　　の水も手に汲 　　もはやうちとくる松か本 　　哉

(島) こゝろ 　　」

(祐) こゝろ 　　」

(書) 　　哉

(三) 　　哉

(静) 　　哉

(内) 　　くむも 　　哉

(神1) 　　くむも 　　もと哉

(統) 　　くむも 　　もと哉

(統書) 　　くむも 　　もと哉

(統内) 　　くむも 　　もと哉

(神2) 　　くむも 　　もと哉

右 早秋朝 (内)

(ノ) 朝

(彰) 朝

(書) 朝

(三) 朝

(内) 月

\* 他本は「朝」、おそらく(内)は(統)と同じ「日」と書こうとしたのではないか。歌には、「日」はであるが、「月」は出ないからである。

(神1) 朝

(統) 日

(統書) 日

\* (統書) は「朝」にミセケチ「日」と傍書。(統書) は(内)系を見て校訂した。

(統内) 日

\* (統内) も(内)系で校訂したか。それともこちらはもともとこうだったか、不明である。

(神2) 朝

(国) 秋はけふ西 　　吹風 　　の音 　　は山 　　先 　　出 　　むかふあさ日かけかな

(大) 　　にし 　　かせ 　　羽 　　まついて 　　朝 　　影

(ノ) にし 羽山 朝  
 (彰) にし 羽山  
 (明) 秋はけふにし吹 風の音 羽山 先 出 むかふ朝 日影 かな  
 (伊) にし 羽山 朝  
 (島) にし をとはやま ひ  
 (祐) にしふく をとはやま いて  
 (書) 羽 朝  
 (三) にし 羽山 いて 朝 影 哉  
 (静) にし いて向 ふ朝 影  
 (内) にし をとほ まついて  
 \* (内) は題を異にするが、歌は他本と同じ。  
 (神1) ふく 羽山 まつ 朝 影  
 (続) ふくかせ 羽山 まつ 朝  
 (続書) かせ 羽山 まつ 朝  
 (続内) かせ 羽山 まつ 朝  
 (神2) かせ 羽山 まつ 朝

六十八番左 夜春雨〔明〕(伊)(神1)(十四オ)  
 \* (彰) は「夜雨春」の「雨春」にミセケチ「春雨」と傍書。別筆か。

(国) 春の夢わたらてかへるうき橋 は水かさやこゆるきはふ雨かな  
 (大) 帰る 哉  
 (ノ) みる 哉  
 (彰) みる 哉  
 (明) 春の夢わたらてかへるうき橋 はみかさやこゆるきはふ雨 哉  
 (伊) みる 哉

(島) はし み  
 (祐) はし み  
 (書) 帰る み  
 \* (書) は「春」と「夢」の間に「の」と傍書。同筆。  
 (三) かよはんとすれは浮橋 に水かさそふへき雨の音かな  
 \* (三) は末尾に「出のまし」と傍書。なんのこかは不明。(三)は(続)系と同じ本文。(三) || (静) 初期本 || (続) 系、さらに、微妙な差異はあるが、(神1) || (内) も同系列。ここで一旦先祖返りしたか。  
 (静) 浮橋 哉  
 \* (静) は「かよはんとすれは」にミセケチ「わたらてかへる」を傍書、「浮橋に」の「に」にミセケチ「は」、「そふへき雨の音哉」にミセケチ「やこゆるきはふ雨哉」を傍書。(静) は両方の本文を見て、基本的に(大)系に帰ろうとしているか。  
 \* (神1)・(内)・(群) 系本文が(静)で(大)系と出会ったか。  
 (内) 春の夢かよはむとすれはうき橋 に水かさそふへき雨の音 哉  
 \* (内) は別の歌になっている。独自本文。  
 (神1) かよはむとすれはうきはしに水かさそふへき雨の音 哉  
 (続) かよはんとすれはうきはしに水かさそふへき雨の音 哉  
 \* (続) は(内)(神1)と同一本文だが、「水かさそふ」とする。  
 (続書) かよはんとすれはうきはしに水かさそふへき雨の音 哉  
 (続内) かよはんとすれはうきはしに水かさそふへき雨の音 哉  
 (神2) かよはんとすれはうきはしに水かさそふへき雨の音 哉

右 月前秋風  
 (国) よしやふけ月に初 瀬の山おろしはけしからすは嶺のうき雲  
 (大) はつせ

(ノ) 泊瀬  
 (彰) はつせ 下風  
 (明) よしやふけ月に泊瀬の山おろしはけしからすは嶺のうき雲  
 (伊) 吹 泊  
 (島) 泊  
 (祐) 泊  
 (書) 泊  
 (三) 吹×月 はつ  
 (静) せ  
 (内) はつせ  
 (神1) 吹×月 泊 嵐  
 (統) せ 嵐  
 (続書) せ 嵐  
 (続内) せ 下風  
 (神2) せ 嵐  
 六十九番左 早春風(島)(祐)  
 (国) あさ明に千世のかすく聞也 初春しるや庭の松かせ  
 \* (国) は他本「千世の声く」とするのに「千世のかすく」と作る。最終形態か。  
 (大) こゑ きこゆなり 知や  
 (ノ) 声 きこゆるは 風  
 \* (ノ) は「きこゆるは」が独自本文。書き損じか。  
 (彰) こゑ きこゆ 風  
 (明) あさ明に千世の声くきこゆ也 初春しるや庭の松風  
 (伊) 声 聞ゆ 風

(島) こゑ きこゆ はつはる 風  
 (祐) こゑ きこゆなりはつはる  
 (書) こゑ 聞ゆ  
 (三) あけ  
 \* (三) || (国) || (静) 初期本。  
 (静) こゑ 聞ゆ 風  
 \* (静) は「かす」にミセケチ「こゑ」と傍書。元に戻したか。  
 (内) 代 こゑ 聞ゆなり 知や 風  
 (神1) 朝 あけ  
 (統) 朝 代 声 聞ゆなり  
 (続書) 朝 代 声 聞ゆなり  
 (続内) 朝 代 声 聞ゆなり  
 (神2) 朝 代 声 聞ゆなり  
 右 暮秋風(大)  
 (国) 吹かはる軒はの露の山 かせに日影 もよはき日くらしの声  
 (大) 風  
 (ノ) ひ ひ こゑ  
 (彰) 風 晩の  
 (明) 吹かはる軒はの露の山 風 に日影 もよはきひくらしのこゑ  
 \* (明) は「かはす」の「す」に「る」と傍書  
 (伊) ひ ひ  
 (島) ひ ひ  
 (祐) やま かけ ひ こゑ  
 (書) ひ ひ こゑ  
 (三) こゑ



(国) 浜 つゝら秋くる鴈 のかへるなみ又 つらなるやあまのうけ縄  
 (大) 浪 なは  
 (ノ) 浪 なは

(彰) はま 波 なは  
 (明) 浜 つゝら秋くる鴈 のかへる浪 又 つらなるやあまのうけ縄

(伊) 浪  
 (島) 浪  
 (祐) はま かり また

(書) はま かり 浪 引そへたるや

\* (書) は「引そへ」という(内)と同じ表記になっているが、「引そへ」の下には「又つらな」があり、それを消して、「引そへ」を上書きしたと思われる。

つまり、「又つらな」が原形でこの時点で、先祖返りしたのだろう。こちらは、その後、(統)系(内)による異文傍書で登場する。

(三) はま 浪  
 \* (三) 〓 (国) 〓 (静)。

(静) 鴈 引そへたるやあまのうけなは

(内) \* (内) は下句の四句めが「引そへたるや」と変わっている。独自の更改か。独自本文。

(神1) 帰る 引そへたるやあまのうけ縄  
 \* (神1) は(内)と同文。

(統) \* (統) は「またつらな」に「ひきそへたい」と傍書。異本は(内)と同じ。ここから(内)には近いが完全な同一系統本ではない。

(統書) \* (統書) は「またつらな」に「ひきそへたい」と傍書。異本は(内)・(統)と

同文。また、「あさのか」の「か」にミセケチ「う」と傍書。こちらは書き損じ故だろう。

(統内) \* (統内) は「またつらな」に「ひきそへたい」と傍書。(統書)をそのまま受けたか。

(神2) また

右 山家秋夕(国) 老にけりよしいくほとそ太山 風 庵 ふきあらせ秋の夕 暮

(大) 程 み いほ吹 あ くれ

(ノ) 程 み いほ吹 あ あきの くれ

(彰) 老にけりよしいくほとそ太山 風 いほ吹 あらせ秋の夕 くれ

(明) 程 み いほ吹 いほ吹 あき くれ

(伊) 程 み いほ吹 いほ吹 あき くれ

(島) 程 み いほ吹 いほ吹 あき くれ

(祐) 程 み いほ吹 いほ吹 あき くれ

(書) 程 み いほ吹 いほ吹 あき くれ

(三) 程 み いほ吹 いほ吹 あき くれ

(静) 程 み いほ吹 いほ吹 あき くれ

(内) 程 み いほ吹 いほ吹 あき くれ

(神1) 程 み いほ吹 いほ吹 あき くれ

七十二番左 春曉花」(ノ)

(国) とくあくる花の色 香に鳥の声 たつたの山 や短 夜の空

\* (国) は、他本「光」とするのに、「色香」と作る。最終形態か。

(大) 明る 光 立田 みしか

(ノ) 光 立田 みしか

(彰) 光 立田 みしか

(明) とくあくる花の光 に鳥の声 立田の山 や短 夜の空

(伊) 光 立田 そら

(島) はな ひかり

(祐) はな ひかり こゑ やま みしか

(書) 光 立田

(三) とり こゑ そら

\* (三) は「色香を」の「を」にミセケチ「に」と傍書。

(静) 光

\* (静) は「色香」にミセケチ「光」、「軒」にミセケチ「短」と傍書。後者は単なる書き間違いだろうが、前者は、(明) 系を見て書き直した。

(内) 光 こゑ立田

(神1) 明る 光 こゑ立田

(統) ひかり みしか そら

(統書) ひかり みしか そら

(続内) ひかり みしか

(神2) ひかり みしか そら

右 山家月」(大)(彰)

(国) 都をは思 ひ捨 つる袖にきて昔 などひそ軒はもる月

(大) ×すて 問そ

(ノ) おも すて 嶺の月かけ

\* (ノ) の「嶺の月かけ」に「軒はもる月」を傍書。「嶺の月かけ」と共通する

本文は今のところない。独自本文。

(彰) ×すて 端

(明) 都をはおもひすてつる袖にきて昔 などひそ軒はもる月

(伊) おも すて 端

(島) おも すて むかし

(祐) おも すて むかし

(書) おもひすて

(三) おも すて

(静) おも すて

(内) おも すて

(神1) おも すて

(統) おも すて

(統書) おも すて

(続内) おも すて

(神2) おも すて

七十三番左 霞春衣」(明)(伊)(神1) (十五オ)

(国) 春のきて人のたちぬふわさならは霞の〇 ひまやなからん

\* (国) は「霞の」と「ひま」の間に〇を記し、「衣敷」と傍書。これは影写の

親本において誤脱していたのであるう。

(大) 衣

(ノ) 立ぬ 衣

(彰) 衣

(明) 春のきて人のたちぬふわさならは霞の衣 ひまやなからむ  
 (伊) 衣 む  
 (島) ころも む  
 (祐) ころも む  
 (書) ころも  
 (三) ころも  
 (静) ころも  
 (内) ころも  
 (神1) ころも  
 (統) ころも  
 (統書) ころも  
 (統内) ころも  
 (神2) ころも

右 浦秋夕  
 (国) はかなしなたか世を聞 も身をうらにあまの袖かる秋の夕 暮  
 (大) きく  
 (ノ) きく  
 (彰) きく  
 (明) はかなしなたか世を聞 も身を浦 にあまの袖かる秋の夕 くれ  
 (伊) 浦  
 (島) 浦 くれ  
 (祐) 浦 ゆふくれ  
 (書) 浦  
 (三) 浦  
 \* (三) は「身をうらみ」と作る。連想による誤記か。

(静) 軒梅(島)(祐)  
 (内) 下もゆる軒のしのふの梅かゝに昔 を問 て春風 そふく  
 (神1) した 忍 の むかし とひ  
 (統) した 忍 の むかし とひ  
 (統書) した 忍 の むかし とひ  
 (統内) した 忍 の むかし とひ  
 (神1) した 忍 の むかし とひ  
 (内) した 忍 の むかし とひ  
 (伊) した 忍 の むかし とひ  
 (島) した 忍 の むかし とひ  
 (祐) した 忍 の むかし とひ  
 (書) した 忍 の むかし とひ  
 (三) した 忍 の むかし とひ  
 (静) した 忍 の むかし とひ  
 (明) したもゆる軒の忍 の梅かゝに昔 をとひて春風 そ吹  
 (伊) した 忍 の むかし とひ  
 (島) した 忍 の むかし とひ  
 (祐) した 忍 の むかし とひ  
 (書) した 忍 の むかし とひ  
 (三) した 忍 の むかし とひ  
 (静) した 忍 の むかし とひ  
 (内) した 忍 の むかし とひ  
 (神1) した 忍 の むかし とひ  
 (統) した 忍 の むかし とひ  
 (統書) した 忍 の むかし とひ  
 (統内) した 忍 の むかし とひ  
 \* (統) は「崩る」に「もゆイ」と傍書。「崩」は「萌」の誤写か。

(神2) 下 萌 る むかし とひ

右 菊久盛(静)(彰)

(国) 老やいつ霜をいたく後 もなを花 は盛 の庭の白菊

(大) 猶 はな さかり

(ノ) 猶 さかり しら

(彰) 猶 さかり

(明) 老やいつ霜をいたく後 も猶 花 はさかりの庭の白菊

(伊) 猶 さかり きく

(島) 猶 のち

(祐) 猶 のち はな さかり しらきく

(書) 猶 さかり

(三) 猶 さかり

(静) 猶 しら

(内) 猶 さかり

(神1) 猶 さかり しら

(統) 猶 さかり

(統書) 猶 さかり

(統内) 猶 盛り さかり

(神2) 猶 さかり

七十五番左 帰鴈幽

(国) 常 世までたか偽 の中 ならんかすめてかへす鴈 の玉 章

(大) 猶 ところよ いつはり

(ノ) 猶 ところよ いつはり む

(彰) 猶 ところよ いつはり 札

(明) とこよまでたかいつはりの中 ならんかすめてかへす鴈 の玉 章

(伊) とこよ いつはり つさ

(島) とこよ いつはり かり

(祐) とこよ いつはり かり

(書) とこよ いつはり かり

(三) とこよ なか む

(静) とこよ なか む

(内) とこよ 返す

(神1) とこよ

(統) とこよ たまつさ

(統書) とこよ たまつさ

(神2) とこよ たまつさ

右 薄暮霧(明)(伊)(大)(神1)(十五ウ)

(国) うき秋の思 そいと身にせまる霧に道 なき夕 暮 のやと

(大) おもひ 宿

(ノ) おもひ 宿

(彰) うき秋のおもひそいと身にせまる霧に道 なき夕 暮 のやと 宿

(明) おもひ

(伊) おもひ

(島) おもひ

(祐) おもひ

(書) おもひ

(三) 思 ひ 宿

(静) 思 ひ 宿

(内) 思ひ 宿  
 (神1) 思ひ くれ  
 (統) おもひ 宿  
 (統書) おもひ 宿  
 \* (統書) は「身をせよる」の「よ」にミセケチ「ま」と傍書。書き損じ故だろ  
 う。  
 (統内) おもひ まさ 宿  
 \* (統内) は他本「身にせまる」に対して「身にまさる」と作る。連想による書  
 き損じか。  
 (神2) おもひ 宿  
 七十六番左 春草(国)  
 (国) 風ふけはなひくことのはうちかはし妻 こめいそく野への若草  
 (大) 葉  
 (ノ) 葉  
 (彰) 葉  
 (明) 風ふけはなひくことの葉うちかはし妻 こめいそく野への若草  
 (伊) 葉  
 (島) 葉 つま わか  
 (祐) 葉 つま わか  
 (書) 葉 つま わか  
 (三) 吹は 葉  
 (静) 吹は 葉  
 (内) 吹は 葉 妻籠いの  
 (神1) 葉 つま 辺  
 (統)

(統書) つま 辺  
 (統内) つま 辺  
 (神2) つま 辺  
 右 萩風(彰)  
 \* (静) は「萩」にミセケチ「萩」と傍書。  
 (国) 萩 はらや年 秋のやとりとる風 のつかひになにさはくらん  
 (大) おき 使 に  
 (ノ) おき 使 に  
 (彰) 原 使 に  
 (明) おき原 や年 秋のやとりとる風 のつかひになにさはくらん  
 (伊) おき原 とし ×む  
 (島) おき原 とし  
 (祐) おき とし  
 (書) 原 使 に  
 (三) 原 使 に  
 (三) 原 使 に  
 (静) 原 使 に  
 \* (静) は「萩」にミセケチ「萩」と傍書。  
 (内) おき原 かせ 使 に何  
 (神1) 原 々 使 に何  
 (統) 原 とし 何  
 (統書) 原 とし 何  
 (統内) 原 とし 何  
 (神2) 原 とし 何

七十七番左 花如雪」(内)

\*私集大成は「雪」を「香」と読む。

(国) 花如雪

\*漢文的語法としては(国)の表記がよい。

(彰) 如花雪

(大) 如花雪

(ノ) 如花雪

(明) 如花雪

(伊) 如花雪

(島) 如花雪

(祐) 如花雪

(書) 如花雪

(三) 如花雪

(静) 如花雪

(内) 如花雪

(神1) 如花雪

\* (神1) は(国)・(統)・(静)・(三)と同文。

(統) 如花雪

(続書) 如花雪

\* (続書) は如花雪の「如」をミセケチで「花」と「雪」の間に「如」を傍書。

(続内) 如花雪

(神2) 如花雪

(国) よし野山・月の末にふききて去年の嵐の埋雪かな

\* (国) は別筆で「三イ」と傍書。

(彰) 吉 やよひすゑ うつむ哉

(大) 吉 弥生すゑこそ

(ノ) 吉 弥生 うつむ哉

(明) 吉 野山弥生の末にふききて去年の嵐のうつむ雪哉

(伊) 吉 弥生 うつむ哉

(島) 吉 弥生 うつむ哉

(祐) 吉 やよひすゑ あらし うつむ哉

(書) 吉 三月 あらし うつむ哉

(三) 三月 あらし

\* (三) は(書)・(神1)と同じく「三月」と表記。

(静) の すすふ し うつむ哉

\* (内) は「ふききて」が「ふふきして」と作る。独自の変改か。独自本文。

(神1) 吉 三月末 うつむ

(続) 吉 やよひ しこそ うつむ

\* (続) は「ふききて」が(内)と同文

(続書) 吉 やよひ しこそ うつむ

(続内) 吉 やよひ しこそ うつむ

(神2) 吉 やよひ こそ うつむ

右 山月」(内) (ノ)

(国) あなし山 あらしや雲をまきもくのひはらは秋の雪の月かけ

(大) 嵐 卷向 影

(ノ) 嵐 卷向 檜原 影

(彰) 嵐 卷向 檜原 影

(明) あなし山 嵐 や雲を卷向の檜原は秋の雪の月影

(伊) 嵐 卷向 檜原 ゆき  
 (島) 卷向 檜原  
 (祐) やまあらし 檜原  
 (書) 嵐 卷向 檜原 影  
 (三) 卷向  
 (静) 嵐  
 (内) 卷向  
 (神1) 卷向 檜原の 影  
 (統) 嵐 卷向 檜原の 影  
 \* (統) は他本「檜原は」とするところを、「檜原の」に作る。独自本文。  
 (統書) 嵐 卷向 檜原の 蔭  
 \* (統書) は(統)と同じく「檜原の」と作る。  
 (統内) 嵐 卷向 檜原の ゆき  
 (神2) 卷向 檜原 影  
 \* (神2) が「檜原は」とするので、(統)は誤植か、誤読か。  
 七十八番左 早春「(明)(伊)(神1) (十六オ)  
 (国) うきなからさすか都 そ誰 もすめさてもそふるき春もきぬらん  
 \*私家集大成は「ふかき」と読むが、(国)は「る」とも「か」とも読める。こ  
 こは「る」と読みたい。但し、和歌の用例に、「ふかき春」はあるが、「ふるき  
 春」はない。但し、「る」か「か」は微妙である。  
 (大) たれ 古き  
 (ノ) たれ 古き  
 (彰) たれ  
 (明) うきなからさすか都 そたれもすめさてもそふるき春もきぬらん  
 (伊) たれ

(島) みやこ たれ  
 (祐) みやこ たれ  
 (書) たれ  
 (三) たれ  
 (静) たれ  
 (内) たれ  
 (神1) たれ  
 (統) たれ  
 (統書) たれ  
 (統内) たれ  
 \* (統内) は他本「さてもそ」を「さても」と作る。書き損じか。  
 (神2) たれ  
 右 紅葉「(大)(彰)  
 (国) 時 雨つゝもみち色こき忍 山 たか胸 こかす夕 なるらん  
 (彰) しくれ 紅葉 しくれ 山 たか胸 こかす夕 なるらん  
 (大) しくれ 紅葉 しくれ 山 たか胸 こかす夕 なるらん  
 (ノ) しくれ 紅葉 しくれ 山 たか胸 こかす夕 なるらん  
 (明) しくれつゝ紅葉色こき忍 山 たか胸こかす夕 なるらん  
 (伊) しくれ 紅葉 しくれ 山 たか胸こかす夕 なるらん  
 (島) しくれ 紅葉 しくれ 山 たか胸こかす夕 なるらん  
 (祐) しくれ 紅葉 しくれ 山 たか胸こかす夕 なるらん  
 (書) しくれ 紅葉 しくれ 山 たか胸こかす夕 なるらん  
 (三) しくれ 紅葉 しくれ 山 たか胸こかす夕 なるらん  
 (静) しくれ 紅葉 しくれ 山 たか胸こかす夕 なるらん  
 (内) 紅葉 しくれ 山 たか胸こかす夕 なるらん  
 誰×むね む

(神1) 紅葉 たれむね む

\* (神1) は「たれ」とつくる。(国)(大)(めい)は「たか」。(内)は「誰」。これは「たれ」と読んだか。

(続) 紅葉 忍ふ むね ゆふへ

(続書) 紅葉 忍ふ むね ゆふへ

(続内) 紅葉 忍ま むね ゆふへ

\* (続内) は他本「忍ふ」を「忍ま」と作る。「ま」と「ふ」を書き間違ったか。

(神2) 紅葉 忍ふ むね ゆふへ

七十九番左 海辺霞(島)(祐)(静)

(国) あはちかた霞 をあみに引 あまのつなてとみるや嶺の横雲

(大) 淡路 網 縄手 よこ

(ノ) 淡路 網 縄手 峯 よこ

(彰) 淡路 網 ひく 網手見 よこ

\* (彰) は「細」にミセケチ「網」と傍書。別筆か。

(明) 淡路かた霞 を網に引 あまの縄手とみるや嶺のよこ雲

(伊) 淡路 かすみ 網 縄手 よこ

(島) 淡路 かすみ 網 縄手 よこ

(祐) 淡路 かすみ 網 ひく 縄手見 みね よこ

(書) 網 網 ひく 網手見 よこ

(三)

(静)

(内) のを引 海士 縄手見

\* (内) は「霞の網を」と作る。他本は「霞を網に」とする。独自の变改か。独自本文。

(神1) 淡路 の網を 縄手 よこ

\* (神1) は(内)と同じく「霞の網を」と作る。同系統の本文。

(続) 淡路 つな手

\* (続) は「霞を」の「を」を「のイ」、「あみに」の「に」を「をイ」と傍書。

(内) と同じ本文がイであるか。(続)の異本が(内)・(神1)の本文ということ

だろう。そして、(続)と同一系統(そのまま写した可能性が高いが)が(神2)

ということだろう。

(続書) 淡路 つな手

(続内) 淡路 つな手 見

(神2) 淡路 つな手

右 行人隔霧

(国) 霧ふかみ駒ゆきよはるほとなれや声を合 て過る旅人

くカ

\* (国) は、他本「駒引」を「駒ゆき」、「大」「かへる」(明)・(内)「よくる」

を「よはる」と作る。最終形態か。但し、「よはる」の「は」の母字が不明「反」

にみえる。これで「は」か。それとも、「く(母字は久)、もしくは「わ(母字は

王)」とでも書こうとしたか。

(大) 引 かくる程 すく たひ

(ノ) ひきよくる

(彰) 引 よくる あはせ

(明) 霧ふかみ駒引 よくるほとなれや声を合 て過る旅人

(伊) 引 よくる こゑ あはせて

(島) 引 よくる こゑ あはせて

\* 「よはる」は(大)では「かへる」「かつる」に読める。だが、(明)本系はいずれも「よくる」。

(祐) 引 よくる こゑ あはせて

(書) 引 よくる ころ 合 て

(三) 行 よくる程 あはせて すく

\* (三) 〓 (静)。 行 よくる程

(静) 行 よくる程

\* (静) は、「駒行」で (国) と同じだが、「よくる」で (明) と同じ。(国) の

前の段階か。

(内) 引 よくる程 ころ 合 て

(神1) 引 よくる ころ 合 て

(統) 引 よくる あはせて たひ

(統書) 引 よくる あはせて

(続内) 引 よくる あはせて

(神2) 引 よくる あはせて

八十番 左 早春氷

(国) やまと川 人も心 をめくらすや氷 とけ行 比 の哥 かた

(大) 大和河 ころ ゆく

(ノ) 大和 ころ ゆく

(彰) 大和 ころ ゆく

(明) 大和川 人も心 をめくらすや氷 とけ行 比 の哥 かた

(伊) 大和 ころ ゆく

(島) 大和 ころ ゆく

(祐) 大和 ころ ゆく

(書) 大和 ころ ゆく

(三) 河 ころ ゆく

(静) 大和 ころ ゆく

(内) 大和 ころ ゆく

\* (内) は末尾が「水のうたかた」。独自本文。

(神1) 大和 ころ うた

\* (神1) は (内) と近いところもあるが、ここは (大)・(明)・(国) の本文に

拠っている。混淆本文か。

(統) かは 水 のうた

\* (統) は (内) と同様に、末尾が「水のうたかた」同一系統。

(続書) かは 水 のうた

\* (続書) は「水解」の「解」にミセケチ「とけ」と傍書。(内)系を見た結果

か。

(神2) かは 水 解 行 水 のうた

\* (神2) は「ころ」にミセケチ「水」と傍書。つまり、(内)系の本を見て、

(水)にしたのである。

右 駒迎 (国) (神1) (彰)

(国) あふ坂 やひま行 駒 に引 そへてほとなや秋のもち月のかけ

\* (国) は「もみち」と記して「み」にミセケチ。

(大) 逢 ゆくこま 望 影

(ノ) 逢 望 影

(彰) 相 望 影

(明) 逢坂 やひま行 駒 に引 そへてほとなや秋の望 月の影 (十六ウ)

(伊) 逢 望 影

(島) 逢 望 影

(祐) 逢 望 影

(書) 逢 望 影

(三) 逢 望 影

(静) 逢 望 影

(内) 逢 望 影

\* (三) は「もみ月」の「み」にミセケチ「ち」と傍書。書き損じ故だろう。

(静) 逢 影

(内) 望 望 影

(神1) さか

(統) 逢 ひき

(統書) 逢 ひき

(統内) 逢 ひき

(神2) 逢 ひき

影

(統) 朧月  
(統書) 朧月  
\* (統書) は「朧々月」の「々」にミセケチ。(内) 系で校訂。  
(統内) 朧月  
\* (統書) をそのまま受けているか。  
\* (神1) (内) (群) は同文。  
(神2) 朧々月  
\* (神2) は(群)にはぼ忠実なのに、なぜかここでは(大)(明)(国)系と同文。

八十一番左 朧々月

(国) 朧々月

(大) 朧々月

(ノ) 朧々月

(彰) 朧々月

(明) 朧々月

(伊) 朧々月

(島) 朧々月

(祐) 朧々月

(書) 朧々月

(三) 朧々月

(静) 朧々月

\* (内) (統) (神1) が「朧月」。

(内) 朧月

\* (内) が「朧月」。(統) 系が「朧月」なのは、(内) がどこかで効いているの  
だろう。

(神1) 朧月

(国) 花の香のおほつかなくともる夜は照 にもまざる 閨の月かけ

(大) 花の香のおほつかなくともる夜は照 にもまざる 閨の月かけ

(ノ) か 曇 × 夜 影

(彰) か 曇 × 影

(明) 花の香のおほつかなくともる夜は照 にもまざる 閨の月かけ

(伊) 花の香のおほつかなくともる夜は照 にもまざる 閨の月かけ

(島) 花の香のおほつかなくともる夜は照 にもまざる 閨の月かけ

(祐) か 曇 ねや 影

(書) か 曇 てる 影

(三) か 曇 よ てる 影

(静) か 曇 影

(内) か 曇 てる 影

(神1) か 曇 てる 影

(統) 曇る 影

(統書) 曇る 影

(統内) 曇る 影

(神2) 曇る

右 月前秋風」(大)

(国) たかならす月の扇 そ雲 の袖 空にみたれてかよふ秋 風

(大)

(ノ) 誰か

(彰) 誰か

(明) たかならす月の扇 そ雲 の袖 空にみたれて通 ぶ秋 かせ

(伊) 通

(島) くものそて

(祐) くものそて

(書) 通

(三) 通

(静) 通

(内) 誰×ならず あふき 通 ×あきかせ

(神1) 通

(統) 乱れ

(統書) 乱れ

(続内) 乱れ

(神2) 乱れ

八十二番左 古郷花

(国) からき世を古 郷 人は跡 たえて花のみのこるしかの浜 まつ

\* (国) は他本「ふりて」を「たえて」と作る。最終形態か。

(大) ふる

(ノ) ふる

(明) はま松

(彰) 松

(彰) からき世を故 郷 人は跡 ふりて花のみのこるしかの浜 松

(明) 故

(伊) 故

(島) 故

(祐) ふるさと

(書) あとふり

(三) 古て

\* (三) は「つらき世」と作る。誤読に基づくか。

(静) 古て

\* (静) も「古て」と作る。

(内) ふり

\* (内) は、「ふり」と作る。

(神1) ふり

\* (神1) は末句が「浜風」となっている。誤写か、読み損じか。次の歌に「浜風」があり、それに目に移ったか。

(統) ふる里

(統書) ふる里

(続内) ふる里

(神2) ふる郷

右 潟月」(彰)

(国) 限 なき秋の思 もきさかたや月に浜 風 ふけぬこの夜は」

(大) 限

(ノ) かきり

(彰) おもひ

(明) 思

限 なき秋の思 ひもきさかたや月に浜 風 ふけぬ此 よは

(彰) 思

(明) 限

なき秋の思 ひもきさかたや月に浜 風 ふけぬ此 よは

(彰) 思

(明) 限

なき秋の思 ひもきさかたや月に浜 風 ふけぬ此 よは

(彰) 思

(伊) 思ひ 此よ  
 (島) おもひ よ  
 (祐) おもひ はま  
 (書) 思ひ 此よ  
 (三) おもひ 此よ  
 (静) 思ひ 此よ  
 (内) 思ひ 此よ  
 (神1) 思ひ 此よ  
 \* (神1) は他本「きさかた(象潟)」を「きえかた」と作る。思ひが消えと  
 ったか。誤読に基づくか。  
 (統) 限り おもひ 象潟  
 (統書) 限り おもひ 象潟  
 (統内) 限り おもひ 象潟  
 (神2) 限り おもひ 象潟  
 八十三番左 帰鴈(神1)(ノ)  
 (国) 天 川逢 せもしらて鴈 のより羽にならふ春の鴈 かね  
 (大) 河あふ かさゝき は  
 (ノ) あふ かさゝき は  
 (彰) あふ かさゝき は  
 (明) 天の川逢 せもしらてかさゝきのより羽にならふ春の鴈 金(十七オ)  
 (伊) 河 瀬 かさゝき 金  
 (島) あふ かさゝき 金  
 (祐) あふ かさゝき は  
 (書) あふ かさゝき 金  
 (三) 河 かり

(静) 河あふ瀬 ぬかさゝき かり  
 (内) \* (内) は「あふ瀬もしらぬ」と作る。他本は「しらて」。独自本文。  
 \* (神1) のあふ かさゝき かり金  
 (統) 河あふ は かり  
 (統書) 河あふ は かり  
 (統内) 河あふ は かり  
 (神2) 河あふ は かり  
 右 浦鴈(静)  
 (国) 春や夢秋風 よするうらの浪 ひとりそかへる初 鴈の声  
 (大) なみ 帰る かり  
 (ノ) 浦 なみ 帰る かり  
 \* (ノ) は「帰る」に「本ノマ、」と傍書。漢字になっているのを気にしたか。  
 (彰) 浦 浪 こゑ  
 (明) 春や夢秋風 よする浦 のなみひとりそかへる初 かりのこゑ  
 (伊) 浦 なみ かり  
 (島) なみ かり  
 (祐) 浦 なみ かり  
 (書) 浦 なみ かり  
 (三) 浦 なみ かり  
 (静) \* (静) ここから88番歌まで場所が異なっている。  
 \* (神1) 浦 なみ 帰る かり  
 (統) 浦 波 はつかり

(続書) 浦 波 はつかり  
 (続内) 浦 波 はつかり  
 (神2) 浦 波 はつかり

八十四番左 初春霞(島)(祐)

(国) さほ姫の雪のはたへの蘿 やあらしのひまの霞 なるらん

(大) ひめ うす物 や嵐 む

(ノ) 棹 薄物 や嵐

(彰) ひめ うす物 や嵐

(明) 棹 姫の雪のはたへの薄物 や嵐 のひまの霞 なるらん

(伊) 棹 薄物 や嵐 かすみ成

(島) 棹 薄ものや

(祐) 棹 うすものや む

(書) 棹 薄物 や嵐

(三) 「」

(静) 「」

\* (静) は「蘿」にミセケチ別筆で「羅」と傍書。

(内) 棹 薄物 やあらし

(神1) 棹 薄物 や嵐 かすみ

(続) うすものや嵐 かすみ

(続書) うすものや嵐 かすみ

(続内) 雲 うすものや嵐 に かすみ

\* (続内) は他本「雪」を「雲」、「嵐」に「嵐の」と作る。書き損じが多い。

(神2) うすものや嵐 かすみ

右 初秋露(大)(彰)

(国) うき身とてめさましくさの袂より結 か露を秋の初 かせ

(大) 目 草 結 ぶ

(ノ) み 草 草 結 ぶ

(彰) 草 草 結 ぶ

(明) うき身とてめさまし草 の袂よりむすふか露を秋の初 かせ

(伊) 草 草 結 ぶ

\* (伊) は「露を」を「露の」の「の」をミセケチで「を」と傍書。

(島) 草 草 結 ぶ

(祐) 草 草 結 ぶ

(書) 草 草 結 ぶ

(三) 草 草 結 ぶ

\* (三) は「身き身」の最初の「身」にミセケチ「う」と傍書。書き損じ故だろ

う。

(静) 「」

(内) 草 結 ぶ

(神1) 草 結 ぶ

(続) 草 結 ぶ

(続書) 草 結 ぶ

(続内) 草 結 ぶ

(神2) 草 結 ぶ

八十五番左 若菜(国)

(国) 神山や卯月 は遠き葵 草 これも二葉をとる若 かな

(大) あふひ は取若 菜哉

(ノ) う

(彰) とをきおふひ わか 菜

(明) 神山やう月 は遠き葵 草 これも二葉をとる若菜哉  
 (伊) う  
 (島) う あふひくさ  
 (祐) うつき あふひくさ  
 (書) う とをき  
 (三) う とをき  
 \*(三) || (静)。  
 (静) とをき  
 (内) あふひ 哉  
 (神1) あふひ 哉  
 (続) わかな  
 (続書) わかな 菜哉  
 (続内) あふひ わかな  
 (神2) あふひ わかな  
 右 萩風〔伊〕(神1) うきことになすも心 そ秋の風 めてゝをきかん露 の下萩  
 (国) うきことになすも心 そ秋の風 めてゝをきかん露 の下萩  
 (大) 事  
 (ノ) 事  
 (彰) 事 はき  
 \*(彰) は他本「萩」を「はき」と読んだ。  
 (明) うき事 になすも心 そ秋の風 めてゝをきかむ露 の下萩〔十七ウ〕  
 (伊) 事  
 (島) こゝろ  
 (祐) こゝろ  
 (書) 事  
 (書) 事

(三) 事 かせ  
 (静) 嵐 そ かせ  
 (内) こゝろ かせ  
 (神1) 事 嵐 そ かせ  
 \*(神1) は他本「心」とあるのを「嵐」とする。理由は不明。「嵐」の「山」冠を心と読み誤ったか。  
 (続) 事 聞  
 (続書) 事 聞  
 (続内) 事 聞  
 (神2) 事 聞  
 八十六番左 落花  
 (国) 山桜 ちりてくちすは世々の花 つもるを雪の高ねとやみん  
 (大) さくら散て朽す代 代、  
 (ノ) 散て 代、  
 (彰) 散て 代、  
 \*(彰) は他本「つもるを」を「つもるも」と作る。  
 (明) 山桜 ちりてくちすは代々の花 つもるを雪の高根とやみん  
 (伊) 代  
 (島) 代 はな  
 (祐) 代  
 (書) 代 はな  
 (三) はな たか 見  
 (静) たか 見  
 (内) 朽す代、 根  
 (神1) 代、 根



(伊) 月前雲

(島) 月前雲

(祐) 月前雲

(書) 寄・旅にミセケチ 月前雲

(三) 寄月旅

(静) 寄月旅

(内) 月前竹風

(神1) 月前竹風

(統) 寄月旅(月前竹風イと傍書)……(内)との校訂による。

(続書) 寄月旅

(続内) 寄月旅

(神2) 寄月旅

(国) さむしとも誰にか岩の上の袖雲の衣のうすきよの月

(大) (大)は「誰に」の次に「そ」に「か」と傍書、その次の「は」に「ミセケチ」とはいえ、(大)はこの歌の題が国会図書館本と共通。また、「袖雲」が「袖月」、

「衣の」が「衣は」になっており、(明)が書き改める直前の状態を示している。となると、この本の文明五年は本当の可能性もある。もう少し調査の必要を感じる。ミセケチ以前を移した可能性もある。その場合は、(明)の方が古い。(明)

には花押があるが、(大)にはない。だが、(大)の字はよい。悩みどころである。(ノ) × 月 は 雲かな

\* (ノ)は「上袖」の間に「の敷」と傍書。本文は、(ノ) || (大)。(ノ)は

(大)系である。 たれ 雲かな

(彰) たれ 雲かな

\* (彰)は本文的には(神1)よりも(大)に近い。

(明) さむしともたれにか岩の上の袖雲の衣のうすき夜の月

\* (明)は「月にミセケチ 雲」、「衣は」に「ミセケチ」「衣の」、「雲かな」に

「夜の月」と傍書。いずれも同筆。

(伊) たれ 夜の月

(島) たれ 夜の月

(祐) たれ 夜の月

(書) たれ 月 は 雲かな

\* (書)は「月に「雲」、衣は」の「は」に「の」、「雲かな」に「夜の月」と

傍書。同筆。但し、(明)異なり、ミセケチはない。

(三) || (静) || (国)。

\* (三) || (静) || (国)。

(静) (国)と同じ。(大)によっていない。

(内) 霜なから月吹いたす呉竹のあらしに秋もちるあられかな

\* (内)は題と同様、歌も別の歌である。同歌は、今のところ、見いだせない。独自本文。

(神1) 露なから月吹いたす呉竹の嵐に秋もちるあられかな

\* (神1)は(内)と題と共に同文。

(統) いは うへ 月の は 雲かな

\* 霜なから月吹いたす呉竹のあらしに秋もちるあられかなイと傍書

\* (統)は(大)と同じで、また、イは(内)と同じ。題「月前竹風」(神1)

|| (内) || (統)の異本。 いは うへ 月の は 雲かな

(続書) いは うへ 月の は 雲かな

(続内) いは うへ 月の は 雲かな

(神2) いは うへ 月の は 雲かな

\* (統) || (神2)は(大)の本文。

八十八番左 曉花「(伊)(静)(神1)」

(国) 明 ぬとて別 よいかにいもせ山 花にそふ夜の月の宮 人

(大)

(ノ) あけ

(彰) あけ

(明) あけぬとて別 よいかにいもせ山 花にそふ夜の月の宮 人「(十八オ)」

(伊) あけ

(島) あけ

\*「別よ」の「よ」は場合によっては「に」に誤読しやすい

(祐) あけ

(書) あけ

(三) あけ

(静) あけ

(内) あけ

(神1) あけ

(統) わかれよ

(統書) わかれよ

(統内) わかれよ

(神2) わかれよ

右 秋夕雲「(ノ)(彰)」

(国) 定 なく時 雨ん雲を秋 の袖涙

(大) さため

(ノ) さため

(彰) さため

(明) さためなくしくれん雲を秋 の袖涙 にいそく夕 まくれ哉

(伊) さため

(島) さため

(祐) さため

(書) さたね

(三) さたね

(静) さたね

(内) さたね

(神1) さたね

(統) さため

(統書) さため

(統内) さため

(神2) さため

八十九番左 立春「(島)(祐)」

(国) 天地もめくみをうけて人心 いさみある世に春 はきにけり

(大) 恵 を

(ノ) 恵 を

\* (ノ) 〓 (大)

(彰) 天地もめくみをうけて人心

(明) いさみある世にはるはきにけり

(伊) こゝろ

(島) こゝろ

(祐) こゝろ

(書) こゝろ

(三) 涼 ひとてならず扇を人ことにまねくと見てや秋の来ぬらん  
 (内) 涼 ひとてならず扇を人ことにまねくと見てや秋の来ぬらん  
 (神1) 涼 ひとてならず扇を人ことにまねくと見てや秋の来ぬらん  
 (統) 涼 ひとてならず扇を人ことにまねくと見てや秋の来ぬらん  
 (統書) 涼 ひとてならず扇を人ことにまねくと見てや秋の来ぬらん  
 (神2) 涼 ひとてならず扇を人ことにまねくと見てや秋の来ぬらん  
 (大) 涼 ひとてならず扇を人ことにまねくと見てや秋の来ぬらん  
 (ノ) 涼 ひとてならず扇を人ことにまねくと見てや秋の来ぬらん  
 (彰) 涼 ひとてならず扇を人ことにまねくと見てや秋の来ぬらん  
 (明) 涼 ひとてならず扇を人ことにまねくと見てや秋の来ぬらん  
 (伊) 涼 ひとてならず扇を人ことにまねくと見てや秋の来ぬらん  
 (島) 涼 ひとてならず扇を人ことにまねくと見てや秋の来ぬらん  
 (祐) 涼 ひとてならず扇を人ことにまねくと見てや秋の来ぬらん  
 (書) 涼 ひとてならず扇を人ことにまねくと見てや秋の来ぬらん  
 (三) 涼 ひとてならず扇を人ことにまねくと見てや秋の来ぬらん  
 (静) 涼 ひとてならず扇を人ことにまねくと見てや秋の来ぬらん  
 (内) 涼 ひとてならず扇を人ことにまねくと見てや秋の来ぬらん  
 (神1) 涼 ひとてならず扇を人ことにまねくと見てや秋の来ぬらん  
 (統) 涼 ひとてならず扇を人ことにまねくと見てや秋の来ぬらん  
 (統書) 涼 ひとてならず扇を人ことにまねくと見てや秋の来ぬらん  
 (神2) 涼 ひとてならず扇を人ことにまねくと見てや秋の来ぬらん

(神2) 九十番 左 霞満山  
 (国) なひきあふ草 ならなくに若草の山も霞 にくもる比 かな  
 \* (国) は、他本「妻」とするに「草」、「こもる」とするに「くもる」と作る。最終形態か。  
 (大) 妻 菜  
 (ノ) 妻 菜  
 \* (ノ) は「菜」に「草敷」と傍書。書き損じか。  
 (彰) \* (彰) は「なひあふ」の「ひ」の後に「き」と傍書。  
 (明) なひきあふ妻 ならなくに若草の山も霞 こもる比 哉  
 (伊) 妻 哉  
 (島) つま かすみ こ 哉  
 (祐) つま かすみ こ ころ  
 (書) 妻 哉  
 (三) こ 哉  
 \* (三) は「霞く」の「く」にミセケチ「に」と傍書。  
 (静) 妻 哉  
 \* (静) は「草」にミセケチして別筆で「妻」と傍書。もともとは(国)と同じ。  
 (内) 妻 哉  
 (神1) 妻 哉  
 (統) つま かすみ こ いろ哉  
 \* (統) は「いろ」に「比イ」と傍書。  
 (統書) つま いろ哉  
 (神2) つま いろ哉

(神2) つま こ いろ哉

\* (神2) は異本注記がない。

右 月前萩 (伊) (大) (神1) (彰)

(静) 「萩」ミセケチ「萩」

(国) 曇 なくさし向 ぶ月のさ夜中に 独 かたふく露の下 萩

(大) くもり むか

(ノ) 曇 むか

(彰) くもり むか

(明) くもりなくさしむかぶ月のさ夜中に ひとりかたふく露の下 萩

(十八ウ)

(伊) くもり むか

(島) くもり むか

(祐) くもり むか

(書) くもり むか

(三) (三) は表記も (国) と同一。

(静) おき

(内) くもり むか

(神1) くもり むか

(統) 曇 むか

(統書) 曇 むか

(統内) 曇 むか

(神2) 曇 むか

九十一番左 花半露

(国) 苔薙 ちりしくほとに又ちらは一 も枝 に花 やなからむ

(大) ひとつ

(ノ) むしろ

(彰) 程

(明) 苔薙 ちりしくほとに又ちらは一 も枝 に花 やなからむ

(伊) むしろ

(島) むしろ

(祐) むしろ

(書) むしろ

(三) 程

(静) 程

(内) 程

(神1) むしろ散 し

(統) むしろ散 し

(統書) むしろ散 し

(統内) むしろ散 し

(神2) むしろ散 し

右 南北擣衣

(国) 紫 の上 のきぬたの夜もすからあかしの浪 もうつつひゝき哉

(大) うへ

(ノ) 明石 なみ

(彰) 明石 なみ

\* (彰) は「此」をミセケチ「紫」と傍書。別筆か。

(明) 紫 の上 のきぬたの夜もすから明石のなみもうつつひゝき哉

(伊) 明石 なみ

(島) 明石 なみ かな  
(祐) むらさき 明石 なみ かな  
(書) 明石 なみ  
(三) 波 かな  
(静) よ かな  
(内) 明石 波 打×ひ  
(神1) 明石 なみ かな  
(統) うへ 礎 波 うつ  
(統書) うへ 礎 波 うつ  
\* (統書) は「波もひく」の「ひく」にミセケチ「うつ」と傍書。目移りか。とはいえ、(神2)も全く同じだから、両者の底本もそうなっていたということだろう。

(神2) うへ 礎 波 うつ  
\* (神2) は末句「ひきひき」の最初の「ひき」にミセケチ「うつ」と傍書。(統書)と(神2)はかなり近い本文による。

九十二番左 梅香留袖

(国) 柳たつ霞 の袖 そうちけふる匂 やとむるまじる梅 かゝ  
\* (国) は他本「梅かえ」とするの「梅かゝ(香)」と作る。最終形態か。

(大) むめかえ  
(ノ) にほひ え  
(彰) にほひ え  
(明) 柳たつ霞 の袖 そうちけふるにほひやとむるまじる梅 かえ  
(伊) にほひ え(カ)  
(島) にほひ え

(祐) かすみ にほひ え  
(書) 匂 ひ え  
\* (三) 〓 (静)、本文は(国)と同文。 匂 ひ 香  
(静) 匂 ひ 香  
\* (静) は(国)と同じ。 匂 ひ 香  
(内) そて にほひ 枝 枝  
(神1) 匂 ひ 枝 枝  
(統) 匂 ひ え  
(統書) 匂 ひ え  
(統内) 匂 ひ え  
(神2) 匂 ひ え

右 薄風(彰)  
\* (彰) は題が抜けている。

(国) 契 ありて山田にかよふ稲 妻 を余所よりまねくくろの小薄  
(大) 有て つま よそ を  
(ノ) いな よそ 畔 を  
(彰) 契 ありて山田にかよふ稲 妻 をよそよりまねくくろの小薄  
(明) いなつま よそ  
(伊) いなつま よそ  
(島) いなつま よそ  
(書) いなつま よそ を  
(三) よそ

(静)

(内) 契り有て

いなつま

よそ

を

(神1)

(統書) 契り

よそ

畔

(統書) 契り

よそ

畔

\* (統書) は「畔のふ薄」の「ふ」にミセケチ「小」と傍書。書き損じによるか。

(統内) 契り

よそ

畔

(神2)

契り

よそ

畔

九十三番左 初春霞 (伊) (神1)

(国) 今朝みれは昨

日の雪のうす曇

そのまゝ春にたつ霞

哉

(大) けさ

薄くもり其

(ノ) きのふ

薄くもり

立霞

かな

(彰)

(明) 今朝みれは昨

日の雪の薄

くもり其

まゝ春に立霞

哉 (十九オ)

(伊)

(島) 薄くもり

薄くもり其

立霞

かな

(祐)

\* (島) は「かすむ」と作る。誤写か。

薄くもり

立霞

かな

(書)

\* (祐) は(島)を写したので「かすむ」となる。

薄くもり

立霞

かな

(三)

(静) 見

薄くもり其

立霞

かな

(内)

(神1)

きのふ

薄くもり

立霞

かな

(統)

きのふ

薄くもり

立霞

かな

(統書)

(統内) きのふ

薄くもり

(神2)

きのふ

薄くもり

右 山紅葉 (大)

(国) 立 田山ゆふ付 鳥に村 鳥 かなる色 を秋にとふらん

(大) たつた

むらからす

問ら

(ノ)

つけ

むらからす

(彰)

夕 つけ

むらからす

(明) 立 田山ゆふつけ鳥にむら鳥 かなる色 を秋にとふらん

(伊)

つけ

むら

(島)

たつた

つけ

むら

(祐)

たつた

つけ

むらからす

(書)

からす

(三) たつ田 夕 付 鳥

\* (三) は「夕付鳥の」の「の」にミセケチ「に」と傍書。書き損じ故だろう。

(静)

夕 つけ

むらからす

(内)

夕 つけ

むらからす

(神1)

つけ

からす

(統)

つけ

鴉

(統書)

つけ

鴉

(統内)

つけ

鴉

(神2)

つけ

鴉

九十四番左 霞隔遠樹 (国) (島) (祐) (ノ)

(国) 空 のうみや霞 のみほの見るふさに山松なひく嶺の春風





(神2) 咲し

はふれぬの

\* (神2) は他本「ねふれる」を「はふれぬ」と作る。(続) 系は「花にはふれぬ」という本文で共通する。

右 秋夕(大)(彰)

(国) いかにも思ひの宅をいてぬ身に猶も戸さすや秋の夕暮

\* (国) は他本「家」とするのに、「宅」と作る。理由は不明。

(大) × 家

(ノ) おも 家 出ぬ くれ

(彰) おも 家 出ぬ

(明) いかにもおもひの家を出ぬ身に猶も戸さすや秋の夕暮

(伊) おも 家 出

(島) おも 家 出

(祐) おも 家 出 ゆふくれ

(書) おも

(三) 宿 出ぬ

\* (三) は「宿」と作る。「家」でも「宅」でもない。「宅」を「宿」と読んだか。

(静)

\* (静) は他本「家」を(国)と同じく「宅」とする。

(内) おも 家 出 秋

\* (内) の「秋」の表記は「穠」。

(神1) おも 家

(続) おも 家 出 と

(続書) おも 家 出 と

\* (続書) は「出ぬ身よ」の「よ」にミセケチ「に」と傍書。書き損じ故だろう。

(続内) おも 家 出 と

(神2) おも 家 出 と

九十七番左 初春祝(内)(静)

(国) 雲のにて神の七代に立初る春をもなれやしら鶴の声

(大) そむ つる こゑ

(ノ) そむ つる こゑ

(彰) そむ

(明) 雲のにて神の七代に立そむる春をもなれやしらつるのこゑ

(伊) そむ つる

(島) そむ つる こゑ

(祐) そむ つる こゑ

(書) そむ つる

(三) そむ つる こゑ

\* (三) は「春やも」の「や」にミセケチ「を」と傍書。書き損じ故だろう。

(静) そむ

(内) そむ 白 こゑ

(神1) そむ 白 こゑ

(続) そむ 白

(続書) そむ 白

(続内) そむ 白

(神2) 井 そむ 白

右 早秋霜(内)

(国) 月出 よなにはの蘆のみたれなく露の玉しく初秋の空

(大) いて

(ノ) いて 難波

(彰) いて 難 波 あし  
 (明) 月いてよ難 波のあしのみたれなく露の玉しく初 秋の空  
 (伊) いて 難 波 あし  
 (島) いて 難 波 あし  
 (祐) いて 難 波 あし  
 (書) いて 難 波  
 (三) いて  
 (静) いて  
 (内) 難 波  
 (神1) 難 波  
 (統) 難 波 芦 乱れ  
 (統書) 難 波 芦 乱れ  
 (統内) 難 波 芦 乱れ  
 (神2) 難 波 芦 乱れ  
 九十八番左 霞春衣(伊)(神1)  
 (国) 宮人の柳 さくらの上 の衣 ひとつにはへてたつ霞 かな  
 (大) うへ きぬ 哉  
 (ノ) 桜 桜 桜 哉  
 (彰) 桜 桜 桜 哉  
 (明) 宮人の柳 上のきぬひとつにはへてたつ霞 哉(二〇〇オ)  
 (伊) 桜 桜 桜  
 (島) 桜 桜 桜  
 (祐) やなき うへ きぬ 哉  
 (書) 桜 桜 桜  
 (三) 桜 桜 桜

(静) 立×霞  
 (内) 桜 立×霞  
 (神1) 桜 立×かすみ哉  
 (統) 桜 立×かすみ哉  
 (統書) 桜 立×かすみ哉  
 (統内) 桜 立×かすみ哉  
 (神2) 桜 立×かすみ哉  
 右 遠萩(国)(彰)  
 (国) いかゝねんとを山鳥 の萩 の葉に秋かせ立 ぬ長 夜の夢  
 (大) は 風  
 (ノ) む遠 風 長きよ  
 (彰) 遠 風 長きよ  
 (明) いかゝねん遠 山鳥 の萩 の葉に秋風 立 ぬ長 き夜の夢  
 (伊) 遠 風 長き  
 (島) 遠 風 ながき  
 (祐) 遠 風 おき ながき  
 (書) む遠 風 たちぬ  
 (三) む とり 風 たちぬ  
 (静) 風 たちぬ  
 (内) せむ遠 山とり おき 風  
 \* (内) は「いかゝせむ」と作る。独自本文。  
 (神1) せむ遠 風 ながき  
 \* (神1) は(内)と同じく、「いかゝせむ」と作る。  
 (統) 遠山 風 たちぬながき  
 (統書) 遠山 風 たちぬながき

\* (続書) は「なかき世の□□」に「□□」にミセケチ「夢」と傍書。  
 (続内) 遠山 は とら なかき  
 \* (続内) は他本「たちぬ」とあるに「とらぬ」と読める。書き損じか。この例多し。

(神2) 遠山 は 風 たちぬなかき

九十九番左 梅移水(島)(祐)

(国) 開 梅 のうつるかゝみの浪 のしは花も老木の池の春 風

(大) さくむめ 鏡 なみ かせ

(ノ) さく 鏡 なみ

(彰) さく 鏡 波 はるかせ

\* (彰) は「波のしは」の「は」をミセケチ明確に「は」と傍書。

(明) さく梅 のうつる鏡 のなみのしは花も老木の池の春 風

(伊) 咲× 鏡 なみ

(島) さく 鏡 なみ

\* 「しは」は正しくは「しわ」、「浪のしわ」という表現は古今集以来あり、正徹も用いている。

(祐) さく はるかせ

(書) さく 鏡 なみ

(三) さく 鏡 なみ

\* (三)・(静) は(国)と表記も同文。

(静) さく 鏡 なみ

(内) 咲×梅 鏡 かせ

(神1) さく 鏡 なみ かせ

(続) 咲×梅 波 かせ

(続書) 咲×梅 波 かせ

(続内) 咲×梅 波 かせ  
 (神2) 咲×梅 波 かせ

右 待月(大)(ノ)

(国) 心 ありて夕の雲はいなは山 さてもつれなき嶺 の月かけ

(大) 有て

(ノ) 心 ありて夕の雲はいなは山 さてもつれなき嶺 の月影

(彰) 心 ありて夕の雲はいなは山 さてもつれなき嶺 の月影

(明) 心 ありて夕の雲はいなは山 さてもつれなき嶺 の月影

(伊) こゝろ やま 影

(島) こゝろ やま 影

(祐) こゝろ やま みね 影

(書) こゝろ やま 影

(三) こゝろ やま 影

(静) こゝろ やま 影

(内) 稲葉 峯 影

(神1) 稲葉 峯 影

(続) 稲葉 峯 影

(続書) 稲葉 峯 影

(続内) 稲葉 峯 影

\* (続内) は他本「つれなき」とあるのに「つれなれ」と作る。書き損じか。

(神2) 影

百番 左 残花 の岩 木かな開 てなとめそ山桜 はな

(国) 暮 てゆく春の心 の岩 木かな開 てなとめそ山桜 はな

(大) 行春 咲 さくら花



(続書) の の もし 極  
 (続内) の の もし 極  
 \* (続内) の「もし」の「も」は「と」に読める。  
 (神2) の の もし 極

右 七夕天「静」

(国) 天にして女 神男 神と分 をくや二 の星 の初 なるらん  
 \* (国) は他本「星をはしめ」とするのに、「星の初」と作る。最終形態か。  
 (大) 出 め お をはしめ  
 (ノ) 出 め お をはしめ  
 (彰) 出 め お 此□□星を  
 \* (彰) は「此□□」が意味不明。脱字である。  
 (明) 天にして女 神男 神とわけをくや二 の星 を初 なるらむ  
 (伊) 出 わけ をはしめ成  
 (島) 出 わけ を  
 (祐) 出 わけ を  
 (書) 出 わけ はしめ  
 (三) 出 ほし ん  
 (静) 出 を  
 \* (静) は「二の星の」の「の」にミセケチ別筆で「を」と傍書。  
 (内) 出 ほしを む  
 (神1) 出 わけ を りけん  
 \* (神1) は末句「なりけん」となっている。独自本文だが、他に例がない。誤  
 写か思い違いか。  
 (続) 出 めかみおかみ 分置 やふたつ をはしめ  
 (続書) 出 めかみおかみ 分置 やふたつ ほしをはしめ

(続内) 出 めかみおかみを分置 やふたつ ほしをはしめ  
 \* (続内) は他本「おかみと分」とあるのに、「おかみを分」と作る。書き損じ  
 か。  
 (神2) 出 めかみおかみ 分置 やふたつ ほしをはしめ

百二番左 朝山霞

(国) 出 いつる日の光 に山は空 はれてにしなる嶺に立霞 かな  
 (大) 出 出 西 峯 たつ 哉  
 (ノ) 出 出 西 峯 たつ  
 (彰) 出 出 西 峯 たつ  
 (明) 出 出 日の光 に山は空 はれて西 なる峯 にたつ霞 かな  
 (伊) 出 出 雨 峯 たつかすみ  
 \* (伊) だけ「雨」となっているのは、誤読か。また、(伊) が転写されていな  
 かったことも示すか。  
 (島) 出 ひかり 西 峯 たつ  
 (祐) 出 ひかり そら 西 みね たつ  
 (書) 出 出 そら たつ  
 (三) 出 出 そら たつ  
 (静) 出 たつ 哉  
 (内) 出 晴て  
 (神1) 出 そら 峯 かすみ  
 (続) 出 ひかり 西 たつかすみ  
 (続書) 出 ひかり 西 たつかすみ  
 \* (続書) は「嶺とたつ」の「と」にミセケチ「に」と傍書。書き損じ故だろう。  
 (続内) 出 ひかり 西 たつかすみ  
 (神2) 出 ひかり 西 たつかすみ

右 萩露「大」(彰)

(国) 花の色 は枝にこもれる秋に先 露の玉 さく庭の萩 原

\* (国) において、私家集大成は「花」とするが「玉」であろう。

(大) 花

\* (大) は明確に「花」である。(大) 段階では「花」だったが、(明) に進ん

で、「玉」となったのだろう。但し、冒頭「花」とあり、二度も花を出すのは、

まずいのではないか。

(ノ) 花

\* (ノ) は「露の花さく」とする。(大) と同文。(ノ) は(大) 系。

(彰) 花 咲

\* (彰) は(大) と同じく「花さく」と作る。(大) 系と見てよいか。

(明) 花の色 は枝にこもれる秋に先露の 玉さく庭の萩 原

\* 「花にミセケチ 玉」おそらく(大) をそのまま写して、ここで花の重複に気

づき、「玉」に変えたのだろう。

(伊)

(島) いろ

(祐) いろ はきはら

(書)

\* (明) と異なり、「花」にミセケチ「玉」なし。

(三) はき

(静) \* (静) は「玉」となっており、(大) と同文ではない。意味的と重複によって

従わなかったか。

(内)

\* (内) は末句を「秋はき」と作る。

秋 はき

(神1) 秋 萩

\* (神1) は末句が(内) と同文。

(統) まつ たましく

\* (統) は他本「玉さく」を「たましく」と作る。独自本文。

(統書) まつ たましく

(統内) まつ たましく

(神2) まつ たましく

\* (統書)・(統内)・(神2)・(統) 系は「たましく」で共通する。

百三番左 雪中若菜「(国) (伊) (神1)

(国) はらひえぬかしらの雪はそのまゝに有 て翁 のつむ若 菜かな

(大) 其 あり 若 な 哉

(ノ) 其 あり をきな 若 な 哉

(彰) 其 あり 若 な 哉

(明) はらひえぬかしらの雪はそのまゝにありて翁 のつむ若 な哉

(伊) 摘 哉

(島) あり わかな

(祐) あり わかな

(書) あり わかな

(三) 若 な哉

(静) 若 な哉

(内) 其 儘 若 な哉

(神1) あり 若 な哉

(統) あり 若 な哉

若 な哉

(続書)

あり

哉

(続内)

あり

哉

(神2)

あり

哉

右 初秋月

(国) ゆく秋の雲まほそき明 くれをかねてあらはすみか月のかけ

\* (国) は最終形態の本文か。

(大) 行 朝 まてなれてみよとや三日月のかけ

\* (大) は(明)が補正した前の本文を持つ。

(ノ) 行 秋 間 朝 まてなれてみよとや三日月の影

\* (ノ) 〓 (大)

(彰) 行 秋 朝 まてなれてみよとやみか月の影

(明) 行 秋の雲まほそき明 暮をかねてあらはす三日月のかけ

\* 「朝まで」にミセケチ「明暮を」、「なれてみよとや」に「かねてあらはす」とそれぞれ傍書。

(伊) 行 間 朝 三日月

\* 「朝まで」にミセケチ「明暮を」、「なれてみよとや」に「かねてあらはす」とそれぞれ傍書。

(島) 行 間 朝 三日月

\* 「朝まで」にミセケチ「明暮を」、「なれてみよとや」に「かねてあらはす」とそれぞれ傍書。

(祐) 行 間 朝 三日月

\* 「朝まで」にミセケチ「明暮を」、「なれてみよとや」に「かねてあらはす」とそれぞれ傍書。

(祐) 行 間 朝 三日月

\* 「朝まで」にミセケチ「明暮を」、「なれてみよとや」に「かねてあらはす」とそれぞれ傍書。

(書) 行 秋 明け暮 をかねてあらはす三日月

\* (書) は(明)と同じく、「朝までなれてみよとや」にミセケチ「明け暮をか

ねてあらはす」と傍書。

(三) 行 秋 間 朝 三日月

\* (三) 〓 (国) 〓 (明) 系の傍書(校訂)部分

\* (国) は最終形態の本文だろう。「松下集」に入っているから当たり前とも言えるが、さらに追求したい。

(静) 行 秋 間 朝 まてなれてみよとや三ヶ月

\* (静) は「明くれをかねて現す」にミセケチ「朝までなれてみよとやイ」と傍書。(大)系によって校訂した。先祖返り。(大)系本文〓 (大) (神1) (内)

(続) (神2)。

(内) 行 朝 まてなれてみよとや三日月のかけ

\* (内) は(大)と同じ本文。

(神1) 行 秋 間 朝 まてなれてみよとや三ヶ月

\* (神1) は(内)と同文。つまり、(大)と同文。

(続) あしたまでなれてみよとや三ヶ月 影

\* (続) は、(大)の「朝まで」を「あしたまで」と読んだ。とすると、(内)も

そうか。また、(内)と同様に、「かねてあらはす」ではなく「なれてみよとや」という(大)と同じ本文をもつ。

(続書) あしたまでなれてみよとや三ヶ月

(続内) あしたまでなれてみよとや三ヶ月 影

(神2) あしたまでなれてみよとや三ヶ月

百四番左 春月(島)(祐)

(国) 春雨に霞 の袖 や朽 ぬらんはるれはたえてすめる夜の月

(大) かすみ よ

(ノ) よ

\* (ノ) は「よの月」の表記が(大)と同一。

(彰) くち よ

(明) 春雨に霞 の袖 やくちぬらんはるればたえてすめる夜の月

(伊) くち

(島) そて

(祐) かすみ そて

(書) くち

(三) くち

(静) くち

(内) 晴 れは

(神1) くち

(続) くち

(続書) くち

(続内) くち

(神2) くち

右 秋月「(彰)

(国) なかれての磯 の神 世の秋の月ふるき世のともみえぬ影 哉

(大) いそ かみ 古 き

(ノ) いそ 代 古 き

(彰) いそ 代 見

(明) なかれてのいその神 代の秋の月古 き世のともみえぬ影 哉

(伊) いそ 代 古

(島) いそ 代 古

(祐) いそ 代 古 見 かけかな

(書) いそ 代 代 見 かけかな

(三) よ かけ

(静) 見 かな

(内) かみ代 代 見 かな

(神1) いそ かみ代 代 見 かな

(続) いそ かみ代 代 見 かな

(続書) いそ かみ代 代 見 かな

(続内) いそ かみ代 代 見 かな

(神2) いそ かみ代 代 見 かな

百五番左 雲雀「(ノ)

(国) ちる花 の雲路のひはり声 落 てわか床たとの雪のあさちふ

(大) はな ち こゑ

(ノ) \* (ノ) は「浅茅」に「生敷」と傍書。書き損じか。 我 床 浅 茅

(彰) ちる花 の雲路のひはりこゑ 落 て我 床たとの雪のあさちふ

(明) ちる花 の雲路のひはりこゑ 落 て我 床たとの雪のあさちふ

(伊) ちる花 の雲路のひはりこゑ 落 て我 床たとの雪のあさちふ

(島) はな ち こゑ

(祐) はな ち こゑ

(書) ち こゑ 我 床

(三) ち こゑ 我 床

(静) ち こゑ 我 床

(内) ち こゑ 我 床

(神1) ち こゑ 我 床

(続) 散×花 ち こゑ 我 床

(続書) 散×花 ち こゑ 我 床

(続内) 散×花 ち こゑ 我 床

浅 茅生

(神2) 散×花

おち

浅茅生

右 田家虫(伊)(大)(神1)

(国) 小山田のかりほもさそなかりはて、秋もいなこの宿 そ稀 なる

(大)

まれ

(ノ)

やと まれ

(彰)

やと まれ

\* (彰) は「かりほの」の「の」にミセケチ「も」と傍書。同筆か。

(明) 小山田のかりほもさそなかりはて、秋もいなこのやとそまれなる

(二一ウ)

(伊)

やと まれ

(島)

「 やと まれ

(祐)

「 やと まれ

(書)

「 やと まれ

(三)

に

\* (三) は「秋に」とつくる。「も」を「に」と読んでしまったか。

(静)

荊 は

(内)

荊 は

(神1)

まれ

(統)

荊 は きみそ

\* (統) は「きみに」に「宿イ」と傍書。「きみそ」は独自本文。

(統書)

きみそまれ

\* (統書) は「小山田」の上に「いなこ」と傍書。

(統内)

きみそまれ

(神2)

きみそまれ

\* (神2) は(統)と同文。(統)系は末尾が「きみそまれなる」となる。

百六番左 花下忘帰(静)

(国) さかぬまも花 にひらけし色もなく別 て嶺に帰る雲 かな

(大)

わかれ 峯 かへる

(ノ)

わかれ 峯 かへる

(彰)

わかれ かへる

(明) さかぬまも花 にひらけし色もなくわかれて嶺に帰る雲 哉

(伊)

わかれ 峯 哉

(島)

わかれ かへる 哉

(祐)

はな 開 し × わかれ かへるくも

(書)

わかれ かへる

(三)

開 し × わかれ かへる

\* (三) は「色なく」で「も」が脱字。目移りか。

(静)

わかれ 峯 哉

(内)

わかれ 峯 哉

(神1)

わかれ かへる 哉

(統)

わかれ かへる 哉

(統書)

わかれ かへる 哉

(統内)

わかれ かへる 哉

(神2)

わかれ かへる 哉

右 遠郷月(彰)

(国) 月にうき袖の時 雨もまじるらん村 雲 わくる遠の郷人

\* (国) は、他本「過る」とするのに、「わくる」と作る。最終形態か。

(大)

む 過る さと

(ノ)

む 過る さと

(彰) 桃の とうた

(明) さく桃のなかれにうかふ哥 かたも花に色 こき今日のさか月

(伊) 咲 の 今日 月

(島) さく の 今日 月

(祐) さく の いろ 今日 月

(書) さく の いろ 今日 月

(三) しくれ 分る

\* (三) || (静) 初期 || (国) しくれ 分る

(静) しくれ 分る

\* (静) は「分る」の「分」にミセケチ「過る」。上記と同じ先祖返り。

(内) むら 過る

(神1) むら 過る

(続) むら 過る

(続書) むら 過る

(続内) むらくも 過る

(神2) むら 過る

百七番左 三月三日 (内)

(国) 開 桃もなかれにうかふ哥 かたも花に色 こきけふのさかつき

\* (国) 「桃も」とするが、誤写か。意味的には「桃の」の方がよいと思われるものの、「桃も」「歌かたも」という並列ととれないこともない。共に「けふのさかつき」というのであろう。よって、誤写か、最終形態かは、現時点では決められない。

(大) さく の

\* ■ 判読不明おそらく「な」。

(ノ) さく うた 今日

(彰) 桃の とうた

(明) さく桃のなかれにうかふ哥 かたも花に色 こき今日のさか月

(伊) 咲 の 今日 月

(島) さく の 今日 月

(祐) さく の いろ 今日 月

(書) さく の いろ 今日 月

(三) しくれ 分る

\* (三) || (静) 初期 || (国) しくれ 分る

(静) しくれ 分る

(内) さく の うた

(神1) さく の うた

(続) 咲×桃の うた

(続書) 咲×桃の うた

(続内) 咲×桃の うた

(神2) 咲×桃の うた

右 江上月 (内)

(国) 難 波かた明 る浪ちに月をちて入江の里 に鶏 の声

\* (国) は、他本、「あくるか浪」とするのに、「明る浪知」と作る。最終形態か。

(大) か浪 落て さと

(ノ) か浪 落て さと 庭鳥 こゑ

(彰) あくるか浪 落て さと 庭鳥 こゑ

(明) 難 波かたあくるか浪に月落て入江のさとに庭鳥のこゑ

(伊) あく か波 落 さと 庭鳥

\* (伊) の「さと」は「そと」とも読める

(島) あく か浪 お さと 庭鳥 こゑ

(祐) あく か浪 お さと 庭鳥 こゑ

(書) あく 落て 庭鳥 こゑ

\* (書) は「浪ち」の「ち」に傍線「に」と傍書。古い本文をどこかで見ていたか、不明。

(三) あくる波路 落て さと こゑ

\* (国) 〓 (静) 〓 (三)。

(静) あくる浪路 お さと こゑ

\* (静) は「あくる」と「浪」の間に「〇」をして「か」と傍書。「路」にミセケチ。先祖返りだが、これらは後で行われた作業だろう。

(内) なには あく か浪路月お 庭鳥 こゑ

\* (内) は「あくるか浪路」という特異な本文、(国)「明る浪ちに」、(明)系「あくるが浪に」。独自本文。

(神1) か浪ち月落て さと 庭鳥 こゑ

\* (神1) は(内)と同文。「明るか浪ち」、但し、(統)・(神2)も同文。

(統) か波路月お さと 庭鳥

\* (統) は(内)と同じ本文。同一系統。(神1) 〓 (内) 〓 (統) 〓 (神2) という系統。

(統書) か波路月お さと 庭鳥

(続内) か波路月お 庭鳥

(神2) か波路月お さと 庭鳥

百八番左 春月 (伊) (神1)

(国) 春月

\* (国) 「春月」

(彰) 夜花

(大) 夜花

(ノ) 夜花

(明) 夜花

(鳥) 夜花

(祐) 夜花

(書) 夜花

(三) 春月

(静) 春月

(内) 夜花

(神1) 夜花

(統) 夜花

(続書) 夜花

(続内) 夜花

(神2) 夜花

\* (静) は「春月」にミセケチ「夜花」。(大)系に戻ったか。先祖返り。(三) 〓 (国) 〓 (静)。

\* (国) は百四番左「春月」とどこかで勘違いして呼び寄せたか。歌は他本と同じ。但し、春月という題でもなんとか可能な歌ではある。よって、最終形態の可能性もある。敢えて、「春月」で確定させたか。

(国) 空にみぬ朧 月夜に向 ふ哉 花を光 のやみのうつゝは

(大) 空にみぬ朧 月夜に向 ふ哉 花を光 のやみのうつゝは

(ノ) 見 おほろ むか かな ひかり

(彰) 見 おほろ むか かな ひかり

(明) 空にみぬ朧 月夜にむかふかな花を光 のやみのうつゝは

(伊) むか かな ひかり

(三) (三)オ

(島) むか かな ひかり

(祐) むか かなはな ひかり

(書) おほろ むか

(三) そら よ かな

\* (三) は「光も」の「も」にミセケチ「の」と傍書。

(静) 〃

(内) おほろ むか

(神1) おほろ むか ひかり

(統) おほろ むか ひかり 宿の

(統書) おほろ むか ひかり 宿の

(続内) おほろ むか ひかり 宿の

(神2) おほろ むか ひかり 宿の

\* (神2) は(統) 他本「やみ」を「やど」とつくる。(統書) と同文。(続書) の段階で、「やみ」を「宿」と読み誤ったか。

右 野虫 (大) (彰)

(国) 露分 し昔 はとをく跡 ふりぬ誰 のゝ宮に松 虫 のこゑ

\* (国) の末句は、(大)・(明) 系は「なく」とするの、「こゑ」と作る。(内) とも一致しており、最終形態だろう。

(大) 遠く たれ

(ノ) 遠く てたれ野の

\* (ノ) は「跡ふりて」と作る。書き損じか。他本は「跡ふりぬ」(大) 他。

(彰) むかし たれ

\* (彰) 〃 (大)。

(明) 露わけし昔 は遠く跡 ふりぬたれ野ゝ宮に松 虫 のなく

(伊) わけ 遠 たれ野

(島) わけ むかし 遠 たれ野

(祐) わけ むかし 遠 あと たれ野 まつむし

(書) わけ むかし 遠 野

(三) むかし 野

\* (国) 〃 (静) 〃 (三) 〃 (神1) 〃 (内)。

(静) 〃

\* (静) は「こゑ」にミセケチ「なく」と傍書。先祖返りか。このあたりの判断は微妙か。

(内) わけ 遠く たれ野の宮 声

\* (内) 〃 (国) 〃 (三) 〃 (神1)、(内) が(三) で復活したとみるのがよい

のではないか。

(神1) わけ 遠 野 むし 〃

\* (神1) は(内) と同文。

(統) むかし 遠く たれ野の宮 むし なく

(統書) むかし 遠く たれ野の宮 むし なく

(続内) むかし 遠く たれ野の宮 むし なく

(神2) むかし 遠く たれ野の宮 むし なく

百九番左 磯花 (島) (祐)

(国) よしやふけ磯 山さくら巖 にも花 開 浪の春の浦 風

(大) 吹いそ 岩ほ

(ノ) 岩ほ

(彰) 岩ほ

(明) よしやふけいそ山桜 岩ほにも花 さく浪の春のうら風

(伊) いそ 岩ほ

(島) いそ 岩ほ

(神1) たつた河 かつら かつら くも

(内) たつた河 かつら かつら

(静) たつた河 かつら かつら

(三) たつた河 かつら かつら

(書) たつた河 かつら かつら

(祐) たつた河 かつら かつら

(島) たつた河 かつら かつら

(伊) たつた河 かつら かつら

(明) 立 田川月のかつらそ中たゆる浪しく影に雲もなかれて

(彰) かつら かつら

\* (ノ) は「かつらは」と作る。「そ(楚)」を「は(盤)」と読み間違ったか。

(ノ) は

(大) かつら

(国) 立 田川月の桂 そ中たゆる浪しく影に雲もなかれて

(右河月)

(神2) いはほ いはほ さく波 うら

(続内) いはほ いはほ さく波 うら

(続書) いはほ いはほ さく波 うら

(統) いはほ いはほ さく波 うら

(神1) 吹 桜 いはほ さく波 かせ

(内) 桜 いはほ さく波 かせ

(静) 桜 いはほ さく波 かせ

(三) 桜 いはほ さく波 かせ

(書) 桜 いはほ さく波 かせ

(祐) 桜 いはほ さく波 かせ

(島) 桜 いはほ さく波 かせ

(伊) 桜 いはほ さく波 かせ

(明) 桜 いはほ さく波 かせ

(彰) 桜 いはほ さく波 かせ

(ノ) 桜 いはほ さく波 かせ

(大) 桜 いはほ さく波 かせ

(国) 桜 いはほ さく波 かせ

(神2) 諸 言葉 まつ 浪

(続内) 諸 言葉 まつ 浪

(続書) 諸 言葉 まつ 浪

(統) 諸 言葉 まつ 浪

\* (神1) は(内)と同文。

(神1) 諸 こと葉 き

\* (内) は「色ふかき」とする。誤写か。それとも、「藤波」に掛けたか。

(内) 諸 こと葉 き

(伊) 諸 こと葉 いろ

(島) 諸 こと葉 はな いろ

(祐) 諸 こと葉 いろ

(書) 諸 こと葉 いろ

(三) 諸 こと葉 いろ

(静) 諸 こと葉 いろ

(明) 諸 人のこと葉の花を松の戸に先色ふかし春の藤なみ

(彰) 諸 人は まつ

(ノ) 諸 ことは まつ

(大) 諸 ことは まつのと

(国) 諸 人の詞の花を松の戸に先色ふかし春の藤なみ

(百十番左 戸外藤)

(続) 龍 田河 波 かけ

(続書) 龍 田河 波 かけ

(続内) 龍 田河 波 かけ

(神2) 龍 田河 波 かけ

右 暮秋雲（伊）（静）（神1）（ノ）（彰）  
 （国） ゆく秋をしたふとみれば夕 まくれかへる所 もしらぬ雲哉  
 （大） 行 暮 帰る  
 （ノ） 行 見 暮 帰る  
 （彰） 行 見 暮 帰る  
 （明） 行 秋をしたふとみれば夕 ま暮 帰る所 もしらぬ雲哉（二三ウ）  
 （伊） 行 暮 帰る  
 （島） 行 「 ところ かな  
 （祐） 行 ゆふまくれ」 ところ かな  
 （書） 行 かな  
 （三） 行 かな  
 （静） 行 かな  
 （内） 行 暮 帰る かな  
 （神1） 行 見 暮 か ところ かな  
 （統） 行 見 暮 か ところ かな  
 （統書） 行 見 暮 か ところ かな  
 （統内） 行 見 暮 か ところ かな  
 （神2） 行 見 暮 か ところ かな  
 百十一番左 立春  
 （国） もろ人の待 えてあふく日 本の国のあるしとなれる春 哉  
 （大） 諸 諸 まち  
 （ノ） 諸 諸 まち  
 （彰） 諸 諸 まち  
 （明） 諸 人のまちえてあふく日 本の国のあるしとなれる春 哉  
 （伊） 諸 諸 まち

（島） まち かな  
 （祐） まち はるかな  
 （書） 諸 「  
 （三） 「  
 （静） かな  
 （内） まち 日本  
 （神1） まち 日本  
 （統） 諸 日本  
 （統書） 諸 日本  
 （統内） 諸 日本  
 （神2） 諸 日本  
 かな  
 かな  
 かな  
 かな

右 野萩（大）

（国） たをやめの秋のやとりと萩 の露錦 に玉をみかく宿 哉  
 \*（国） は「宿哉」とするが、その前に「秋のやとり」とあり、意味的にもおかしい。どうしてこうなったか。最終形態ではないと思いたいが、（静）が「宿かな」であり、最終形態の可能性はある。（三）の脱文が惜しい。  
 （大） の×  
 \*（大） は「の哉」とある。「へ」の脱字だろう。  
 （ノ）  
 \*（ノ） は末尾「霞哉」の「霞」に「野へ歎」と傍書。書き損じを後から校訂したか。  
 （彰） にしき  
 \*（彰） は他本「野辺」「宿」に当たるところが別の漢字。現時点では判読できていない。  
 （明） たをやめの秋のやとりと萩 の露錦 に玉をみかく野へ哉

\* (明) は「みかく露」の「露」にミセケチ「のへ」

(伊) 野へ

(島) 野へかな

(祐) はき 野へかな

(書) にしき 野へ

(三) はここから百十七番左まで脱文・落丁。 宿 かな

(静) \* (静) は(国)と一致する。ミセケチもない。

(内) 野へ

(神1) のへ

(続) 野へかな

(続書) 野へかな

(神2) 野へかな

百十二番左 雪中鶯(国)

(国) 雪のうちになくや鶯 夏もこは又 卯花に山 ほとゝぎす

(大) 鳴や 郭公

(ノ) 内 鳴や やま

(彰) 鳴や

(明) 雪の内 になくや鶯 夏もこは又 卯花に山 ほとゝぎす

(伊) 内 また

(島) また

(祐) うくひす また やま

(書) (三) 脱文・落丁

(静) 中 鳴や

(内) 中 鳴や やま郭公

(神1) 中 鳴や やま

(続) 中 鳴や またうの

(続書) 中 鳴や またうの

(神2) 中 鳴や またうの

右 月前秋風(彰) 富士のねやすみのほる月に秋の風 しばしは雪に木からの声

(国) 富士のねやすみのほる月に秋の風 しばしは雪に木からの声

(大) ふし 枯 の

(ノ) 根 枯 の

(彰) ふし 枯 の

(明) 富士のねやすみのほる月に秋の風 しばしは雪に木枯 のこゑ

(伊) 枯 の

(島) ふし 枯 のこゑ

(祐) ふし 枯 のこゑ

(書) (三) 脱文・落丁 枯 のこゑ

(静) ふし 枯 の

(内) かせ 枯 の

(神1) かせ 枯 のこゑ

(続) ふし 枯 の

(続書) ふし 枯 の

(神2) ふし 枯 の

ことを示す。

百十三番左 林花」(伊)(神1)

(国) みし雪はきゝの林 の春のかせうつむを花になす句 かな

\*私家集大成は「きえ」とするが、「きゝ」でよいだろう。(大)(明)系は「きゝ」。

(大) □ゝ 風 句 ひ哉

\*□は虫損ないしはなんらかの破損で判読不能、おそらく「き」。

(ノ) 木ゝ 埋 を と にほひ

(彰) 見 句 ひ

(明) みし雪はきゝの林 の春の風 埋 を花になすにほひ哉」(二三オ)

(伊) 風 埋 にほひ哉

(島) はやし 風 埋 にほひ

(祐) はやし 風 埋 はな にほひ

(書) 風 にほひ

(三) 脱文・落丁 風 哉

(静) 見 消 の 句 ひ

(内) 見 消 の 句 ひ

\* (神1)・(内) は他本「きえ」を「消」と作る。「きえ」と読むのだろう。

(神1) 見 消 の にほひ

(統) 木々 風 句 ひ哉

(統書) 見 木々 風ことほり 句 ひ哉

\* (統) の底本は(統書)。

(統内) 木々 風ことほり 句 ひ哉

(神2) 見 木々 風ことほり 句 ひ哉

\* (神2) が「風ことほり」となった理由は不明。考えられるのは、「埋」を「理」と読んだことか。つまり、(統書)と(神2)の底本は「理」となっていた

右 竹間月

(国) 雲の上と誰かみさらむ影 なひく竹のそのふに月の宮 人

(大) うへ たれ んかけ 菌 生

\* (大) の「かけ」は推定。別字を一旦書こうとしてミセケチして仮名で書いた

と思われる。

(ノ) かけ 菌 生

(彰) たれ 見 園 生

(明) 雲の上とたれかみさらむかけなひく竹の菌 生に月の宮 人

(伊) たれ かけ 菌 生

(島) たれ かけ 菌 生

(祐) たれ 見 かけ 菌 生

(書) たれ 見 かけ 菌 生

(三) 脱文・落丁

(静) 見 見 かけ 菌 生

(内) 見 見 かけ 菌 生

(神1) うへ たれ 見 菌 生

(統) たれ 見 菌 生

(統書) たれ 見 菌 生

(統内) たれ 見 菌 生

(神2) たれ 見 菌 生

百十四番左 鞆中見花」(島)(祐)

(国) 暮 すとも宿 かせあまの家桜 花の浪まにみるめかり空

\*私家集大成は「かる空」と読んでいるが、「かり空」であろう。「空」はおそら

く「てん」と読んでいたのではないか。すると、(明)系と同じ「かりてん」となる。

(大) くれ やと てん

(ノ) くれ やと てん

(彰) くれ やと 見 かりてん

(明) くれすともやとかせあまの家桜 花の浪まにみるめかりてん

(伊) くれ やと てん

(島) くれ やと てん

\* (島)「やとかせ」の「やと」と「せ」の間に「か」と傍書。

(祐) くれ やと 見 てん

(書) くれ やと 「

(三) 脱文・落丁

(静) 天

\* (静) は文末を「天」とする。これで「空」も「てん」と読んでいたことが分かる。

(内) くれ 共 海士 波 見 かりてん

(神1) くれ 海士 波 かりてん

(続) くれ さくら 波 かりてん

(続書) くれ さくら 波 かりてん

\* (続書) と (神2) は同表記(暮すとも)。

(続内) よ さくら 波 かりてん

\* (続内) は他本「宿かせ」とあるのに、「宿よせ」と作る。書き損じか。誤読か。

(神2) さくら 波 かりてん

右 古郷月「大」(彰)

(国) 難 波かたふるき都の蘆 のはに夢の跡 とふ月そのこれる

(大) なには あし 残れる

(ノ) 芦 葉

(彰) あし

(明) 難 波かたふるき都の蘆 の葉に夢の跡 とふ月そのこれる

(伊) 葉

(島) 葉

(書) なには 葉 あと

(三) 脱文・落丁

(静) なには 残れる

(内) 古き あし 残れる

(神1) 古き 葉 残れる

(続) 芦 葉

(続書) 芦 葉 残れる

(続内) 芦 葉

(神2) 芦 葉

百十五番左 若草「静」

(国) 草の原 とはぬ恨 の誰 なれば春に枯 葉の猶 ましるらん

\* (国) は、他本(内をのぞく)「たれとてか」とするの、「誰なれば」と作る。最終形態と見てよいだろう。

(大) とてか かれば む

(ノ) たれとてか

(彰) うらみ たれとてか

\* (彰) は「たれとてか」の「か」は意味不明の字にミセケチして傍書したもの。

(明) 草の原 とはぬ恨 のたれとてか春に枯 葉の猶 ましるらん

(伊) たれとてか

(島) はら うらみ たれとてか なを

(祐) はら うらみ たれとてか なを

(書) たれとてか

(三) 脱文・落丁

(静) \* (静) は「誰なれば」の「なれば」にミセケチ「とてか」を傍書。先祖返りか。

(内) \* (内) は(明)系が「とてか」とする箇所を「とても」とする。誤写か。

(神1) うらみ たれとてか かれは

(統) たれとてか かれ

(続書) たれとてか かれ

(続内) たれとてか かれ

(神2) たれとてか かれ

右 萩露「伊」(神1)

(国) 宮城のゝともしの跡 も鹿そなく涙 や萩のくれなゐの露

\* (国) は「跡も」とする。最終形態か。

(大) みや木 鳴 涙 紅

(ノ) 野の 鳴 なみた

(彰) 鳴 なみた

(明) みやぎのゝともしの跡 に鹿そなく涙 や萩の紅 の露「二三ウ」

(伊) みやぎ に なみた

(島) みやぎ に なみた

(祐) みやぎ 後に 「なみた

(書) みやき野 鳴 涙

(三) 脱文・落丁

(内) 野や に 紅

\* (内) は「宮城野や」と作る。独自の変改か。但し、「あとに」とするので、

(国) の最終改訂の前の本文の痕跡を残すか。その後、独自に変わっていったか。

(神1) 野や に 紅

\* (神1) は(内)と同じく「宮城野や」とする。

(統) 野や に

\* (統) と(内) は同じ本文。

(続書) や に

\* (続書) は「宮城野の」の「の」にミセケチ「や」と傍書。「跡そ」の「そ」

にミセケチ「に」と傍書。もともとは、(神2)と同文だが、他本によって校訂し、

最終本文は、「内」と同文。

(続内) 野や に

(神2) 野や そ

百十六番左 池柳「ノ」

(国) さほ姫 の向 ふ鏡 にみたれかみかゝるや柳庭の池 水

(大) ひめ かがみ

(ノ) 棹 むか

(彰) むか いけみつ

(明) 棹 姫 のむかふ鏡 にみたれかみかゝるや柳庭の池 みつ

(伊) 棹 むか

(島) 棹 むか

(祐) 棹 むか かゝみ



(国) うきこともよし程 老 身は思 捨る秋のゆふ暮  
 \*(国) は「程そ」と作るが、そうすると、「思ぞ」と「ぞ」が重なる。ここは  
 他本のように「ほと」とよい。

(大) 程 と すつ タ くれ

(ノ) 事 ほと、 思 ひ すつ タ くれ

(彰) 事 ほと、 すつ

(明) うき事 もよしいくほと、老 身は思 ひそすつる秋の夕暮

(伊) 事 ほと、 ひ すつ タ

(島) 事 ほと、 おもひ すつ タ くれ

(祐) 事 ほと、おい おもひ すつ タ くれ

(書) 事 ほと、 おもひ すつ タ くれ

(三) 事 われ幾 程 となくさめて思 ひそすつる秋の夕暮

\*(静) 〓 (三) 〓 (神1) 〓 (内) 〓 (統) 系。

(静) 事 われ なくさめて タ

\*(静) は「われ」にミセケチ「よし」と傍書、「なくさめて」にミセケチ「老

か身は」と傍書。先祖返りか。(内) が (三) で復活したものの、(国) で

(大)・(書)・(明) 系に戻ったと考えてよいか。

(内) 我 いく程 となくさめて思 ひそ朽 る秋の夕暮

\*(内) は「うきことも我いく程となくさめて思ひそ朽る秋の夕暮」となってお

り、初句と末句および「思ひそ」以外は別の歌である。独自本文。

(神1) 事 われいくほととなくさめておもひそすつる秋の夕 くれ

(統) 事 我 いくほととなくさめて思 ひそすつ タ

\*(統) は(内)と同一本文。

(統書) 事 我 いくほととなくさめておもひそすつ タ

(続内) 事 我 いくほととなくさめておもひそすつ タ

(神2) 事 我 いくほととなくさめておもひそすつ タ

\*(内) 〓 (神1) 〓 (統) 〓 (神2) 〓 (静) という独自本文。これらはどの  
 ように形成されたのか。

百十八番左 梅移水(伊)(神1)

(国) 開 梅 の匂 をおしの思 ひはおなし色しく庭 の池水

(大) さくむめ 匂 ひ 〓 × には

(ノ) さく にはひを

(彰) 咲 梅 匂 ひ 〓 × 羽 みつ

(明) さく梅 のにほひををしの思 ひはおなし色しく庭 の池水(二四オ)

(伊) 咲 にはひを

(島) さく にはひを

(祐) さく にはひを おもひ

(書) さく にはひを

(三) 匂 ひ 〓

(静) 匂 ひ 〓 羽

(内) さく をを

(神1) さく にはひをを

(統) 咲×梅 匂 ひ 鴛 のおもひ羽 同し

(統書) 咲×梅 匂 ひ 鴛 のおもひ羽 同し

(続内) 咲×梅 匂 ひ 鴛 のおもひ羽 同し

(神2) 咲×梅 匂 ひ 鴛 おもひ羽 同し

右 深山見月(彰)

(国) さひしさの限 を月に見山 風 それもしつまる嶺 のかり庵

(大) かきり み

(ノ) かきり 太 峯 〱

\* (ノ)の「太」とするのに、「は」に似ている。

(彰) かきり 太

(明) さひしさのかきりを月に太山 風 それもしつまる嶺 のかり庵

(伊) かきり 太

(島) かきり 太

(祐) かきり みやま みね

(書) 太

(三) かせ

(静) かせ

\* (静)は「それに」の「に」にミセケチ「も」(同筆)と傍書。

(内) 深 かせ

(神1) かきり 深

(統) 限り 太 な

\* (統)は「なれもしつまる」の「な」に「そい」と傍書。(内)による校訂。

(統書) 限り 太 な

\* (統書)は「なれも」の「な」に「そい」と傍書。

(続内) 限り 太 な

\* (続内)は「なれも」の「な」に「そい」と傍書。(続内)は(統書)をそのまま受けているか。

(神2) 限り 太 な

\* (神2)は(統)と同じく「なれも」。

(百十九番左 惜春不留)(島)(祐)

(国) かすむとも誰 かは春にかり衣 けふ斗 にくるゝ空 かな

(彰) たれ はかり

(大) はかり

(ノ) かきり よもき

(彰) かきり よもき

(明) かきりあればよもきかかみも霜ふかし老と成 てや 秋の行らん

(伊) かきり よもき

(島) かきり よもき

(祐) かきり よもき

(書) かきり よもき

(神2) はかり

(続内) はかり

(統書) はかり

(統) はかり

(神1) たれ 暮る

(内) はかり

(静) はかり

(三) たら

(書) たれ はかり

(祐) たれ はかり

(島) たれ ころも はかり

(伊) たれ ころも はかり

(明) かすむともたれかは春にかり衣 けふ斗 にくるゝ空 かな

(ノ) はかり

(大) 哉

右 暮秋霜(静)

(三) なりて

(静) む

(内) よもき 髪 しろし

\* (内) は「髪も霜しろし」と作る。独自の更改か。独自本文。

(神1) かきり よもき しろし

\* (神1) と(内) 共に「しろし」同文。

(統) かきり よもき 髪 なりて

\* (統) は「霜ふかし」に「しろし」と傍書。異本は(内)と一致。

(統書) かきり よもき 髪 なりて

(続内) かきり よもき 髪 なりて

(神2) かきり よもき 髪 なりて

百廿番左 暮春夕

\* (統書) 「夢」にミセケチ「夕」と傍書。連想による書き損じだろう。

(国) 暮 てゆく今 はの春 の夕 かな花はにほひを袖のかた見に

(大) 行 行 句 句 形 形 見

(ノ) 行 行 いま 形 形 見

(彰) 行 行 い ゆふへ哉 哉 花はにほひを袖の形 見

(明) くれて行 いまはの春 の夕 哉 哉 花はにほひを袖の形 見

(伊) くれ 行 いま 哉 哉 哉

(島) くれ いま はる 哉 哉 哉

(祐) くれ いま はる ゆふへ 哉 哉 哉

(書) くれ 行 いま 哉 哉 哉 形 形 見

(三) くれ 行 今 句 句 形 形 見

(静) 行 行 今 句 句 形 形 見

(内) 行 行 句 句 形 形

(神1) 行 行 いま 句 句 句 句 見

(統) くれ 行 いま 句 句 句 句 見

(統書) くれ 行 いま 句 句 句 句 見

(続内) くれ 行 いま 句 句 句 句 見

(神2) くれ 行 いま 句 句 句 句 見

右 暮秋野「伊」(大)(神1)(彰)

(国) 嶺 の松 つるにかはらて行秋やかれ野を分る霜の浅 茅生

(大) 峯 峯 の 野 の あさちふ

(ノ) 峯 峯 の 野 の あさちふ

(彰) みね 嶺 の松 つるにかはらて行秋や枯野をわくる霜のあさちふ「二四ウ」

(明) 嶺 の松 つるにかはらて行秋や枯野をわくる霜のあさちふ「二四ウ」

(伊) 枯 野 の あさちふ

(島) 枯 野 の あさちふ

(祐) 枯 野 の あさちふ

(書) 枯 野 の あさちふ

(三) 枯 野 の あさちふ

(静) 枯 野 の あさちふ

(内) 枯 野 の あさちふ

(神1) みね まつ 枯 野 の あさちふ

(統) 枯 野 の あさちふ

(統書) 枯 野 の あさちふ

(続内) 枯 野 の あさちふ

(神2) 枯 野 の あさちふ

(国) 空白なし 新しい丁に移る。  
 (大) 一行分空白。  
 (ノ) 空白なし そのまま夏冬に移る。  
 (彰) 空白なし。  
 (明) 空白なし 新しい丁に移る。  
 (島) 空白なし。  
 (祐) 空白なし。  
 (書) 空白なし。そのまま夏冬に移る。  
 (三) 十行分空白。  
 (静) 一丁遊紙。  
 (内) 空白なし。  
 (統) 空白なし。  
 (統書) 空白なし。  
 (続内) 空白なし。

(静) 夏冬 (但し貼紙)  
 (内) 夏冬  
 (神1) なし  
 (統) 夏冬  
 (統書) なし  
 (続内) なし  
 (神2) なし

一番 左 首夏風 (夏冬)  
 (国) ××  
 (大) 夏冬  
 (ノ) 夏冬  
 (彰) 夏冬  
 (明) 夏冬  
 (伊) ××  
 (島) 夏冬  
 (祐) 夏冬  
 (書) 夏冬 左 首夏風

\* (書) は夏冬の右に「左」と書いて消した痕跡あり。(明) と同じ形とするのを途中で変えたか。  
 (三) ××  
 (静) ××  
 (内) 初秋朝  
 \* (内) は、すべて題を一行で記す。この場合は「首夏風 初秋朝」となる。  
 (神1) 夏冬



(彰) 山川や松も檜 原も雲 の浪 なみ みな埜 木の五月 雨のころ  
 (明) 檜 原  
 (伊) 檜 原  
 (島) 檜 原  
 (祐) 檜 原 くも なみ  
 (書) 河 檜 原  
 (三) 河 波  
 (静) 河  
 (内) 河 檜 原 なみ  
 (神1) 河 檜 原 さみたれ  
 (統) 河 檜 原 比  
 (統書) 河 檜 原 比  
 (続内) 河 檜 原 比  
 (神2) 河 檜 原 波 むもれ 比  
 (大) 右 松雪(神1)(彰) 此 比 は雪にひらけて高 砂 や桜 にもれし松の葉もなし  
 (国) 此 比 は雪にひらけて高 砂 や桜 にもれし松の葉もなし  
 (ノ) 比 さくら は  
 \* (ノ) は「葉なし」の「葉」と「な」の間に「も歟」と傍書。校訂によるか。  
 (彰) このころ  
 (明) 此 比 は雪にひらけて高 砂 や桜 にもれし松の葉もなし  
 (伊) ころ たかさこ  
 (島) ころ たかさこ  
 (祐) このころ たかさこ さくら  
 (書) ころ たかさこ さくら

(三) \* (三) は夏冬から(書)と丁合がずれてくる。  
 (静) このころ  
 (内) このころ  
 (神1) このころ  
 (統) このころ さくら  
 (統書) このころ さくら  
 (続内) このころ さくら は  
 \* (続内) は他本「さくらにもれし」の「も」を「は」に作る。書き損じか。  
 (神2) このころ さくら は  
 三番 左 六月祓  
 (内) 六月祓 歳暮月  
 (国) みそき川老の三 輪を又 そへてあさちすかぬく袖の夕なみ  
 (大) 河 わ 浪  
 (ノ) つわ  
 (彰) みそき川老の三 輪を又 そへてあさちすかぬく袖の夕浪 (二五オ)  
 (明) 河  
 (伊) 河 また 浪  
 (島) 河 また 浪  
 (祐) 河 また 浪  
 (書) 河 浪  
 (三) 河 り  
 \* (三) は「すりぬく」と作る。書き損じか。  
 (静) 河

副て

(内) 御祓 河 みつわ 波  
 (神1) 御祓 河 みつわ 波  
 (統) 御祓 河 みつわ 波  
 (統書) 御祓 河 みつわ 波  
 \* (統書) は「ぬかつく」の「ぬ」にミセケチ「す」と傍書。他本を見てこうしたのだろう。

(統内) 御祓 河 みつわ ぬかつく 波  
 (神2) 御祓 河 みつわ ぬかつく 波  
 \* (神2) が(統) 他本「すかぬく」を「ぬかつく」としたのは、(統書) を見る限り、独自本文であったと思われる。

右 歳暮月」(三)

(国) \* (国) 「歳暮月」が最終形態か。  
 (大) ×  
 (ノ) ×  
 (彰) ×  
 (明) 歳暮×  
 (伊) ×  
 (島) ×  
 (祐) ×  
 (書) ×  
 (三) 歳暮月  
 (静) 歳暮月  
 (内) 歳暮月  
 \* (国) 〓 (静) 〓 (三) 〓 (神1) 〓 (内)。

(神1) 歳暮月  
 (統) 歳暮×  
 (統書) 歳暮×  
 (統内) 歳暮×  
 (神2) 歳暮×

(国) なくさめぬ身のならばしに年くれぬかくてやつるにさらしなの月  
 \* (国) は、(大)・(明)・(内) 系は「なくさめぬ」とするのに、「なくさめぬ」と作る。最終形態か。

(大) ま 暮 ぬ

(ノ) ま 暮 ぬ

(彰) ま 暮 ぬ

(明) なくさめぬ身のならばしに年暮 ぬかくてやつるにさらしなの月

(伊) ま 暮 終に

(島) ま 暮

(祐) ま 暮

(書) ま 暮

(三) 終に

\* (国) 〓 (静) 初期 〓 (三) 「なくさめぬ」。

(静) \* (静) は「なくさめぬ」の「め」にミセケチ「ま」と傍書。

(内) ま 更科

(神1) ま 更科

(統) ま 更科

(統書) ま 更科

(統内) ま 更科

(神2) ま 更科

四番 左 貴賤更衣(島)(祐) 夏 はけふきそのあさ衣 あさの袖人の心 もかはるをそみる

(国) 夏 はけふきそのあさ衣 あさの袖人の心 もかはるをそみる

(大) きぬ麻

(ノ) きぬ麻

(彰) 麻

(明) 夏 はけふきそのあさきぬ麻 の袖人の心 もかはるをそみる

(伊) きぬ麻

(島) きぬ麻

(祐) きぬ麻

(書) 麻

(三) こゝろ

(静) こゝろ

(内) なつ 木曾 見

(神1) きぬ

(統) 麻

(統書) 麻

(統内) 麻

(神2) 麻

右 時雨知冬(彰)

(国) 冬きぬと誰 も都にしら鳥 のとは山こえてふる時 雨哉

(大) たれ

(ノ) たれ

(彰) たれ 白 越 て 降 しくれかな

(明) 冬きぬとたれも都にしら鳥 のとは山こえて降 時 雨哉

(伊) たれ

(島) たれ

(祐) たれ

(書) たれ

(三) 降

(静) 降

(内) たれ

(神1) たれ

(統) 降

(統書) 降

(統内) 降

(神2) 降

五番 左 新樹雨(国)(静)(神1)

(国) あるよりも山は青 根か嶺 の雲村 雨はれて色 そ涼 しき

\*私家集大成は他本「雲」とする字を「雪」と読んでいるが、おそらく「雲」だ

ろう。

(大) ひ

(ノ) 藍

(彰) 藍

(明) 藍 よりも山は青 根か嶺 の雲村 雨はれて色 そ涼 しき

(伊) 藍

(島) 藍

(祐) 藍

(書) 藍

(三) 藍  
 (静) 藍  
 (内) 藍 ね 峯  
 (神1) 藍 すし  
 (統) 藍 むら  
 (統書) 藍 むら  
 (統内) 藍 むら  
 (神2) 藍 むら  
 (神2) 藍 むら

右 残鷹

(国) みよしのゝ田面の雪の花 に鷹向 ふを冬とふゝく山 かな  
 (大) 哉  
 (ノ) 吉野の むか  
 (彰) むか  
 (明) み吉野ゝ田面の雪の花 に鷹むかふを冬とふゝく山 哉 (二五ウ)  
 (伊) 吉野 むか  
 (島) 野 むか  
 (祐) 野 はな むか  
 (書) 吉野 むか やま  
 (三) 野 哉  
 (静) 哉  
 (内) や むか 浮吹 哉  
 \* (内) の初句は「みよしのや」と独自本文、「ふゝく」を「浮吹」と表記する  
 のも独自か。  
 (神1) 吉野や むか  
 \* (神1) は (内) と同じく「み吉野や」と作る。

(統) 吉野や はな むか 哉  
 \* (統) は (内) と同じく「み吉野や」とする。  
 (統書) 吉野 はな むか 哉  
 \* (統書) も (神2) と同様に「み吉野の」とする。  
 (統内) 吉野の むか 哉  
 (神2) 吉野 はな むか 哉  
 \* (神2) は (大) (明) (国) と同じく「み吉野の」とする。とすれば、(統) の誤読か、不明。

六番 左 曙郭公

(国) 郭 公花 鶯 のたかねより青葉の山 の明 ほのゝ空  
 \* (国) のみ末句を「明ほのの空」とする。他本は「明けほの声」。最終形態か。  
 (大) はな こゑ  
 (ノ) ほとゝきす 曙 のこゑ  
 (彰) 時 鳥 あけ のこゑ  
 (明) ほとゝきす花 鶯 のたかねより青葉の山 の曙 のこゑ  
 (伊) ほとゝきす 高根 曙 の声  
 (島) ほとゝきす うくひす やま あけほのこゑ  
 (祐) ほとゝきす うくひす やま あけほのこゑ  
 \* (祐) は (島) 「あけほのこゑ」の「ゝ」が脱字。  
 (書) うくひす 曙 曜 やま あけほのこゑ  
 (三) 時 鳥 うくひす やま あけほのこゑ  
 \* (国) 〓 (静) 〓 (三)。  
 (静) 空  
 \* (静) は「明ほのゝ空」の「空」にミセケチ「こゑ」(同筆か)。先祖返りか。  
 (内) うくひす 高ね こゑ

(神1) ほとゝきす  
 (統) 時 鳥  
 (統書) 時 鳥  
 (統内) 時 鳥  
 (神2) 時 鳥  
 右 水鳥(三)(彰)  
 (国) いくた川跡 なき浪に古 の別 ををしのひとりなくこゑ  
 (大) 田河あと いにしへ 鳴 声  
 (ノ) 田 いにしへ 鳴 声  
 (彰) 生 田 いにしへ 鳴 声  
 (明) いく田川跡 なき浪にいにしへの別 ををしのひとりなくこゑ  
 (伊) 田 いにしへ 鳴 声  
 (島) 田 いにしへ わかれ  
 (祐) 田 いにしへ わかれ  
 (書) 田 いにしへ 鳴 声  
 (三) 田河 いにしへ 鳴 声  
 (静) 河 いにしへ 鳴 声  
 (内) 生 田 あと 波 いにしへ 別 独 なく  
 (神1) 生 田 いにしへ 鳴 声  
 (統) 生 田 波 いにしへ わかれ 鴛 鳴 声  
 (統書) 生 田 波 いにしへ わかれ 鴛 鳴 声  
 (統内) 生 田 波 いにしへ わかれ 鴛 鳴 声  
 (神2) 生 田 波 いにしへ わかれ 鴛 鳴 声  
 七番 左 夏風(ノ)

(国) 夏山や時 雨てまじる松 の風 さてそ緑 を秋にそむらん  
 (大) かせ ひとり 染らん  
 (ノ) しくれ  
 (彰) しくれ ひとり  
 (明) 夏山やしくれてまじる松 の風 さてそ緑 を秋にそむらん  
 (伊) しくれ かせ ひとり 染らん  
 (島) しくれ まつ ひとり  
 (祐) しくれ ひとり  
 (書) しくれ かせ ひとり  
 (三) しくれ かせ ひとり  
 (静) しくれ かせ ひとり  
 (内) にかせ ひとり  
 \* (内) の初句は「夏山に」四句は「みとりも」という独自本文。  
 (神1) みとりも  
 \* (神1) は「みどりも」が(内)と同文。  
 (統) しくれ ひとり  
 (統書) しくれ ひとり  
 (統内) しくれ ひとり  
 (神2) しくれ ひとり  
 右 落葉(神1)  
 \* (彰) 「落」にミセケチ「落」と傍書。別筆。落に読みにくかったからだろう。  
 (国) きのかかも木のめはるさめふる時 雨ほとなき夢にちる嵐 哉  
 (大) 春雨 程  
 (ノ) 春雨 降時 雨 くら あらしかな

\* (ノ) は (大) 他と異なり「ほとなく」と作る。書き損じによるか。

(彰) 昨日 春雨 しくれ 　　あらし  
 (明) きのかかも木のめ春雨 　　ふる時 雨ほとなき夢にちる嵐 哉  
 (伊) 春雨 　　あらしかな  
 (島) 　　あらしかな  
 (祐) 　　あらしかな  
 (書) 昨日 雨 　　しくれ  
 (三) 春雨 　　あらしかな  
 (静) 　　あらしかな  
 (内) 昨日 春雨 程 　　あらし哉  
 (神1) 春雨 　　あらし哉  
 (統) こ 　　はる しくれ程  
 (続書) こ 　　はる しくれ  
 (続内) こ 　　はる しくれ程  
 (神2) こ 　　はる しくれ程  
 八番 左 野蜜  
 (国) うちけふり春やく野火の消やられて又 此比 もちる蜜 哉  
 \* (国) の四句は、「又此比も」のように「又」と作る。他本は「猶」。最終形態か。

(島) 焼 　　猶 このころもちるほたるかな  
 (祐) 焼 　　なをこのころもちるほたるかな  
 (書) 煙 　　なを  
 (三) 又 ころ  
 \* (国) 〓 (静) 〓 (三)  
 (静) 又 かな  
 \* (静) は「又」に作り、(国)と同じ。しかも、ミセケチなし。  
 (内) 猶 かな  
 (神1) 猶 かな  
 (統) 打け 焼野 猶 かな  
 (続書) 打け 焼野 猶 かな  
 (続内) 打け 焼野 ころ かな  
 (神2) 打け 焼野 猶 かな  
 右 千鳥 (彰)  
 (国) 川千 鳥いと逢 夜のたか中 を月に送 て声 わかるらん  
 (大) 河 　　あふ  
 (ノ) 河ちとり 　　あふ 誰か をくり  
 (彰) 河千 鳥いと逢 夜のたか中 を月にをくりて声 別 るらん  
 (明) 河 　　と 　　をくり  
 (伊) 河 　　と 　　をくり  
 (島) 河 　　と 　　をくり  
 (祐) ちとり 　　をくり 別  
 (書) 河 　　よ 　　をくり 別  
 (三) 河 　　よ 　　をくり 別  
 (静) 河 　　よ 　　をくり 別

(内) 河 もにあふ こゑ

\* (内) の二句目は、「いもにあふ夜の」となっている。独自本文。

(神1) 河 もにあふ をくり 別 ×ら

\* (神1) は「いもにあふ」が(内)と同文。「いもにあふ」系本文は後の改変。

(統) もにあふ なか をくり

(統書) もにあふ なか をくり

\* (統書) は、「いと」の「と」にミセケチ「もに」、「なかす」の「す」に

ミセケチ「を」、「川」にミセケチ「月」とそれぞれ傍書。「川」は書き損じだろ

うが、他は、(神2)と一致するので、(内)で校訂か。

(統内) もにあふ なか 分る

(神2) あふ なかす

\* (神2) は他本「なかを」を「なかす」と作る。誤読か。

九番 左 夏夕月(島)(祐)

(国) 風かるき蟬のは山 の夕 月夜それも木 間にうすき影 哉

(大) ゆふ の間 のま かな

(ノ) のま かな

(彰) の間 かな

(明) 風かるき蟬のは山 の夕 月夜それも木のまにうすき影 かな

(伊) のま

(島) ゆふ のま かけかな

(祐) やま ゆふ のま かけ

(書) ま かな

(三) かな

\* (三) は「うはき」の「は」にミセケチ「す」と傍書。字形が似ているから、書き損じか。

(静) 羽 附 このま 薄きかけ

(内) 羽 附 このま 薄き

(神1) 羽 た このま

(統) た このま

\* (統) は他本「それも」を「たれも」に作る。

(統書) た このま

(統内) た このま

(神2) た このま

\* (統書)・(神2)も「たれも」とする。独自本文。

右 雪散風(静)(三)

(国) くもりえぬ嵐 は雪 をまきもくの檜原 に遠き入 会 の声

(大) 曇り 卷 向 相

(ノ) 曇り 卷 向 相 こゑ

(彰) くもりえぬ嵐 は雪 を巻 向 の檜原 に遠き入 相 の声

(明) くもりえぬ嵐 は雪 を巻 向 の檜原 に遠き入 相 の声

(伊) 曇り 卷 向 相

(島) あらしはゆきを巻 向 あひ

(祐) あらしはゆきを巻 向 相 こゑ

(書) あらしは 卷 向 相 こゑ

(三) あらしは 卷 向 相 こゑ

(内) あらしは 卷 向 相 こゑ

(神1) 曇り 卷 向 相 こゑ

(統) 曇り 卷 向 相 こゑ

(統書) 曇り 卷 向 相 こゑ

(続内) 曇り 巻向 ひはら いらあひ

(神2) 曇り 巻向 ひはら いらあひ

十番 左 夕顔(神1)

(国) 誰 かみるおらて其 まゝ夕かほの花を扇 にいたす月かけ

\* (国) の末句は「いたす月かけ」となっている。他本は(内)以外「月かな」。

最終形態か。

(大) その 出す 哉

(ノ) その かな

(彰) たれ を その 顔 かな

(明) たれかみるおらてそのまゝ夕かほの花を扇 にいたす月かな

(伊) たれ かな

(島) たれ その あふきにいたす 哉

(祐) たれ 見 その あふきにいたす かな

(書) たれ その いたす夜の月

\* (書) は「いたす月哉」の「哉」にミセケチ「す」と「月」の間に「夜の」を

傍書。(内)と同一表記。ここで(内)系本文に戻ろうとしたか。但し、墨薄く、

別筆の可能性もある。

(三)

\* (国) || (静) || (三)。

(静) 影

\* (静) は「月影」が(国)と同じ。しかも、ミセケチがない。こちらの方が字

の当て方からも同一系統というよりも、(国)を写したような書写ぶりである。

(内) 見 その 出す夜の月

\* (内) の末句は「出す夜の月」と独自本文。

(神1) 出す夜の月

\* (神1) は(内)と末句が同文。「夜の月」系本文は後の変改。

(続) その 顔 あふき 出す月哉

\* (続) は「出す月哉」の「夜の月イ」と傍書。「夜の月」は(内)によるもの。

(続) は(内)で校訂。

(続書) 見 その あふき 出す月哉

(続内) 見 その あふき 出す月哉

(神2) 見 その あふき 出す月哉

\* (続)・(続書)・(神2) は(大)・(明)系と同文。

右 寒草僅(彰)

(国) 夏やいつは山としけるのへの草 枯 てふもとのちりと成 ぬる

(大) 葉 野辺 禁

(ノ) 葉 野辺 麓

(彰) は 野 麓

\* (彰) は他本「夏や」を「夏は」と作る。書き損じか。

(明) 夏やいつ葉山としける野への草 枯 て麓 のちりと成 ぬる

(伊) 葉 野 麓

(島) 葉 野 「かれて麓 なり

(祐) 葉 野辺 「かれて なり

(書) 葉 野 麓

(三)

(静) 葉 野 麓

(内) 葉 野 麓

\* (内) の末句にある「肖」は「屑」と書こうとしていたのではないか。それを「ちり」と読んだかは不明。おそらく読んだと思われる。というのは、「ちりとな

り」という用例はあるが、「の屑となり」という表記の用例がないからである  
(新編国歌大観)。

(神1) 葉 野

(統) 野辺 かれて麓 塵 なり

(統書) 茂る野辺 かれて麓 塵 なり

\* (統) は「鹿」にミセケチ「塵」と傍書。書き損じ故だろう。

(統内) 茂る野辺 かれて麓 塵 なり

(神2) 茂る野辺 かれて麓 塵 なり

十一番左 瞿麦

(国) をく露もあはれやかくる夕顔 の花よりつたふなてしこの花

\* (国) のみ、「なてしこの花」とする。いつこうしたか。なお、(国)の夕顔の

「顔」は一見「影」にも見える。故に、私家集大成は「影」としたか。また、

(国) は末句を他本「宿のなてしこ」とするの、「なてしこの花」と作る。最終

形態か。

(大) かほ 宿 のなてしこ

(ノ) かほ 宿 のなてしこ

(彰) をく露もあはれやかくる夕顔 の花よりつたふ宿 のなてしこ

(明) をく露もあはれやかくる夕顔 の花よりつたふ宿 のなてしこ

(伊) 宿 のなてしこ

(島) 宿 のなてしこ

(祐) やとのなてしこ

(書) 宿 のなてしこ

(三) お

\* (国) || (静) 初期 || (三)。  
(静) かほ 瞿 麦 の花

\* (静) は「つたふ瞿麦の花」の「の花」にミセケチ、「つたふ」と「瞿麦」の  
間に○をいれて「やとの」と傍書。先祖帰りか。

(内) 宿 のなてしこ

\* (内) は(大)・(明)系と同文。 かほ やとのなてしこ

(神1) 置露哀 や 宿 のなてしこ

(統) 置露哀 や 宿 のなてしこ

(統書) 置露哀 や 宿 のなてしこ

\* (統書) は「かえる」の「え」にミセケチ「く」と傍書。書き損じ故だろう。

(統内) 置露哀 や 宿 のなてしこ

(神2) 置露哀 や 宿 のなてしこ

\* (統) 系はいずれも(大)・(明)系と同文。

右 寒草

(国) 浅 茅ゆく庭の遣 水音 絶 て聞 まてかるゝ夢のうき草

(大) あさち行 庭 やり たえ

(ノ) あさち 庭 やり たえ

(彰) あさち行 庭 やり をとたえ 枯る 草

\* (彰) は橋にミセケチ草と傍書。別筆。書き損じだろう。

(明) あさち行 庭のやり水音 たえて聞 まてかるゝ夢のうき草

(伊) 行 やり たえ 浮

(島) あさち行 やり たえ

(祐) あさち 庭 やり たえ ねや

(書) 行 庭 やり たえ

(三) あさち行 庭 たえ

\* (三) は「水普」の「普」にミセケチ「音」と傍書。  
(静) あさち行 庭 たえ

(内) あさち行 庭 やり たえ 浮草  
 (神1) 行 庭 やり たえ 枯る 浮草  
 (統) やり たえ ねや かゝる 浮草  
 \*(統) は他本「かゝる」を「かゝる」と作る。独自本文か  
 (統書) やり たえ ねや かゝる 浮草  
 (統内) ねや かゝる 浮草  
 (神2) ねや かゝる 浮草  
 \*(統) 系はいずれも「かゝる」。

十二番左 夏虫  
 (国) 竹のこの生 ゆくすゑはしらねとも先 あらはるゝ蟬 の声哉  
 (大) 子 行す  
 (ノ) 行末  
 (彰) 子 行す  
 (明) 竹の子の生 行末 はしらねとも先 あらはるゝ蟬 のこゑ哉  
 (伊) 子 行末  
 (島) 子 行す まつ (こゑかな)  
 (祐) 子 行す まつ (こゑかな)  
 (書) 行す まつ (こゑ)  
 (三) 行末 まつ (こゑかな)  
 (静) 行末 共 せみ こゑ  
 (内) 子 行末 共 せみ こゑ  
 (神1) 子 行末 共 せみ こゑ  
 (統) おひ まつ 顕 是る  
 (統書) 子 おひ まつ 顕 是る  
 (統内) 子 おひ行す まつ 顕 是る

(神2) 子 おひ まつ 顕 是る  
 右 疎屋雪」(神1)(ノ)(三)(彰)  
 (国) ふる雪に又 そかたふく開花 の夕顔 をもき賤 か庵 かな  
 \*(国) の末句は「賤か庵(いほ) かな」となっている。最終形態か。  
 (大) さく かほお  
 \*(大) の末句は「賤か庵(いほり) は」となっている。  
 (ノ) 降雪 さく お  
 (彰) 咲花 お いほりは  
 (明) ふる雪に又 そかたふくさく花 の夕顔 おもき賤 とか庵 は  
 \*(明) の「賤とか庵は」の「と」は書き損じか。  
 (伊) さく お とか は  
 (島) また さく かほお ちか は  
 \*(伊)・(島) が「と」や「ち」と読んでいるのは、(明)を直接見た証拠といえるか。本文的には、(大)でいいだろう。(大)の本文的な価値が新たな課題。  
 (祐) また さくはな ゆふかほお ちか は  
 \*(祐) は(島)のまま。  
 (書) 降雪 かほ は  
 (三) 行末 哉  
 \*(国) Ⅱ(静) 初期Ⅱ(三)Ⅱ(内)。  
 (静) かほ かな  
 \*(静) は、文末「かな」にミセケチ「は」と傍書。先祖帰りか。  
 (内) 咲 夕 かほ しつ 庵  
 \*(内) の末句は(国)と同じ。「しつか庵かな」。  
 (神1) さく かほお は  
 \*(神1) は(大)と同じか。もしくは初期形態を示しているか。



(彰) ころ

(明) 花もなき閨に桜の三重かさねいつしか風をならす比哉

(伊) 哉

(島) ねや ころ

(祐) ねや ころ

(書) 哉

(三) 哉

(静) 哉

(内) 哉

(神1) 哉

(続) 哉

(続書) 哉

\* (続書) は「みゑ」の「ゑ」にミセケチ「へ」。(神2) が「ゑ」だから、この本文があったか。(内) 系で校訂したか。

(続内) 哉

(神2) 哉

\* (神2) は「みゑ」と作る。

右 炭竈煙細 (彰)

(国) 里 人の道ふむ雪の一 すちに煙 もならふ嶺 のすみかま

\* (国) は「嶺」に「をの敷」と傍書。「をのはすみかま」という異文があった。

(三) は「小野」となっている。

(大) 路 峯

(ノ) 路 峯

(彰) 路 峯

(明) さと人の路ふむ雪の一 すちに煙 もならふ嶺 のすみかま

(伊) 路

(島) さと 路

(祐) さと 路

(書) さと 路

(三) 路

\* (三) は(国)の傍書を本文とした。つまり、「小野のすみかま」とある本文が(国・静)・(三)で知られていた。(国)の傍書は後筆か。

(静) 路

\* (静) は「嶺の」は一旦書いて消した後記し、「をのゝ」を傍書して傍線で消している。著名な「小野の炭竈」という言葉に引かれてつい書いたのか。不明である。

(内) 路

(神1) さと 路

(続) さと 路

(続書) さと 路

\* (続書) は「いと筋」の「い」にミセケチ「ひ」と傍書。書き損じ故だろう。

(続内) さと 路

(神2) さと 路

十五番左 朝更衣 (神1)

(国) 玉 手箱 あくれば夏のあさ衣去年のひとへを先 出 しぬる

(大) 玉 手箱 あくれば夏のあさ衣去年のひとへを先 出 しぬる

(ノ) 玉 手箱 あくれば夏のあさ衣去年のひとへを先 出 しぬる

(彰) 玉 手箱 あくれば夏のあさ衣去年のひとへを先 出 しぬる

(明) 玉 手箱 あくれば夏のあさ衣去年のひとへを先 出 しぬる

(伊) 玉 手箱 あくれば夏のあさ衣去年のひとへを先 出 しぬる

(島)	たま	はこ	一重	まついた
(祐)	たま	はこ	一重	まついた
(書)	無	無	一重	いたし
(三)	無	無	一重	無
(静)	無	無	一重	無
(内)	無	かたみ	時雨	む
(神1)	無	かたみ	時雨	む

右 朝時雨(二三)

(国)	神な月いつれの冬	の形	見とて朝	の雲の	しくれ行	らん
(大)	無	かたみ	あした	時雨	覧	覧
(ノ)	無	かたみ	あした	時雨	覧	覧
(彰)	無	かたみ	あした	時雨	覧	覧
(明)	神な月いつれの冬	の形	見とて朝	の雲の時	雨行	らん(二七ウ)
(伊)	無	かたみ	あした	時雨	覧	覧
(島)	無	かたみ	あした	時雨	覧	覧
(祐)	無	かたみ	あした	時雨	覧	覧
(書)	無	かたみ	あした	時雨	覧	覧
(三)	無	かたみ	あした	時雨	覧	覧
(静)	無	かたみ	あした	時雨	覧	覧
(内)	無	かたみ	あした	時雨	覧	覧
(神1)	無	かたみ	あした	時雨	覧	覧

(続)	無	かたみ	あした	時雨
(続書)	無	かたみ	あした	時雨
(続内)	無	かたみ	あした	時雨
(神2)	無	かたみ	あした	時雨

十六番左 新樹

(国)	誰	かきる雲の衣	を山あゐに紅	ましる木々のわくら葉
(大)	無	かたみ	あした	時雨
(ノ)	無	かたみ	あした	時雨
(彰)	無	かたみ	あした	時雨
(明)	たれ	かたみ	あした	時雨
(伊)	たれ	かたみ	あした	時雨
(島)	たれ	かたみ	あした	時雨
(祐)	たれ	かたみ	あした	時雨
(書)	たれ	かたみ	あした	時雨
(三)	たれ	かたみ	あした	時雨
(静)	たれ	かたみ	あした	時雨
(内)	たれ	かたみ	あした	時雨
(神1)	たれ	かたみ	あした	時雨

\* (静)は「山あゐし(あるいはえ)の「し(え)」にミセケチ「に」この場合、「に」は書き損じの訂正だろう。

\* (内)は「雲の衣の」(他本は「雲の衣を」)(内)は(神1)と同じく。末句を「若はは」と作る。独自本文。

(神1) 若はは

(続) 藍

(続書) 藍

\* (続書)は「たれ」の上に「わくら葉」と傍書。

(続内) たれ 藍 藍  
(神2) たれ 藍 は は

右 海辺松雪(彰)

(国) 海風 におれかへる雪の末 の松 冬はかさねてこゆる浪 かな  
\* (国) は他本「浦風」を「海風」とする。最終形態か。『松下集』に「海風」は三例あり。

(大) 浦 かせ すゑ 越る浪 哉  
(ノ) 浦 かせ なみ哉

(彰) 浦 風 におれかへる雪の末 の松 冬はかさねてこゆる浪 哉

(明) 浦 風 におれかへる雪の末 の松 冬はかさねてこゆる浪 哉

(伊) 浦 浦 すゑのまつ  
(島) 浦 浦 すゑのまつ

(祐) 浦 浦 なみ  
(書) 浦 浦 なみ

(三) 浦 かせ 波 哉  
(静) 浦 かせ 波 哉

(内) 浦 かせ 帰る すゑ 哉  
(神1) 浦 かせ 帰る すゑ 哉

(続書) 浦 浦 哉  
(続内) 浦 浦 なみ哉 哉

(神2) 浦 浦 哉  
十七番左 雲間郭公

(国) 村 雨 の雲 のふるまひかねてよりしるくも過る郭 公哉

(大) くも ほとくきすかな  
(ノ) くも ほとくきすかな  
(彰) くも ほとくきすかな

村 雨 の雲 のふるまひかねてよりしるくも過る郭 公かな

(明) 村 雨 の雲 のふるまひかねてよりしるくも過る郭 公かな  
(伊) 村 雨 の雲 のふるまひかねてよりしるくも過る郭 公かな  
(島) 村 雨 の雲 のふるまひかねてよりしるくも過る郭 公かな  
(祐) 村 雨 の雲 のふるまひかねてよりしるくも過る郭 公かな  
(書) 村 雨 の雲 のふるまひかねてよりしるくも過る郭 公かな  
(三) 村 雨 の雲 のふるまひかねてよりしるくも過る郭 公かな  
(静) 村 雨 の雲 のふるまひかねてよりしるくも過る郭 公かな  
(内) 村 雨 の雲 のふるまひかねてよりしるくも過る郭 公かな  
(神1) 村 雨 の雲 のふるまひかねてよりしるくも過る郭 公かな

(兼) より かな

(続) 村 雨 の雲 のふるまひかねてよりしるくも過る郭 公かな  
(続内) 村 雨 の雲 のふるまひかねてよりしるくも過る郭 公かな

(神2) 村 雨 の雲 のふるまひかねてよりしるくも過る郭 公かな

右 湊千鳥(神1)  
(続書) 題なし  
(神2) 題なし

(国) よる舟 の棹 とりなをす音深て湊 の月に千鳥 なく也  
(大) よる舟 の棹 とりなをす音深て湊 の月に千鳥 なく也

(ノ) よる舟 の棹 とりなをす音深て湊 の月に千鳥 なく也  
(彰) よる舟 の棹 とりなをす音深て湊 の月に千鳥 なく也

(明) よる舟 の棹 とりなをす音深て湊 の月に千鳥 なく也

(伊) よる舟 の棹 とりなをす音深て湊 の月に千鳥 なく也  
(島) よる舟 の棹 とりなをす音深て湊 の月に千鳥 なく也  
(祐) よる舟 の棹 とりなをす音深て湊 の月に千鳥 なく也  
(書) よる舟 の棹 とりなをす音深て湊 の月に千鳥 なく也  
(三) よる舟 の棹 とりなをす音深て湊 の月に千鳥 なく也  
(静) よる舟 の棹 とりなをす音深て湊 の月に千鳥 なく也  
(内) よる舟 の棹 とりなをす音深て湊 の月に千鳥 なく也  
(神1) よる舟 の棹 とりなをす音深て湊 の月に千鳥 なく也

(神2) よる舟 の棹 とりなをす音深て湊 の月に千鳥 なく也

(続書) よる舟 の棹 とりなをす音深て湊 の月に千鳥 なく也  
(続内) よる舟 の棹 とりなをす音深て湊 の月に千鳥 なく也

(神2) よる舟 の棹 とりなをす音深て湊 の月に千鳥 なく也

十七番左 雲間郭公

(伊) 鳴

(島) ふね 鳴

(祐) ふね さほ 鳴

(書) ふね さほ 鳴

(三) ふね さほ 鳴

(静) ふね さほ 鳴

(内) ふね さほ 鳴

(神1) ふね さほ 鳴

(統) ふね さほ 鳴

(統書) 霜の後松のためしを朝からすひとりあらはす雪の中哉

(続内) 霜の後松のためしを朝からすひとりあらはす雪の中哉

(神2) 霜の後松のためしを朝からすひとりあらはす雪の中哉

\*この歌は他本では、十八番の左に位置する。混乱がある。しかし、これを見て  
も、(統書)・(続内)と(神2)は頗る近い関係にある。

十八番左 照射」(ノ)

(統書) 題なし。

(続内) 題なし。

(神2) 題なし。

(国) くるしくももしの鹿のは山陰 なかぬも鳴 にまさはかつら

(大) かけ

(ノ) なく

(彰) なく

\* (彰) は「まされ」の「れ」にミセケチ「の」と傍書。同筆か。

(明) くるしくももしの鹿のは山陰 なかぬも鳴 にまさはかつら

(伊) 鳴

(島) かけ

(祐) かけ

(書) かけ

(三) かけ

(静) かけ

(内) かけ

(神1) かけ

(統) かけ

(続書) 苦し

(続内) なし。

(神2) なし。

右 冬鳥」(国) (静) (三) (彰)

(統書) 題なし

(続内) 題なし

(神2) 題なし

(国) 霜の後松 のためしを朝 鳥 ひとりあらはす雪のうちかな

(大) うち

(ノ) からす

(彰) からす

(伊) 霜の後松 のためしを朝 鳥 ひとりあらはす雪の内 かな



(内) かれ 残る かり

\* (内) は三句が「残るらん」と作る。独自本文。(神1)と(内)同文。

(神1) かれ る むまくす かり

(統) 残す たまつさ

(統書) 残す

(統内) 残す

(神2) 残す

廿番 左 夏月(神1)

(国) 契 あれやうすき衣もいとはしくもりて身にそふ月そやとれる

(大) 契

(ノ) 契

(彰) 契

(明) 契 あれやうすき衣もいとはしくもりて身にそふ月そやとれる

(伊) 契

(島) ちきり

(祐) ちきり

(書) 宿れ

(三) 宿れ

(静) 宿れ

\* (静) は、「うすき」の「す」に分かりやすく小字で「す」と傍書。「そ」と読  
み違えることを恐れたか。

(内) 残れる

\* (内) の末句は「月そ残れる」となっている。独自本文。(神1)と同文。

(神1) のこれる

(統) のこれる

\* (統) は、「月そやとれる」の「やと」に「のこイ」と傍書。これは(内)と  
一致する。

(統書) 契り

\* (統書) は「身を」の「を」にミセケチ「に」と傍書。「月そやとれる」に  
「のこイ」と傍書。(統)と同一表記。(内)と同文。(統書)は(神2)系本文を  
(内)で校訂。

(内) 契り

(統内) 契り

\* (統内) は「月そやとれる」に「のこイ」と傍書。つまり、(統書)をそのま  
ま反映したか。

(神2) 契り

\* (神2) は「身を」そして、(統書)にある異本表記なし。

右 冬月(彰)

(国) 冬きぬと月の桂 も村 雲にちる影 みえてふる時 雨哉

(大) かつら

(ノ) かつら

(彰) かつら かけ

(明) 冬きぬと月のかつらも村 雲にちる影 みえて降 時 雨哉(二八ウ)

(伊) かつら 降

(島) かつら かけ 降 かな

(祐) かつら かけ見 降 しくれかな

(書) かつら かけ見 降 時 雨かな

(三) かつら 見 降 しくれかな

(静) かつらのむら 散影 見 降 時 雨かな

(内) かつらのむら 散影 見 降 時 雨かな

\* (内) は二句め「月のかつらのむら雲に」と作る。他本は「月のかつらも村雲

に」となる。意味的に他本がよい。

(神1) かつら 降時雨

(統) 来 むら 散 かけ

(統書) 来 むら 散 かけ見

(続内) 来 むら 散 かけ見

(神2) 来 むら 散 かけ見

廿一番左 五月雨

(国) よしの川滝 津水かさにかちる淡や花に嵐 のさみたれの空

(大) 吉野 みる 五月雨

(ノ) 吉野 みる 五月雨

(彰) 吉野 みる 五月雨

(明) 吉野川滝 津みかさにかちる淡や花に嵐 の五月 雨の空

(伊) 吉野河 みる 五月雨

(島) 野 みる 五月雨

(祐) 野 みる 五月雨

(書) 野河 みる 五月雨

(三) 野河 みる 五月雨

(静) 野河 みる 五月雨

\* (静) は「五月の」として「月」と「の」の間に小字で「雨」と傍書。同筆。

(内) 吉野 たきつみ 五月雨

(神1) 吉野 みる 五月雨

(統) 芳野 たきつみ 五月雨

(続書) 芳野 たきつみ 五月雨

\* (続書) は「散」に「ちる」と傍書。(続書) は(内)系で校訂か。

(続内) 野 たきつみ 五月雨

(神2) 芳野 たきつみ 散泡 五月雨 そら

右 時雨過 (三)

(国) 年月の過るも夢の村 時雨 おとろく程 もなき時雨かな

\* (国) のみ末句が「なき時雨かな」となっている。「時雨」は三句に使っており、他本の「枕」の方がよいが、どうしてここでもう一度時雨を使ったのか、「時雨過」という題とどこかで関係しているか。単なる誤写か。その可能性が強い。(三) がしくじり、(国) はそのまま継承したか。詳細は不明。

(大) 年月の過るも夢の村 時雨 おろろくほともなきまくら哉

(ノ) 年月の過るも夢の村 時雨 おろろくほともなきまくら哉

(彰) 年月の過るも夢の村 時雨 おろろくほともなきまくら哉

(明) 年月の過るも夢の村 時雨 おろろくほともなきまくら哉

(伊) 年月の過るも夢の村 時雨 おろろくほともなきまくら哉

(島) 年月の過るも夢の村 時雨 おろろくほともなきまくら哉

(祐) 年月の過るも夢の村 時雨 おろろくほともなきまくら哉

(書) 年月の過るも夢の村 時雨 おろろくほともなきまくら哉

(三) 年月の過るも夢の村 時雨 おろろくほともなきまくら哉

\* (国) 〓 (三)。(三) は(国)の最終形態の直前と見ている。

(静) 年月の過るも夢の村 時雨 おろろくほともなきまくら哉

\* (静) も「枕哉」とする。

(内) 年月の過るも夢の村 時雨 おろろくほともなきまくら哉

(神1) 年月の過るも夢の村 時雨 おろろくほともなきまくら哉

(統) 年月の過るも夢の村 時雨 おろろくほともなきまくら哉

(続書) 年月の過るも夢の村 時雨 おろろくほともなきまくら哉

(続内) 年月の過るも夢の村 時雨 おろろくほともなきまくら哉

(神2) 年月の過るも夢の村 時雨 おろろくほともなきまくら哉

\* (統) 系は(大)・(明)・(内)と同じく「枕哉」。

廿二番左 氷室

(国) 雲のなみななれ出たる富士河の月や氷室の水 成らん

\* 三句「富士河や」の「や」に「の」と傍書。「の」でとってよいのではないか。これは影写の親本もそう表記されていたのではない。

(大) 浪 いて 富士川 なる覧

(ノ) 浪 いて 川 なる

(彰) 波 いて 川 なる覧

(明) 雲の浪 なかれていまする富士川の月や氷室の氷 なるらん

(伊) 浪 いて 川 なる

(島) 浪 いて 富士川 なる

(祐) 浪 いて 富士川 なる

(書) 浪 いて 川 なる

(三) なかれ行雲の浪まに 富士川の月やいたせる氷 室成 覧

\* (三) は(神2)と同一本文。とすれば、(国) は元に戻したということになる。

(静) 川 なる

\* (静) の本文は(大)系にしたか。元々は(三)系だったと思われるが。ここは不可解。ミセケチもないから。

(内) 川 いたせる氷 室なる

\* (内) の四句・五句「月やいたせる氷室なるらん」。独自本文。

(神1) 浪 いたせるひむろなる

\* (神1) は「富士川の」の「の」に「に」と傍書。但し、ミセケチなし。

(統) 富士川 いたせる氷 室

\* (統) は「月やいたせる氷室」で(内)と同文。

(統書) ふし いたせる氷 室

\* (統書) は「流れゆく雲の波まに」にミセケチ「雲のなかななれ出たる」と傍書。

(続内) 富士川 いたせる氷 室成 らん

(神2) 流れゆく雲の波まに ふし いたせる氷 室

\* (神2) は「流れゆく雲の波まに」が独自文、(統書) はその本文を(内)系によって変更。末句「いたせるひむろなるらん」は(神1)(内)(統)系に共通する。

右 薄氷(神1)(彰) 明行に氷 か庭のさゝれ水 やとれる月の影 もうこかす

(国) 明行に氷 か庭のさゝれ水 やとれる月の影 もうこかす

(大) ゆく 氷 なる

(ノ) あけ こおる

(彰) あけ こほる

(明) あけ行にこほるか庭のさゝれ水 やとれる月の影 もうこかす

(伊) あけ 氷 なる

(島) あけ こほる

(祐) あけ こほる

(書) あけ こほる

(三) ゆく 上の かけ

\* (三) は「氷か上の」という独自本文をもつ。意味連想からの誤記か。

(静) 氷 水

\* (静) は「氷水」で「さゝれ水」と訓ませているか。但し、「水」の読みは存疑。

(内) あけ 氷 なる

(神1) あけ こほる

(統) こほる

(統書) こほる

\* (統書) は「明行にこほれる」の「れる」にミセケチ「るか」と傍書。(内) 系で校訂。

(統内) こほる

(神2) こほれる

\* (神2) は「こほれる」という独自本文。

廿三番左 郭公稀 (内) (静)

(国) 郭 公三 か一 に声 そなるたかねのこともしらぬ枕 に

(大) ほとゝきす

(ノ) ほとゝきす

(彰) ほとゝきす

(明) ほとゝきす三 か一 にこゑそなるたかねのこともしらぬ枕 に

(二八オ)

(伊) ほとゝきす

(島) ほとゝきす

(祐) ほとゝきす

(書) ほとゝきす

(三) ほとゝきす

(静) ほとゝきす

(内) ほとゝきす

\* (内) は他本「たかねのこと」を「誰かねとことも」と作る。ある種の独自本文。書き損じか。

(神1) こゑ

(統) みつかひとつ

たかかねこと

\* (統) と(内) は微妙に異なる。本文の乱れか。「たかかねこと」は誤写か。

(統書) ほとゝきすみつかひとつ

(統内) ほとゝきすみつかひとつ

(神2) ほとゝきすみつかひとつ

右冬鳥 (内) (ノ)

(国) 道のへや垣 ほのうはらつたひきてし吹嵐 にしとゝ鳴なり

\* 私家集大成は「しとゝ鳴なり」と読むが、「なり」でよいか。(国) は「つたひきて」に後に「〇」をつけ「志(し)」と傍書。親本もそうなっていたか。

\* (国) には「霜さむき」の傍記はない。「霜さむき」と一旦揺らいだ後、元に戻ったか。最終段階だろう。

(大) 道のへのかき し吹 あらし

\* (大) はここでも「道のへ」の本文を採用。

(ノ) 道のへのかき しふき

\* (ノ) 〓 (大)。

(彰) かる しふく

\* (彰) は他本「垣・かき」となっているのを「かる」とする。書き損じか。

(明) 霜さむきかきほのうはらつたひきてし吹嵐 にしとゝ鳴也

\* (明) は「道のへや」に傍線、「霜さむき」と傍書。これは同筆か。

(伊) 霜さむき

野 かき

(島) 霜さむきかき

\* 「し吹あらし」なる表現は今のところ見いだしたい。「ふふく(ふぶく)」と書こうとしたか。松下集に一例あり。正広語彙か。

(祐) 霜さむきかき しふくあらし

(書) 霜さむき

ふく

也

\* (書) は「みちのへや」に傍線、「霜さむき」と傍書。但し、墨薄く、同筆か  
どうかは不明。とまれ、ここで(明)と同様に「霜さむき」本文を採用。

(三) しふくあらし

\* (国) 〓 (静) 〓 (三) (三) で「道のへや」に戻る。

(静) しふく

\* (静) は(国)と同じく、「霜さむき」の傍書なし。

(内) みちの の 也

\* (内) には「霜さむき」の傍書はない。他本「道のへや」を「みちのへの」と  
作る。

(神1) 路 のかき しふく

(続) 野辺のかき 伝 ひ しふく 也

\* (続) は(内)と同一本文。

(続書) 野辺やかき 伝 ひ しふく 也

\* (続書) は「野辺や」に「や」に「のイ」と傍書。(内)で校訂か。

(続内) 野辺のかき 伝 ひ しふく

(神2) 野辺やかき 伝 ひ しふく 也

廿四番左 樹陰蟬(島)(祐)

(国) 村 雨 のきほへる雲になく蟬 の声 さへきゆるは木々の陰

(大) むら 鳴×せみ 消る き かけ

(ノ) 鳴×せみ

(彰) 鳴×せみ 鳴×せみ 消る き かけ

(明) 村 雨 のきほへる雲になくせみのこゑさへきゆるは木々の陰

(伊) せみ せみ 消る き かけ

(島) むら せみ 消る き かけ

(祐) むら せみ 消る き かけ

\* (祐) は(島)の「きほへる」を「きをへる」と読む。「ほ」と「を」は字形  
が似る故か。

(書) 鳴×せみ 消る

(三) 鳴×せみ 消る かけ

(静) 鳴×せみ 消る かけ

(内) 鳴× 消る かけ

(神1) 鳴× 消る かけ

(続) 鳴× 消る かけ

(続書) 鳴× 消る かけ

(神2) 鳴× 消る かけ

右 時雨過(三)(彰)

(国) 誰 も世をやすの渡 の川 風 に時 雨なれてや雲も行 らん

(大) たれ かせ

(ノ) たれ 河

(彰) たれ 河 風 に時 雨なれてや雲も行 らん

(明) たれも世をやすの渡 の川 風 に時 雨なれてや雲も行 らん

(伊) たれ 眺

(島) たれ 眺

(祐) たれ 眺

(書) たれ 河 眺

(三) たれ 河 眺

(静) たれ 河 眺

(内) たれ 河 眺

(神1) たれ 河 眺

(統) たれ 渡り河  
 (統書) たれ 渡り河  
 (統内) たれ 渡り河  
 (神2) たれ 渡り河

廿五番左 待郭公(神1)

(国) 月まつと人にいふへき契 かは雲まにいそけ山 ほとゝきす

(大) 待と 郭公

(ノ) 待と

(彰) 待と

(明) 月待と人にいふへき契 かは雲まにいそけ山 ほとゝきす

(伊) 待と

(島) ちきり

(祐) ちきり

(書) 間

(三) 郭公

(静) 郭公

(内) 待と

(神1) 待と

(統) 待と

(統書) 待と

(統内) 待と

(神2) 待と

右 鷹狩 かりくらししたとる真 柴を立 鳥の 近 き羽音に我 そおとろく

\*私家集大成は他本「羽鳥」と読むが、「音」でよいだろう。

(大) 狩く

(ノ) ちかき われ

(彰) かりくらししたとる真 柴を立 鳥の 近 き羽音に我 そおとろく

(明) ちかき (二八九)

(伊) 驚く

(島) ましは

(祐) ましは

(書) ちかき

(三) たつ

(静) ちかき

(内) 狩く

(神1) 狩く

(統) 狩く

(統書) 狩く

(統内) 狩く

(神2) 狩く

廿六番左 瞿麦

(国) 春日野に春 妻 こめし若 草 の露のゆかりやなてしこの花

(大) 撫子花

(ノ) 撫子花

(彰) 撫子花

(明) 春日野に春 妻 こめし若 草 の露のゆかりやなてしこの花

\* (彰) は「春日野は」の「は」にミセケチ「に」と傍書。別筆・同筆不明。

(明) 春日野に春 妻 こめし若 草 の露のゆかりやなてしこの花

(伊)

(島)

(祐)

(書)

(三)

(静)

(内)

(神1)

(続)

(続書)

(続内)

(神2)

右 落葉「(彰)」

(国)

(大)

(ノ)

(彰)

(明)

(伊)

(島)

(祐)

(静)

\* (静) は、「音」に「はてイ」と傍書。つまり、(静) は (国) に近い本文を見ながら、(大) 系の異本で校訂したか。

わかくさ

┌

(書)

(三)

\* (国) 〓 (静) 〓 (三)。

(内) 今

\* (内) は「夕」以降が独自本文になっている。二五番右の「我そおとろく」をここに用いたか。だが、これが(続書)に影響している。

(神1)

\* (神1) 〓 (内)。

(続)

(続書)

(内)

(続書)

\* (続書) は「夕」の後「かなわれもあらしに身をそおとろく」と傍書。(内) と同文。(続)・(続書) は(内) 系本文で校訂している。

(続内)

(神2)

\* (神2) もともとの(続) は(大)・(明) 系。

廿七番左 氷室

(国)

(大)

(ノ)

(彰)

(明)

(伊)

(島)

あらし

┌

かな我もあらしに身をそおとろく

哉 我も嵐 に身をそおとろく

あらしのはて 聞 枕 かな

\* (続) は「夕」の後「かなわれもあらしに身をそおとろく」を傍書。イ注記

は(内) と同文。(内) による校訂。

(続書) 落る あらしのはて 聞 枕 かな

\* (続書) は「夕」の後「かなわれもあらしに身をそおとろく」と傍書。(内)

と同文。(続)・(続書) は(内) 系本文で校訂している。

(続内) 落る あらしのはて 聞 まくらかな

(神2) 落る あらしのはて 聞 枕 かな

涼しさをいつまで袖にかすか山ふるき氷室の槇 の下風

す、

す、

す、

す、

す、

す、

す、

\* (島) は「すゝしを」として、「しを」の間に「さ」と傍書。

(祐) すゝ  
「

(書) すゝ  
「

(三) すゝ  
かせ

(静) すゝ  
かせ

(内) すゝ  
まき かせ

(神1) すゝ  
まき

(続) すゝ  
まき

(続書) すゝ  
まき

\* (続書) は「いつま」の「ま」が「さ」に読まれると思ったのか、ミセケチして「ま」と傍書。

(続内) まき かせ

(神2) まき

右 月前雪 (国) (静) (神1) (三)

(国) 呉竹の雪の葉分 をもる月の 光 うち散るこすの下 かせ

\* (国) は (大) (明) 系本「日影」を「月の」と作る。最終形態か。

(大) は 日影 風

(ノ) わけ 日影 風

(彰) 日影

(明) 呉竹の雪の葉わけをもる日影 光 うちゝるこすの下 風

(伊) わけ 日影 風

(島) わけ 日影 ひかり 風

(祐) わけ 日かげひかり した

(書) 月の したかせ

\* (書) は (明) 「日影」を (国) (三) と同じく「月の」と作る。但し、「日

影」を消して「月の」と書いている。(書) は (明) の後の形態をもつと思われ

(三) した

\* (国) 〓 (静) 〓 (三) 〓 (神1) 〓 (内) 〓 (続) 系

(静) 風

(内) ち

\* (内) は (国) と同様に「月の」と作る。

(神1) 〓

(続) 〓

(続書) 〓

(続内) 〓

(神2) 〓

廿八番左 隣家夕顔

(国) ことゝはて中垣こえぬ人ならば白浪 の名や花 の夕 かほ

(大) と

(ノ) と ゆる 波 ゆふ

(彰) と ゆる 波 ゆふ

\* (彰) は他本「こえぬ」を「こゆる」に作る。連想による書き損じか。

(明) ことゝはて中垣こえぬ人ならば白浪 の名や花 の夕 かほ (二九オ)

(伊) はな

(島) はな ゆふ

(祐) しら

(書) しら波

(三) しら

(静) しら

(内) 波

(神1)

(統) 事と

(統書) 事と

(続内) 異と

(神2) 事と

しらなみ

しらなみ

しらなみ

しらなみ

・ 貌  
・ 顔

右 杣山雪「彰」

(国) 山風 の雪はとふさのにふの川 杣木たをすや雪折 の声

\* (国) は「とふさの」の「の」に「に」と傍書。

(大) かせ

(大) は「雪折」ではなく「下折」とする。(内) を受けたもの。その後、

(明) 段階で「雪折」となり、定着する。

(ノ)

\* (ノ) は「雪折」の「雪」に「下敷」と傍書。「下」は(大)の本文。(大)以外

外の(明)系本文を見ているか。まだ不詳。

(彰)

\* (彰) は「雪をれ」と作る。(ノ) と関係するか。

(明) 山風 の雪はとふさににふの川 杣木たをすや雪折 のこゑ

(伊)

\* (明)・(伊)ともに、「とふさに」の「に」と「にふ」の「に」は字母を換え

(島)

(祐)

(書)

\* (書) は「雪」にミセケチ「下」と傍書。ここを「下」とするのは、(内)・

(大) 系、ここで元に戻したか。

(三) かせ

\* (三) はまた「雪」に戻したか。

(静)

(内) かせ

\* (内) は(大)と同様に「下折」と作る。この理由は、今は不明である。(内)

が(大)に継承されたと言うこと。

(神1)

\* (神1) は「下折」で(内)と同文。

(続)

\* (続) は(内)と同一本文。但し、「下折」は(大)と同じ。

(続書)

\* (続書) は「雪」に「下」と傍書。(内)による校訂。

(神2)

(続内) に丹生

(大) 故

(国) 廿九番左 古郷橘「島」(祐)(ノ)

(ノ)

(彰)

(明)

(伊)

(島)

(祐)

(書)

故

故

故

故

(三) \* (三) || (国) || (静) || (内) || (ノ)。  
 (静) \* (静) は (国) と同じ。  
 (内) \* (内) は (国) と同様に、「古」と作る。  
 (神1) 故  
 (続) 故  
 (続書) 故  
 (続内) 故  
 (神2) 故  
 (国) 難 波津に句 ぶ物 から開 やこの花橘 も昔 こふらん  
 (大) にほ にほ さく  
 (ノ) にほ にほ さく 此  
 (彰) 浪 さく 此 たち花  
 (明) 難 波津ににほぶ物 からさくや此 花橘 もむかしこふらむ  
 (伊) にほ にほ さく 此  
 (島) にほ にほ さく 此  
 (祐) にほ もの さく 此  
 (書) さく 此 たち花  
 (三) さく 此 たち花  
 (静) なには 咲 や此 たちはな むかし恋らむ  
 (内) なには 此 恋らむ  
 (内) 咲 たち花  
 \* (内) は (国) に近いが、(国) の「開」を「咲」と作る。  
 (神1) さく むかし

(続) 物の さく たちはな 恋ら  
 (続書) 物の さく たちはな 恋ら  
 (続内) 物の さく たちはな 恋ら  
 (神2) 物の さく たちはな 恋ら  
 右 早梅  
 (国) 春のよのかすむ習 や厭 らん先 さく梅の句 ぶ光 に  
 \* (国) は (大) (明) 系が「春の月」とするのを「春のよ」と作る。また、末句は他本「光は」とするの、「光に」と作る。最終形態か。  
 (大) 春の月 ならひ いとふ  
 (ノ) 春の月 ならひ いとふ  
 (彰) 春の月 ならひ いとふ  
 (明) 春の月 かすむならひやいとふらん先 さく梅の句 ぶ光 は  
 (伊) 春の月 ならひ いとふ  
 (島) 春の月 ならひ いとふ まつ にほふひかりは  
 (祐) 春の月 ならひ いとふ まつ にほふひかりは  
 (書) 春の月 ならひ にとふ まつ にほふひかりは  
 (三) 夜 咲 梅 にほふひかりは  
 \* (三) || (静) 初期 || (国)。(三) でこの形になったか。  
 (静) \* (静) は「春のよの」の「よの」にミセケチ「月」と傍書。但し、文末「に」はそのままである。校訂は後人の行為か。  
 (内) 春の月 ならひ いとふ 咲 梅 にほふ  
 (神1) 春の月 ならひ いとふ む にほふ  
 (続) 春の月 ならひ いとふ まつ は  
 (続書) 春の月 ならひ いとふ まつ は

(続内) 春の月 ならひ いとふ まつ  
(神2) 春の月 ならひ いとふ まつ  
は は

三十番 左 照射(神1)

(国) つくは山 ともしを秋の過るとやこのもかのもの夜るそかなしき

\* (国) は、他本「思ひ」「このもかの子」を「過る」「このもかのも」と作る。

但し、「秋の過る」という言葉は前例が一例だが、照射は夏の風物。これが最終

形態かとも思われるが、「過る」は本来「思日」となっていたのではないか。つ

まり、「思日」を「過る」と読んでしまったということである。他本に「過る」

がないことも気になる。

(大) おもひ 子よ 「

\* (大) の「おも」は欠損による判読が難しい。予測である。

(ノ) 思ひ 子よ

(彰) おもひ 子よ

(明) つくは山 ともしを秋の思ひとやこのもかの子よるそかなしき

(伊) 思ひ 子よ 「

(島) おもひ 子よ

\* (島) は「よみ」の「み」にミセケチで「る」と傍書。

(祐) やま おもひ 子よ

(書) おもひ 子よ

(三) おもひ 子よ

(静) 思ひ 子よ 悲し

\* (静) は「秋の思ひ」と作る。但し、「このもかのも」は(国)と同じ。(国)

系本のある段階の物を見たか。

(内) 照射 思ひ 子よ

(神1) おもひ 子よ

(続) 筑波 おもひ 悲し

\* (続) は「このもかのもの」とする。

(続内) 筑波 おもひ 「

\* (続内) は他本「おもひ」とするに「おももの」とする。書き損じか。

(神2) 筑波 おもひ 「

\* (続) 系「このもかのもの」とする。

右 潟千鳥(三)(彰)

(国) いもに恋 誰にきさかたのよはの月 影 なたふきて千鳥 鳴声

\* (国) ではよく意味が分からない。「なたふきて」は「ふ」の脱だろう。「誰に」

の「に」は何か。書き損じか。だが、「ふ」の脱はともかく、「誰に」はこうした

かったのかもしれない。但し、字余りである。こうなった原因は不明である。と

はいえ、本文的には、「に」がなく、「ふ」が補われた形だろう

(大) たれ× 夜 ふ こゑ

\* (大) は「なたふけて」の「け」にミセケチで「き」と傍書。

(ノ) たれ× 夜 ふ こゑ

(彰) たれ× 夜半 ふ こゑ

(明) いもに恋 たれ×きさかたの夜はの月 影 なたふきて千鳥 鳴声 「

(伊) たれ× 夜 ふ 「 (二九ウ)

(島) たれ× 夜 「 ちとりなく

(祐) たれ× 夜 「 かけ ちとりなく

(書) たれ× 夜 「 かけ ちとりなく

(三) たれ× 夜 なく こゑ

(静) たれ× なく

\* (静) は「いまに」の「ま」にミセケチ「も」にする。同筆。また、「誰に」となっていない。

(内) 夜半 傾て  
 (神1) 妹 たれ× 夜 ふ こゑ  
 (続) こひたれ×象 夜半 ふ  
 (続書) こひたれ×象 夜半 ふ  
 (続内) こひたれ×象 夜半 ふ  
 (神2) こひたれ×象 夜半 ふ

三十一番左 蛭

(国) 天 かける蛭 よさても人としてなと光 なき道まさるらん  
 \* (国) が「まよふ」を「まさる」に変えたのは、どうしてか。光なき道がまよふのは当たり前だから、「まさる」に変えたのか。だが、そうなると、意味把握が今ひとつ難しくなる。とまれ、最終形態の可能性はある。「道まさる」という用例は正広の他、二例ある。「まさる」と「まよふ」は似ていないこともないの  
 で、「まよふ」と書こうとして「まさる」となった可能性が大きいか。

(大) まよふ  
 (ノ) まよふ  
 (彰) ほたる まよふ  
 (明) 天 かける蛭 よさても人としてなと光 なき道まよふらん  
 (伊) ひかり まよふ  
 (島) ひかり まよふ  
 (祐) ひかり まよふ  
 (書) まよふ 迷  
 (三) まよふ 迷  
 (静) 迷

\* (静) は他本と同じ「迷」とする。

(内) まよふ  
 (神1) まよふ  
 (続) ひかり まよふ  
 (続書) ひかり まよふ  
 (続内) ひかり まよふ  
 (神2) あま ひかり まよふ

右 鴨

(国) 浪の上 に 青葉ちらして鴨 そるる山ははかひのはるゝ嵐 に  
 (大) 浪の上 に 青葉ちらして鴨 そるる山ははかひのはるゝ嵐 に  
 (ノ) うへ は 「  
 (彰) うへ は 「  
 (明) 浪の上 に 青葉ちらして鴨 そるる山ははかひのはるゝ嵐 に  
 (伊) うへ は 「

(島) うへ は 「  
 (祐) うへ は 「  
 (書) うへ は 「  
 (三) うへ は 「  
 (静) うへ は 「  
 (内) うへ は 「  
 (神1) うへ は 「  
 (続) うへ は 「  
 (続書) うへ は 「  
 (続内) うへ は 「  
 (神2) うへ は 「

三十二番左 蚊遣火」(国)(静)  
 (国) 風 ちらす煙 の上 のかの声 をはらふ扇 や軒はもる月  
 (大) うへ  
 (ノ) こゑ 端  
 (彰) うへ 蚊 こゑ 端  
 (明) 風 ちらす煙 の上 の蚊の声 をはらふ扇 や軒はもる月  
 (伊) 蚊 けふり  
 (島) うへ 蚊 こゑ おふき  
 (祐) うへ 蚊 こゑ あふき  
 (書) 蚊 こゑ  
 (三) かせ こゑ  
 (静) こゑ  
 (内) こゑ いとふ  
 \* (内) は他本「はらふ」を「いとふ」と作る。独自本文。  
 (神1) うへ 蚊 こゑ いとふ  
 \* (神1) は(内)と同文。  
 (統) うへ 蚊 あふき 端  
 \* (統) は(内)とは異なり、他本と同じ。  
 (統書) うへ 蚊 あふき 端  
 (統内) うへ 蚊 あふき 端  
 (神2) うへ 蚊 おふき 端  
 右 冬田霜(神1)(彰)  
 (神1) ×

(国) あらゝかに吹 とも民のいとほぬやひつち花開 霜の朝 かせ  
 (大) さく 風  
 (ノ) ふけ 風  
 (彰) ふけ 咲 霜 風  
 (明) あらゝかにふけども民のいとほぬやひつち花さく霜の朝 かせ  
 (伊) ふけ さく  
 (島) ふけ さく  
 (祐) ふけ さく あさ 風  
 (書) さく 風  
 (三) ら 咲  
 (静) さく  
 (内) さく  
 (神1) ふけ さく  
 (統) さく  
 (統書) さく  
 (統内) し さく  
 \* (統内) は他本「ひつち」とするのに「ひつし」と作る。書き損じか。  
 (神2) さく  
 三十三番左 郭公遍  
 (国) いつのまに声 もしけみそわくらはにとひてまたれし山郭公  
 (大) 葉 時鳥  
 (ノ) こゑ 時鳥  
 (彰) こゑ 時鳥  
 (明) いつのまにこゑもしけみそわくら葉にとひてまたれし山時鳥」(三〇オ)



\* (続内) は「路」に「本ノマ、」と傍書。どうしてこう書かれたかは不明。「氷」に重複を避けたか。但し、他本にない独自本文。

(神2) 出 るひむろ 氷

右 爐火」(ノ)(彰)

\* (内) はこれが三三番、郭公遍・千鳥の前に入っている。

(国) 人ならば恨 やましはふすへたく煙 にむせふ涙 落 つゝ

(大) うらみ 柴

(ノ) うらみ 真 柴 泪 おち

(彰) うらみ おち

(明) 人ならばうらみや真 柴ふすへたく煙 にむせふ涙 おちつゝ

(伊) うらみ 真 柴

(島) うらみ 真 柴 なみたおち

(祐) うらみ 真 柴 けふり なみたおち

(書) うらみ 柴 なみたおち

(三) おち

(静) おち

(内) 柴 おち

(神1) うらみ なみた おち

(続) 泪 おち

(続書) 泪 おち

(続内) 泪 おち

(神2) 泪 おち

卅五番左 採早苗 (神1)

(国) せき入 てなひく緑 の露の玉月より水を取 さなへ哉

(大) たり 苗

(ノ) いれ たり 苗かな

(彰) たり 苗かな

(明) せきいれてなひく緑 の露の玉月より水をとる早 苗哉

(伊) いれ たり 苗

(島) いれ たり 苗かな

(祐) いれ たり 苗かな

(書) いれ たり 苗

(三) たり かな

(静) たり

(内) たり

(神1) たり 苗

(続) たり 苗

(続書) たり 苗

(続内) たり 苗

(神2) たり 苗

右 歳暮澗水

(国) 年木きるをのゝ音 して梅開 ぬ初 花いそけ谷 川の水

(大) をと さき

(ノ) さき

(彰) さき

(明) 年木きるをのゝ音 して梅さきぬ初 花いそけ谷 川の水」(三〇ウ)

(伊) さき

(島) さき「はつ たに

(祐) さき はつ たに  
 (書) さき  
 (三) さき 河  
 (静) さき  
 (内) さき  
 (神1) さき 河  
 (統) こ さき  
 \* (統) 系は「木こる」と作る。独自本文。  
 (統書) こ 咲ぬ  
 (続内) 咲ぬ  
 (神2) こ 咲ぬ

三十六番左 夕郭公

(国) たそかれの宿 を水鶏にたゝかせてわかなのりする郭 公哉  
 (大) やと 我名 時 鳥  
 (ノ) やと 我名 時 鳥かな  
 \* (ノ) は「我名」で(大)と同一表記。  
 (彰) 我名 時 鳥  
 (明) たそかれの宿 を水鶏にたゝかせて我か名のりする時 鳥哉  
 (伊) 我か名 時 鳥  
 (島) 我か名 ほとゝきすかな  
 (祐) 我か名 ほとゝきすかな  
 (書) 我か名 時 鳥かな  
 (三) やと 時 鳥  
 (静) やと  
 (内) やと かな

(神1) 我か かな  
 (統) 名 時 鳥  
 (統書) 名 時 鳥  
 \* (統書) は「名のりつる」の「つ」にミセケチ「す」と傍書。(内)系による校訂の結果か。  
 (続内) 名 時 鳥  
 (神2) 名 つ 時 鳥

右 屋上霰(国)(静)(三)(彰)

(国) きほひくる風にあられのなり高 しやかてなりやむ閨 のうち哉  
 \* (国) は(明)本系を「閨の上」を「閨のうち」と作る。最終形態か。「閨のうち」で霰の音が鳴り止む状態をいっているのであれば、「屋上霰」の題ともふさわしい。

(大) 霰 たか 上  
 (ノ) たか 上  
 (彰) 霰 たか うへかな  
 (明) きほひくる風にあられのなりたかしやかてなりやむ閨 の上 哉  
 (伊) たか 上  
 (島) たか ねやのうへかな  
 (祐) を たか ねやのうへかな  
 \* (祐) は(島)の「ほ」を「を」と読んだか。字形似る故。  
 (書) たか 上  
 (三) 音 たか  
 \* (三) は「音」とする。意味的には「あられ」と結び付くのは「音」のはず。「あられ」+「音」の組合せは、正徹・正広ともにある。「なり」は「鳴り」だろう。「音」になったのは、ある種の心変わりか。(三)段階で「音」にしてみたが、

最終的には(国)では元に戻したということではないか。

(静)

\* (静)は「閨のうち哉」の「ち」にミセケチ「へ」と傍書。(三)系本文ではなく(大)系に戻った。

(内)

霰 たか 上

(神1)

霰 たか 上

(統)

霰 たか 上

(統書)

霰 たか 上

\* (統書)は「やね」にミセケチ「ねや」と傍書。(内)系による校訂の結果か。

(統内)

霰 たか 上

(神2)

霰 たか 上

三十七番左 浦夏月

(国) かつらかた月のあゆみもいかせん浪まに遠き海の中道

\* (国)は、他本「あよみ」を「あゆみ」と作る。但し、(内)は「あゆみ」で同じ。

(大) よ 如 何せむ

\* (大)は「如何せむ」の「せむ」は「なら」に傍書、「遠き」に「つく」と傍書。揺れる本文を投影したものか。

(ノ)

よ なかみち

(彰)

よ なかみち

(明) かつらかた月のあよみもいかせん浪まに遠き海の中みち

(伊)

よ みち

(島)

よ みち

(祐)

よ みち

(書)

桂 よ む とを

(三)

\* (三) || (静) || (国)。

(静)

む

\* (静)も「あゆみ」で(国)と同じ。

(内)

海中の道

\* (内)は「月のあゆみ」で(国)と同じだが、末句が「海中の道」に作って独自本文。

(神1)

よ む みち

(統)

よ 波

\* (統)は末句「海中の道」の「の中」に「中のイ」と傍書。異本は(内)と同じ。

(統書)

よ 波

(統内)

よ 波

\* (統書)は「海の中道」の「の中」に傍点、「中のイ」と傍書。(内)と同じ。

(神2)

よ 波

右 江寒蘆(神1)

(国) あしつゝのうすきを霜にあらはして入江によはき浦風の声

(大) 蘆

かせ

(ノ)

こゑ

(彰) 蘆 つゝのうすきを霜にあらはして入江によはき浦風のこと

(伊)

こゑ

(島)

こゑ

(祐)

こゑ

(書)

こゑ

(三) うら くら ころ

\* (三) は「うはき」ないしは「かはき」と作る。書き損じだろう。

(静)

(内) 蘆 え かせ

(神1) 薄き

(統) 芦筒 頭は

(統書) 芦筒 頭は

(統内) 芦筒 頭は かせ

(神2) 芦筒 頭は

三十八番左 垣夕顔

(国) 垣 ほ荒て露を涙にかたふきぬ誰を恨 の花の夕顔

(大) かき あれ

(ノ) かき あれ たれ うらみ かほ

(彰) あれ たれ うらみ かほ

(明) かきほあれて露を涙にかたふきぬ誰をうらみの花の夕かほ (三)オ

(伊) かき あれ

(島) かき あれ たれ うらみ かほ

(祐) かき あれ たれ うらみ かほ

(書) あれ うらみ かほ

(三) うらみ かほ

(静) かほ

(内) かき あれ あらはしぬ かほ

\* (内) は他本「かたふきぬ」とあるのを「あらはしぬ」と作る。独自本文。

(神1) あれ あらはしぬ うらみ

\* (内) と同文「あらはしぬ」をもつ

(統) かき あれ 泪 貌

\* (統) は「かたふき」に「あらはしイ」と傍書。異本は(内)。

(統書) かき あれ 泪

\* (統書) は「かたふき」に「あらはし」を傍書。異本は(内)と同文。

(統内) かき あれ 泪 かほ

(神2) かき あれ 泪

右 枯野霜 (彰) 朝 日影 とくや霜原 うち煙 こぬ春かすむ野への冬枯

(大) はら打 けふり の かれ

(ノ) あさ けふり

\* (ノ) は「ふくや」の「ふ」にミセケチ「と」と傍書。書き損じによる。

(彰) はら けふり の かれ

(明) あさ日影 とくや霜原 うちけふりこぬ春かすむ野への冬枯

(伊) あさ けふり

(島) あさ けふり

(祐) あさ かけ けふり

(書) あさ けふり

(三) 夕

\* (三) は「夕枯」と作る。冬を夕と誤読したのだろう。

(静) の

(内) けふり

(神1) はら打 けふり 辺 かれ

(統) はら打 けふり 辺 かれ

(統書) はら打 けふり 辺 かれ

(統内) はら打 けふり 辺 かれ

(神1) はら打 けふり 辺 かれ

(神2) はら打 けふり 辺 かれ

(国) 三十九番左 古郷橘

(大) 故

(ノ) 故

(彰) 故

(明) 故

(伊) 故

(島) 故

(祐) 故

(書) 故

(三) 故

(静) 故

(内) 故

(神1) 故

(統) 故

(統書) 故

(統内) 故

(神2) 故

(明) にほひくる花 橘 のもとの身にあれてなみえそ故 郷の月  
(国) 匂 くる花 たちはなの本 の身にあれてなみえそ古 郷の月  
(大) にほひ 橘 もと 故  
(ノ) にほひ 橘 もと  
(彰) 匂 ひ もと  
(神1) にほひくる花 橘 のもとの身にあれてなみえそ故 郷の月

(伊) にほひ 橘 もと 故

(島) にほひ 橘 もと 故

(祐) にほひ 橘 もと 故

(書) にほひ 橘 もと 故

(三) 橘 もと 故

(静) 橘 もと 故

(内) 橘 もと 故

(神1) にほひ 橘 もと 故

(統) 匂 ひ はな 花 もと 故

(統書) 匂 ひ はな 花 もと 故

(統内) 匂 ひ はな 花 もと 故

(神2) 匂 ひ はな 花 もと 故

(大) 匂 ふ 暮 ゆ 行 年 使 や

(ノ) 匂 ふ 暮 ゆ 行 年 使 や

(彰) 匂 ふ 暮 ゆ 行 年 使 や

(明) にほふなりくれ行 としを待 かぬる春の使 や梅の下 風

(伊) 行 とし 使 や

(島) 行 とし 使 や

(祐) 行 とし 使 や

(書) 匂 ふ 暮 行 年 使 や

(三) 也 暮 行 年 使 や

(静) 也 暮 行 年 使 や

右 冬梅(三)

(国) にほふなりくれゆく年 を待 かぬる春のつかひや梅の下 風

(大) 匂 ふ 暮 ゆ 行 年 使 や

(ノ) 匂 ふ 暮 ゆ 行 年 使 や

(彰) 匂 ふ 暮 ゆ 行 年 使 や

(明) にほふなりくれ行 としを待 かぬる春の使 や梅の下 風

(伊) 行 とし 使 や

(島) 行 とし 使 や

(祐) 行 とし 使 や

(書) 匂 ふ 暮 行 年 使 や

(三) 也 暮 行 年 使 や

(静) 也 暮 行 年 使 や

(内) 暮行 使 したかせ  
 (神1) 句 ×なり暮行 使 したかせ  
 (統) 句 ふ 暮行年 かせ  
 (統書) 句 ふ 暮行年 かせ  
 (統内) 句 ふ 暮行年 かせ  
 (神2) 句 ふ 暮行年 かせ

四十番 左 余花何方(神1)(ノ)

(国) 尋 てもおらはや花 を立 かへてうすき袂 は身こそ句 はむ  
 \*(国) は、他本「身にそ」を「身こそ」と作る。最終形態か。それとも誤写か。  
 一応、前者で考えたい。

(大) たち 薄  
 (ノ) たち 薄  
 (彰) たち  
 (明) 尋 てもおらはや花 をたちかへて薄 き袂 は身にそにほはん  
 (伊) たち 薄  
 (島) たつねて はな たち 薄  
 (祐) たつねて はな たち 薄  
 (書) 尋 て たち 薄  
 (三) たち  
 (静) たち  
 \*(静) は(国)と異なり、「身にそ」とする。  
 (内) 折 は たち  
 (神1) たち ともと  
 (統) 尋 ねて たち  
 (統書) 尋 ねて たち

(統内) 尋 ねて たち  
 (神2) 尋 ねて たち  
 右 雪中孤舟(彰)  
 (国) よりこかし浪のみあれて浜ひさし雪も友 待 奥 津舟人  
 \*私家集大成は他本「奥」を「興」と読むが、「奥」だろう。訓みは「おき」であると思われる。

(大) まつ奥  
 (ノ) まつ  
 (彰) か まつ  
 \*(彰) は冒頭の字が削れているか、「か」とは読めるが他本のように「よ」とは読めない。  
 (明) よりこかし浪のみあれて浜ひさし雪も友 まつ奥 津舟人(三二ウ)  
 (伊) まつ奥  
 (島) ともまつ奥  
 (祐) ともまつおき  
 (書) まつ  
 (三) まつ  
 (静) まつ  
 (内) まつおき  
 (神1) おきつ船  
 (統) 波 庇 まつ沖  
 (統書) 波 庇 まつ沖  
 (統内) 波 庇 まつ沖  
 \*(統内) は「より」に「本ノマ」傍書。傍書は書写者によるか。  
 (神2) 波 庇 まつ沖

四十一番左 山照射〔(国)(静)〕

(国) 哀 ともよしや見さらんともしけち山のかせきの身をかへてこそ  
 (大) あはれ み  
 (ノ) あはれ む  
 (彰) あはれ  
 (明) あはれともよしや見さらんともしけち山のかせきの身をかへてこそ  
 (伊) あはれ む  
 (島) あはれ む  
 (祐) あはれ む  
 (書) あはれ む  
 (三) む  
 (静) あはれ む  
 \* (静) は「よし」の間に小字で「ろ」とよめる。但し、これを入れると字余りになる。  
 (内) む照 射  
 (神1) あはれ む  
 (統) 共  
 (統書) あはれ  
 (統内) あはれ く  
 \* (統内) は他本「ともしけち」を「ともしけく」ないしは「ともしけて」に作る。書き損じか。  
 (神2) あはれ

右 遠近炭籠

(国) 山姫の尾 上つたへるむかひ火やともに炭 やく煙 成 らん

\* (国) のみ他本は「へたつる」とするのに、「つたへる」と作る。推敲の結果、最終形態か。それとも誤写か。意味が通らないので、後者くさいか。

(大) へたつる  
 (ノ) へたつる  
 (彰) をのへへたつる すみ  
 (明) 山姫の尾 上へたつるむかひ火やともにすみやく煙 なるらん  
 (伊) へたつる すみ  
 (島) へたつる すみ  
 (祐) おのへへたつる すみ ×けふりなる  
 \* (祐) は「やく」の「く」が脱字。「煙」を「けふり」と書こうとしたためか。  
 (書) へたつる なる む  
 (三) へたつる なる  
 (静) へたつる なる  
 \* (静) は「尾上へたつる」として(明)系と同じ。(国)と異なる。  
 (内) おのへへたつる 焼くけふりなる  
 (神1) へたつる なる む  
 (統) へたつる 焼煙 なる  
 (統書) へたつる 焼煙 なる  
 (統内) へたつる 焼 けむりなる  
 (神2) へたつる 焼煙 なる  
 \* (神2) は「炭籠」の「籠」にミセケチ「焼」と傍書。題に影響された書き損じか。

四十二番左 盧橘

(国) 契 あれや花 たち花 に花 と実の共 に匂 へる池 の蓮は  
 \* 私家集大成は他本「実」を「雲」と読むが、「実」でよいと思われる。

(大) は「たち」と「花」の間に「に」を傍書している。場所を間違ったか。

(ノ) 契り はな 実 とも には 葉

(彰) 契り あれや花 橘 に花 と実のともにほへる池 の蓮は 葉

(明) 契り 実 とも には 葉

(伊) 契り 実 とも には 葉

(島) 契り 実 とも には 葉

(書) 契り 実 とも には 葉

(三) 契り 実 とも には 葉

\* (三) は「池蓮葉」とあり、「の」が省略ないしは脱字。

(静) 契り はな 実 とも には 葉

(祐) 契り はな 実 とも には 葉

\* (祐) は(島)の「花と実の」を「花と実と」と作る。目移りか。

(内) 契り 実 とも には 葉

(神1) 契り 実 とも には 葉

(統) 契り はなの 実 とも には 葉

\* (統) は「花たち花の」という独自本文。他本は「花たち花に」と作る。

(統書) 契り はなの 実 とも には 葉

\* (統書) は「花とのみ共」にミセケチ「花とみの共」と傍書。分かりやすくしたためか。

(統内) 契り はなの 実 とも には 葉

\* (統内) は他本「花と実と」を「花をみ」と作る。書き損じか。

(神2) 契り の花 とのみ共 に 葉

\* (神2) は(統書)ともとも同文。

右 竹霜 (神1) (三) (彰)

(国) 老か身のかしらの霜のそれならてわか世かたふく庭の村 竹

(大) 老か身のかしらの霜のそれならてわか世かたふく庭の村 竹

(ノ) 其

(彰) 老か身のかしらの霜のそれならてわか世かたふく庭の村 竹

(明) 老か身のかしらの霜のそれならてわか世かたふく庭の村 竹

(島) 老か身のかしらの霜のそれならてわか世かたふく庭の村 竹

(書) 老か身のかしらの霜のそれならてわか世かたふく庭の村 竹

(三) 老か身のかしらの霜のそれならてわか世かたふく庭の村 竹

(静) 竹霜

\* (静) は早梅を竹霜の下に記し、「早」字に点を打っている。また、「早」の右

に「てれはうし」と傍書。そして、「れ」に点。

(内) 早梅

\* (内) は題が「早梅」となっている。

(神1) 早梅

(統) 早梅

\* (統) は(内)と同じ。

(統書) 早梅

(統内) 早梅

(神2) 早梅

(明) 老か身のかしらの霜のそれならてわか世かたふく庭の村 竹

\* (明) で一気に題ごと変える。

(伊)

(島)

(祐)

(書)

(三)

年のうちに春もやこえてこもりくの初瀬のひはら梅かゝそする  
\* (三) || (神1) || (内) || (統) 系、そして、(静) にもこの本文が投影する。(三) で元に戻したか。だが、(国) でまた反転した。

(静)

(伊)

(島)

(祐)

(書)

「静」は「老か身のかし」に線を引き、上に合点マークをつけ、ミセケチさらに、題の「早梅」の下に「年のうちに春もやこえてこもりくのはつせのひはら梅かゝそする」を記し、ここにも点を打っている。なお、「こもりく」の「く」に「へ歟」と傍書。  
(静) は何らかの形で(内)・(統) 系の本を見たか。点は墨滅の意味だろうから、最終的には、元の本文をとったか。

(内)

(神1)

(統)

(統書)

(統内)

(神2)

\* (統)

四十三番左

(国)

ぬきかくる袖 をそなをす秋のくる風の使 に心 をくとて」

(大)

(ノ)

(彰)

\* (彰)

は他本「袖をそ」を「袖をは」、他本「心をくとて」を「心をくまで」とする。独自本文というよりも、誤読か。連想による書き損じか。  
\* (彰) は「つかひや」の「や」にミセケチ「に」と傍書。同筆・別筆不明。別筆か。

(明)

(伊)

(島)

(祐)

(書)

(三)

(静)

(内)

(神1)

\* (内)

(統)

\* (統)

(統書)

(統内)

(神2)

(神1)

右

(国)

山路雪」(内)

こゝろ

は 心 をくま

は他本「袖をそ」を「袖をは」、他本「心をくとて」を「心をくまで」とする。独自本文というよりも、誤読か。連想による書き損じか。

つかひ



(祐) たち ころろ

(書) たち まれ

(三) たち み

(静) たち まされる

(内) たち ×

\* (内) は他本「袖はあれども」を「衣はあれと」、「人にまれなる」を「人にまされる」と作る。独自本文。

(神1) たち 衣 × まれ

\* (神1) は「衣はあれと」が(内)と同文。

(統) たち み

\* (統) は「袖」に「イ衣」、「あれとも」の「も」に「イ无」、「まれなる」に「まされるイ」と傍書。異本はすべて(内)と同じ。

(統書) たち み まれ

\* (統書) は「袖」に「衣」、「あれとも」の「も」に「イニ无」と傍書。(内)

系と同文。但し、「まれなる」に傍書なし。

(続内) たち まれ

(神2) たち み まれ

右 嶺時雨(彰)

(ノ) 峯

(国) 嵐 ふく雲はいなほの嶺の松 さても時 雨を残す声哉

(大) 吹 峯 のこ こゑ

(ノ) あらし吹雲 のこ かな

(彰) のこ こゑかな

(明) 嵐 吹雲はいなほの嶺の松 さても時 雨をのこす声哉

(伊) 吹 かな

(島) あらし吹 みね

(祐) あらし吹 みね まつ

(書) 稲葉 峯 のこ こゑ

(三) 吹雲 しくれ

(静) 吹雲 しくれ

(内) あらし吹 峯 のこ

(神1) 吹雲 みね しくれ

(統) 吹雲 かな

(統書) 吹雲 かな

(続内) 吹雲 かな

(神2) 吹雲 かな

四十五番左 夏月(大)(神1)

(国)

(大)

(ノ)

(彰)

(明)

(伊)

(島)

(祐)

(書)

(三)

(静)

(内)

浦夏月

\* (内) は「浦夏月」とする。

(神1) 浦夏月

(統) 浦夏月

\* (統) は(内)による。

(統書) 浦夏月

\* (統書) の「浦」は後でつけた傍書。(内)による校訂。

(統内) 夏月

(神2) 夏月

(国) 沖 津浪うら風 はやくさす塩 に影 もをくれぬ短 夜の月

\* (国) は他本「奥」を「沖」と作る。

(大) 奥

(ノ) 奥

\* (ノ) は「はやみ」と作る。連想による誤記か。

(彰) 奥 波

(明) 奥 津浪うら風 はやくさすしほに影 もおくれぬ短 夜の月

\* (明) は「風」にミセケチ「浪」と傍書。

(伊) 奥

(島) 奥

(祐) 奥

(書) 奥

(三) 奥

(静) 奥

(内) 奥

(内) 奥

\* (内) は他本「さす塩に」を「さす塩の」と作る。独自本文。

(神1) 澳

\* (統) は「さすしほに」の「に」に「のイ」、「をくれて」の「て」に「ぬイ」と傍書。異本は(内)と同じ。

(統書) 澳

\* (統書) は「しほに」の「に」に「の」、「をくれて」の「て」に「ぬ」と傍書。

(統内) 澳

(神2) 澳

\* (神2) 「をくれて」と作る。(統) 系の原形か。

右 河冬月(国)(静)(ノ)(三)

(国) 河冬月

\* 私家集大成は「何冬月」と読むが、「河冬月」でよいだろう。

(国) 影 うかふ雪に氷もふし川になかれてあまる冬の夜の月

\* (国) だけ「雪に」とする(他本は「雪も」)。「雪も氷も」という繰り返しを避けたか。最終形態か。

(大) 河

(ノ) 富士

(彰) 富士河

(明) 影 うかふ雪も氷も富士川になかれてあまる冬の夜の月(三ツ)

(伊) 富士

(島) 富士

(祐) 富士

(書) 富士

(三) 富士

(静) 富士

(内) 富士

(内) 富士

(書) 富士

(書) 富士

(三) かけ も 河

(静) 富士 よ

(内) 富士 よ

(神1) 富士 よ

(統) よ

(統書) よ

(統内) よ

(神2) よ

四十六番左 河五月雨

(国) さほ川やいつれの年 の水かさより名におふ山そ五月雨の比

\* (国) だけ「名におふ」とする(他本は「名にほふ」)。仮名遣いによった最終調整か。

(大) 河 み ころ

(ノ) 河 み ころ

(彰) さほ川やいつれの年 のみかきより名にほふ山そ五月雨の比

(明) さほ川やいつれの年 のみかきより名にほふ山そ五月雨の比

(伊) さほ川やいつれの年 のみかきより名にほふ山そ五月雨の比

(島) さほ川やいつれの年 のみかきより名にほふ山そ五月雨の比

\* (島) は五月雨の後「の」を省略している。(明)系がみな「ほふ」とするのは、(明)が間違っただけをそのまま継承した結果だろう。

(祐) は(明)が間違っただけをそのまま継承した結果だろう。

\* (祐) は(島)を写したが、「みかさ」を「みかき」と写し、「ほふ」を正しく

「おふ」と変えている。

(書) 棹

(三) な

\* (三) 〓 (静) 〓 (国)。

(静) 時 み

(内) 時 み

\* (内) は「いつれの時」(他本「いつれの年」と作る。

(神1) 棹 み

(統) とし

\* (統) は「とし」の「し」に「きイ」と傍書。これは、(内)と同じ。

(統書) とし

\* (統書) は「とし」の「し」に「き」と傍書。(内)と同文。(統書)も「名にあふ」。

(統内) とし

(神2) とし

\* (統) 系は「名にあふ」。

右 河薄氷「彰) うつ蟬 のひとへの衣 を浪のあや氷 てのこす中河の水

(大) せみ 一 重 きぬ

(ノ) せみ 一 重 きぬ

(彰) せみ 一 重 きぬ

\* (彰) は「のころ」の「る」にミセケチ「す」と傍書。同筆別筆かは不明。

(明) うつせみの一 重のきぬを浪のあや氷 てのこす中河の水

(伊) せみ 一 重 きぬ

(島) せみ 一 重 きぬ

(祐) せみ 一 重 きぬ

(書) せみ 一 重

(三) 残す 川

(静) 空 一重 波 川  
 (内) 空 一重 波 川  
 (神1) 空 一重 波 川  
 (続) 空 一重 波 川  
 (続書) 空 一重 波 川  
 (続内) 空 一重 波 川  
 (神2) 空 一重 波 川

四十七番左 滝下蛭

(国) 滝殿にともすはしらす石の火をうち出 す浪 にちる蛭 哉  
 \*(国) は「浪に」とする。最終形態か。

(大) の  
 (ノ) いたすなみの  
 (彰) の  
 (明) 滝殿にともすはしらす石の火をうち出 す浪 のちる蛭 哉  
 (伊) の  
 (島) の ほたるかな  
 (祐) の ほたるかな  
 (書) いたす の ほたるかな  
 (三) の  
 \*(三) 〓 (静) 〓 (国)  
 (静) いたす  
 \*(静) は「いたす」の「い」にミセケチをするか、別の字、おそらく「出」を記していない。初期に脱字をして、校合したときに、傍書を忘れたか。  
 (内) 打出す波 の  
 (神1) いたす の

(続) 打出す波の散 蛭 かな  
 (続書) 打出す波の散 蛭 かな  
 (続内) 打出す波の散 蛭 かな  
 (神2) 打出す波の散 蛭 かな  
 \*(内)・(神1)・(続)系は「浪の」とする。(大)(明)(国)系は「浪に」。

右 暮山雪(神1)

(国) いこま山はれゆく雪の上 こえて夕暮 たとる嶺のうき雲  
 \*私家集大成は「こして」と読むが、他本同様に「こえて」でよいだろう。

(大) 晴 行雪 峯  
 (ノ) 行雪  
 (彰) 行雪  
 (明) いこま山はれ行 雪の上 こえて夕暮 たとる嶺のうき雲 浮  
 (伊) 行 浮  
 (島) 行 うへ くれ  
 (祐) 行 うへ くれ  
 (書) 行 くれ  
 (三) 行 くれ  
 (静) 行雪 くれ  
 (内) 晴 行雪 くれ  
 (神1) 行 くれ  
 (続) 伊駒 行雪 うへ くれ  
 (続書) 伊駒 行雪 うへ くれ  
 (続内) 伊駒 行雪 うへ くれ  
 (神2) 伊駒 行雪 うへ くれ  
 浮



(ノ) ころとてや ふける よ 浪  
 (彰) とてや ふける 半  
 (明) いそげ月此 比 とてやよひのまをふけるにやとす夜はの浦 なみ  
 (伊) とてや 間 ふける 波  
 (島) ころとてや ふける 浪  
 (祐) このころとてや ふける 浪  
 (書) とてや宵 ふける 浪  
 \* (書) は「宵」に「よひ」と小書き傍書。  
 (三) ころなれは うら浪  
 \* (三) 〓 (静) 初期 〓 (国)。  
 (静) なれは うら浪  
 \* (静) は「なれは」にミセケチ「とてや」と傍書。同筆か。また、「夜はの」の「は」あたりに、「く」と薄く傍書。これなら「夜々」と読ませたかったのか。こちらの異文はまだない。  
 (内) とてや 吹飯 よ 波  
 \* (内) は(国)「深井」(大)(明)系「ふける」を「吹飯」と作る。  
 (神1) ころとてや 間 ふける 浪  
 (統) この とてや宵 吹る よ 波  
 (統書) この とてや宵 吹る よ 波  
 (統内) この とてや宵 吹る よ 波  
 (神2) この とてや宵 吹る よ 波  
 右 山家雪  
 (国) 軒 はよりかきをくみれば塵 つもる木 葉も ましる雪 哉  
 \* (国) は字足らず歌になっている。「半」が抜けた故だろう。  
 (大) 置 ちり 半

(ノ) 端 ちり のは 半  
 (彰) ちり 半 かな  
 (明) 軒 はよりかきをくみればちりつもる木 葉も半 ましる雪 哉  
 (伊) ちり 半 ゆき  
 (島) ちり 半 かな  
 (祐) ちり 半 かな  
 (書) ちり 半 かな  
 (三) 見 は かな  
 \* (三) は「木葉は」と作り、「は」と「ましる」の間に「半歟」と傍書。校訂の痕跡か。  
 (静) 半  
 \* (静) は「木葉に」の「に」にミセケチ「も」。ここから、(静)は(国)を見ていない。もしくは他本で(国)の「半」欠脱を補ったか。  
 (内) 積る 半 かな  
 (神1) ちり 半 かな  
 (統) のき ほを 散積る木の葉 なかは  
 \* (統) は他本「かきをくみれば」とするの、「かきほをみれば」という独自本文になっている。理由は不明。  
 (統書) ほを 散積る木の葉 なかは  
 \* (統書) は、「軒はより」に「のきはより」と傍書。読みやすくしたためだろう。こちらも「かきほをみれば」となっている。独自本文。  
 (統内) のき ねを 散積る木の葉 なかは  
 \* (統内) は(統)系「かきほを」とするの、「かきねを」と作る。連想による書き損じか。  
 (神2) ほを 散積る木の葉 なかは  
 \* (統) 系は「かきほをみれば」

五十番 左 水郷早苗「(国)(静)(神1)」  
 (国) 夕まくれかつらの里 にやとりくる月をさなからとる早苗哉  
 (大) 暮 さと 取  
 (ノ) 暮 さなへかな  
 (彰) 暮 さなへかな  
 (明) 夕まくれかつらのさとにやとりくる月をさなから取 早苗かな  
 (伊) さと 取 かな  
 (島) さと かな  
 (祐) さと かな  
 (書) 暮 桂 さなへ  
 (三) 暮 さなへ  
 (静) さと さなへ  
 (内) 暮 さなへ  
 (神1) さと さなへかな  
 (続) 暮 桂 さなへ  
 (続書) 暮 桂 さなへ  
 (続内) 暮 桂 さなへ  
 (神2) 暮 桂 さなへ  
 右 寒草霜「(彰)」  
 (国) をきわたす霜の枯 葉に松のたね草にも有と残 色哉  
 \* (国) は「草にも」の「も」がやや「も」に見えにくい。「○+も」のようにも見える。だが、これは「も」でよいだろう。  
 (大) かれは ありのこる  
 (ノ) ありのこる

(彰) かれは あり 残る  
 (明) をきわたす霜の枯 葉に松のたね草にも有りとこのる色哉「(三三ウ)」  
 (伊) り 残る  
 (島) ありのこるいろかな  
 (祐) ありのこるいろかな  
 (書) あり 残る かな  
 (三) 有て残す  
 \* (三) は「有て残す」が独自本文。後代の変改か。  
 (静) 種 かな  
 (内) は 種 かな  
 (神1) あるのこる かな  
 \* (神1) は「ある」と読める。  
 (続) 置渡す あり 残るいろかな  
 (続書) 置渡す あり 残るいろかな  
 (続内) 置渡す あり 残るかな  
 (神2) 置渡す あり 残るいろかな  
 五十一番左 磯夏月「(大)(ノ)」  
 (国) いつるよりはやく浪分 こゆるきのいそくか月も短 夜の空  
 \* (国) は(大)(明)系本「短夜の空」を「短夜の空」と作る。最終形態か。  
 (大) 早く ころ  
 (ノ) わけ 比  
 (彰) わけ 比  
 (明) いつるよりはやく浪わけこゆるきのいそくか月も短 夜のころ  
 (伊) わけ 比  
 \* (伊) の「に」は(明)の「も」を「に」と読んだ可能性大

(島)	わけ	みしか夜のころ	(彰)	野のすゝきたかゝや	哉
(祐)	わけ	みしか夜のころ	(明)	むさし野ゝ薄 高 かやうつもれてあまたの山 のならふ雪哉	哉
(書)	早くわけ	比	(伊)	むさし野	かや
* (書)	「早」に「はやイ」と傍書。「イ」とは(明)か。		(島)	むさし	かや
(三)		そら	(祐)	むさし	かや
* (三) 〓 (静) 〓 (国) 〓 (内)。			(書)	むさし	かや
(静)		空	(三)	野	たかかや
* (静)	「短夜の空」として(国)と同じ。しかも、ミセケチなし。		(内)	野	たかゝや
(内)	出る 波 急 か	よのそら	(神1)	むさし野の	かや埋
* (内)	が(国)と同じ「そら」とする。(内)は古い要素と新しい(国)の要素と独自本文とが混淆しているように見える。文明三年版と長享二年版が入り交じっているか。とはいえ、(国)が先祖返りした可能性もある。		(神2)	むさし野のすゝき	かや埋
(神1)	わけ	磯く	(続書)	むさし野のすゝき	かや埋
* (神1)	「磯く」は珍しい用例。		(続内)	むさし	すゝき
(続)	出る	ころ	(神2)	むさし野のすゝき	かや埋
* (続)	「短夜のころ」の「ころ」に「そらい」と傍書。異文は(内)・(国)と同じ。		五十二番左	河夏月	
(続書)	出る	ころ	(国)	明 やすき比 とは誰 か太山川岩こす浪 の雪の月かけ	影
* (続書)	「ころ」に「そら」と傍書。(内)系と同文。		(大)	易き	たれみ
(続内)	出る	ころ	(ノ)	あけ	み
(神2)	出る	ころ	(彰)	あけ	たれみ
右 枯野雪「(三)			(明)	あけやすき比 とはたれかみ山川岩こす浪 の雪の月影	影
(国)	武蔵の薄 高 萱 うつもれてあまたの山 のならふ雪かな		(伊)	あけ	たれみ
(大)	むさし	かや	(島)	あけ	たれみ
(ノ)	野の	かや	(祐)	あけ	たれみ
			(書)	あけ	たれみ
			(三)	影	影

(静) たれみ 影」  
 (内) あけ ころ 影」  
 (神1) 河 影」  
 (統) 河 影」  
 (統書) 河 影」  
 (統内) 河 影」  
 (神2) 河 影」  
 (神2) 河 影」  
 (大) 山 かつら月影 しろくまよふ夜の霜  
 (国) 老ぬるか遠 山姫 の山 かつら月影 しろくまよふ夜の霜  
 (彰) とを ひめ 白  
 (ノ) とを ひめ  
 (明) 老ぬるか遠 山姫 の山 かつら月影 しろくまよふ夜の霜  
 (伊) 影」  
 (島) 影」  
 (祐) ひめ やま かけ  
 (書) とを ひめ やま かけ  
 (三) とを かけ  
 (静) とを よ  
 (内) かけ  
 (神1) やま  
 (統) やま  
 (統書) やま  
 (統内) やま  
 (神2) やま

五十三番左 夕盧橋」(内)  
 (国) 墨染 の夕 の空 に橘 をつゝむもしるく袖 のかそする  
 (大) すみ  
 (ノ) すみ  
 (彰) すみ  
 (明) すみそめの夕 の空 に橘 をつゝむもしるく袖 のかそする」(三四オ)  
 (伊) すみそめ  
 (島) すみそめ ゆふへのそらに  
 (祐) すみそめ ゆふへのそらにたち花  
 (書) すみ  
 (三) すみ  
 (静) すみ  
 (内) そて  
 (神1) たちはな  
 (統) たちはな  
 (統書) たちはな  
 (統内) たちはな  
 (神2) たちはな  
 右 網代群遊」(内)  
 (国) よる浪はたゝこゆるぎそ網代木にさかなもとむるうちの郷人  
 (大) 宇治 里  
 (ノ) 里  
 (彰) 里  
 (明) よる浪はたゝこゆるぎそ網代木にさかなもとむる宇治の里 人

(伊) 宇治里

(島) 宇治里

(祐) 宇治さと

(書) 宇治里

(三) 宇治里

(静) 宇治里

(内) 宇治里

(神1) 宇治さと

(統) 宇治里

(統書) 宇治里

\* (統書) は「木に」「もる」と傍書して墨消し。(内) 系を見て校訂したが、「木に」をよとしたのだろう。

(統内) 宇治里

(神2) 宇治里

五十四番左 荒和祓 (大) (島) (祐)

(国) 御 祓川身のうたかたは年 へてもたよふ浪のこゆる わそうき

\* (国) は、(大) (明) 系が「浅茅すかぬき」とあるのを「たよふ浪の」と作る。(内) も同じ。最終形態か。但し、末句は、「こゆるわそうき」であり、他本は「こゆる端そなき」である。誤写か。

(大) 祓 河 哥 浅 茅すかぬき はそなき

(ノ) みそき あさちすかぬき 端そなき

(彰) みそき あさちすかぬき 端そなき

(明) みそき川身の哥 かたは年 へてもあさちすかぬきこゆる端そなき

(伊) みそき 哥 あさちすかぬき 端そなき

\* 「あさち」「すかぬき」正徹語彙、草根集「夏祓」「六四一みそきしてけふすかぬきついつくにも 茂るあさちやまはらなるらん」。

(島) みそき とし あさちすかぬき 端そなき

(祐) みそき とし あさちすかぬき 端そなき

(書) みそき 哥 たよふ浪の 端

\* (書) は「あさちすかぬき」にミセケチ「たよふ浪の」と傍書。墨薄く、同筆か別筆か、まだ確定できない。(内) 系本文に拠る。

(三) 〓 (静) 〓 (国)

(静) 河

\* (静) は「身のこたかた」の「こ」にミセケチ「う」、「たよふ浪の」にミセケチ「あさちすかぬき」、「わそうき」の「う」にミセケチ「な」。先祖返りか。それとも、(内)・(統) を見て改訂したか。

(内) みそき河 端そなき

(神1) みそき 端そなき

\* (神1)・(内) は四句まで(国)と同じで、末句は(大) (明) と同文。

(統) 河 浅 茅ぬかつき越る なき

\* (統) は「浅茅ぬかつき」に「たよふ浪のイ」と傍書。異本は(内)・(国)と同じ。

(統書) 河 浅 茅ぬかつき越る なき

\* (統書) は、「うきかた」の「き」にミセケチ「た」、「浅茅ぬかつき」に「たよふ浪の」を傍書。

(統内) 河 浅 茅ぬかつき越る なき

(神2) 河 浅 茅ぬかつき越る なき

\* (統) 系は「浅茅ぬかつき」と作る。どこかで誤伝したか。

右 埋火消尽」(国)(静)(三)(彰)

(国) 埋 しを暁 をきに見ましかは今朝火はとらし灰 そぬるめる

(大) うつみ お お けさ

(ノ) うつみ お

\* (ノ) は「おき」で(大)と表記が一致。

(彰) (明) うつみしを暁 をきに見ましかは今朝火はとらし灰 そぬるめる

(伊) うつみ

(島) うつみ あかつき

(祐) うつみ あかつき

(書) うつみ

(三) うつみ

(静) うつみ

(内) お

(神1) お

(統) 埋 火 み けさひ はい

\* (統) のみ他本「埋し」とするの、「埋火」と作る。但し、末句に「火」があるので、誤写か。

(統書) 埋 火 お み けさひ はい

(統内) 埋 火 お み けさひ はい

(神2) 埋 火 お み けさひ はい

五十五番左 月前郭公(神1)

(国) しかのうらやたか世したひて郭 公ふるき都 の月に鳴 らん

(大) 志賀 浦 時 鳥 古 きみやこ む

(ノ) 志賀 浦 時 鳥

(彰) 志賀 浦 時 鳥 宮 こ

(明) しかのうらやたか世したひて時 鳥ふるき都 の月に鳴 らん

(伊) 時 鳥

(島) ほとゝきす

(祐) ほとゝきす みやこ

(書) 時 鳥 なく

(三) 志賀 郭 公

(静) 志賀 なく

(内) 浦 なく

(神1) 浦 なく

(統書) 浦 なく

(統内) 浦 なく

(神2) 浦 なく

右 篠上霰

(国) 一 ふしもなき身よさゝの上 にたに詞 の玉 をなす霰 哉

(大) ひと うへ ことは こと葉 かな

(ノ) こと葉 こと葉 かな

(彰) こと葉

\* (彰) は「きゝ」の「き」にミセケチ「さ」と傍書。別筆。 一 ふしもなき身よさゝの上 にたにこと葉の玉 をなす霰 哉

(明) 一 ふしもなき身よさゝの上 にたにこと葉の玉 をなす霰 哉 (三四ウ)

(伊) こと葉 こと葉 かな

(島) うへ 「こと葉 たま かな

(祐) うへ 「こと葉 たま あられかな

(書) 篠 こと葉

(三) かな

(静) かな

(内) 篠 こと葉

(神1) 篠 こと葉

(統) 言葉

(統書) 言葉

(続内) 言葉

(神2) 言葉

五十六番左 竹亭夏来

(ノ) 竹亭友来

\*「友」に「夏歎」と傍書。

(国) 住 人のなをき心 の竹 の庵 すゝしとみてや夏の来ぬらん

(大) すむ き

(ノ) すむ き

(彰) すむ 見 き

(明) すむ人のなをき心 の竹 の庵 すゝしとみてや夏のきぬらん

(伊) すむ 廬 き

\* (伊) は (明) の庵を庭と一旦写し、ミセケチをして廬とした。

(島) すむ こゝろ 見 き

(祐) すむ こゝろ たけ 見 き

(書) すむ 見 き

(三) 覧 き

(静) き

(内) 涼 し 見 き

(神1) いほ 涼 し 見 き

(統) 涼 し 見 き

(統書) 涼 し 見 き

(続内) 涼 し 見 き

(神2) 涼 し 見 き

右 河 落葉「(ノ) (彰)

(ノ) 河辺落葉

\* (ノ) がどうしてこうしたかは不明。左と合わせて四字句にしたかったか。連想による誤読か。

(国) 立 田川散 しく浪を水かさにて山 は木 葉のふる時 雨哉

(大) 河 ちり み

(ノ) ちり 木の葉を しくれかな

\* (ノ) は「木の葉を」と作る。書き損じだろう。「木の葉を」だと「ふらす」しかないから。

(彰) ちり み しくれ

(明) 立 田川ちりしく浪をみかさにて山 は木 葉のふる時 雨かな

(伊) ちり み かな

(島) ちり み しくれかな

(祐) ちり み やま しくれかな

(書) ちり み

(三) たつた河

(静) たつた河

(内) 龍 ちり 波 かな

(神1) ちり み

(統) 龍 河 波 木の葉

(統書) 龍 河 波 木の葉

(統内) 龍 河 波 木の葉

(神2) 龍 河 波 木の葉

五十七番左 江上夏月(大)

(国) 秋よいかに明 やすき月の枕 たにさひ江にふくるよはの舟人

(大) 深る夜

(ノ) 深る夜

(彰) 深る夜

(明) 秋よいかにあけやすき月の枕 たにさひ江に深る夜はの舟人

(伊) 深る夜

\* (伊) は(明)の「たに」を「にも」と読んだ可能性大

(島) 深る夜

(祐) 深る夜

(書) 深る夜

(三) 深る夜

\* (三) || (静) || (国)。

(静) 深る夜

(内) 深る夜

(神1) 深る夜

\* (神1) は「さひには」と作る。独自本文。

(統) 更る夜半

(統書) 更る夜半

(統内) 更る夜半

(神2) 更る夜半

右 追日待雪(神1)(三)

(国) いたつらに吹や嵐 のあすか川昨 日も雪の空 たのめして

(大) 河

(ノ) きのふ

(彰) 河の

\* (彰) は他本「昨日も」を「昨日の」に作る。書き損じか。

(明) いたつらに吹や嵐 のあすか川昨 日も雪の空 たのめして

(伊) さら

(島) さら

(祐) さら

(書) 河 さら

(三) 河 さら

(静) さら

(内) さら

(神1) さら

(統) 徒 さら

(統書) 徒 さら

(統内) 徒 さら

\* (統内) は他本「徒に」を「暁に」に作る。但し、「暁」は何かを消してその上に書いたと思われる。どうしてこの字を書いたのか。意味的に考えて改編したか、不明。

(神2) 徒 さら

飛 鳥河きのふ さら

五十八番左 余花

(国) 花のかのこる茂みにしらす世に暮にし春や身をかくすらん

\* (国) は「しけみに」と作る。他本は「しけみよ」とするが、「に」と「よ」は似ている。とはいえ、この時の字母では「に」しか読めない。但し、最終案が「しけみに」の可能性はある。

(大) 香 よ くれ

(ノ) 香 しけよ くれ

(彰) 香 残るしけよ

(明) 花のかのこるしけみよしらす世にくれにし春や身をかくすらん

(三五オ)

(伊) しけよ くれ

\* (伊) は「花のかのたとる」の「たとる」にミセケチして「のこる」と傍書、「たとる」「しけみ」は縁語

\* 「しけみよ」という表現はここだけ。通常は「しけみより」

(島) しけよ くれ

(祐) しけよ くれ む

(書) 香 しけみ

(三) 香 よ くれ

(静) 香 よ くれ

(内) 香 残るかしけみ

\* (内) は「残るかしけみ」という独自本文。

(神1) しけよ

(統) 香 残るしけよ

\* (統) は「残るし」の「し」に「かい」、「しけみよ」の「よ」に「イ无」と傍書。異本は(内)と同じ。

(統書) 香 残るしけよ

\* (統書) は「残るし」の「る」と「し」の間に「か」、「しけみよ」の「よ」に

「无」と傍書。これは(内)と同文。

(続内) 香 残るしけよ

(神2) 香 残るしけよ

右 時雨(彰)

(国) 山風 の日影 に過る村雲 にあまりてしはしふる時雨哉

(大) むら

(ノ) すくる

(彰) 山風 の日影 に過る村雲 にあまりてしはしふる時雨かな

(明) 山風 の日影 に過る村雲 にあまりてしはしふる時雨かな

(伊) むら

(島) かけすく むらくも

(祐) かけすく むらくも

(書) かな

(三) かな

(静) かせ

(内) かせ

(神1) むら

(統) むら

(統書) むら

(神2) むら

五十九番左 樹陰蟬(国)(島)(祐)(静)

(国) あまのかるみるめなきさの杜の蟬 なんと我 からと声 うらむらん

\* 私家集大成は「我からを」と読むが、ここは他本同様「我からと」でよいだろ

う。但し、(国)が「と」を「を」と誤写した可能性はある。

(大) 蝻 森 せみ 恨 ら

(ノ) 蝻 森 われ 恨 ら

(彰) 蝻 森 われ 恨 ら

(明) あまのかるみるめなきさの杜のせみなとわれからとこゑ恨 らん

\* (明) は「かるめ」の「め」をミセケチ「見」と傍書。

(伊) 見 せみ われ 恨

(島) 見 せみ われ 恨

(祐) 見 森 せみ われ 恨

(書) 見 森 せみ われ 恨

(三) せみ 恨

(静) せみ 恨

\* (静) は「あさ」の「さ」にミセケチ「ま」と傍書、同筆。

(内) 世を恨む

\* (内) は「声うらむ」を「世を恨む」とする。独自本文。

(神1) われ 世を 恨む

\* (神1) も「世を」と作る。(内)と同文。

(統) 蝻 松 われ よ 恨む

\* (統) は「松の蟬」は「杜の蟬」の誤写。「世を恨む」は(内)と同じ。既に校訂されている。つまり、(イ)などが無いということ。

(統書) われ 恨む

\* (統書) は「声恨むらん」に「声」にミセケチ「よを」と傍書。

(統内) 見 われ 恨む

(神2) われ 恨む

右 寒松嵐

(国) 霜 なからしふく嵐 に染 ますや冬に色こき岡 のへの松

(大) 霜 なからしふく嵐 に染 ますや冬に色こき岡 のへの松

(ノ) 霜 なからしふく嵐 に染 ますや冬に色こき岡 のへの松

(彰) 霜 なからしふく嵐 に染 ますや冬に色こき岡 のへの松

(明) 霜 なからしふく嵐 に染 ますや冬に色こき岡 のへの松

(伊) 霜 なからしふく嵐 に染 ますや冬に色こき岡 のへの松

(島) 霜 なからしふく嵐 に染 ますや冬に色こき岡 のへの松

(祐) 霜 なからしふく嵐 に染 ますや冬に色こき岡 のへの松

(書) 霜 なからしふく嵐 に染 ますや冬に色こき岡 のへの松

(三) 霜 なからしふく嵐 に染 ますや冬に色こき岡 のへの松

(静) 霜 なからしふく嵐 に染 ますや冬に色こき岡 のへの松

(内) 霜 なからしふく嵐 に染 ますや冬に色こき岡 のへの松

(神1) 霜 なからしふく嵐 に染 ますや冬に色こき岡 のへの松

(統) 霜 なからしふく嵐 に染 ますや冬に色こき岡 のへの松

(統書) 霜 なからしふく嵐 に染 ますや冬に色こき岡 のへの松

(神2) 霜 なからしふく嵐 に染 ますや冬に色こき岡 のへの松

六十番 左 郭公(大) (神1)

(国) 月なからもりくる 閨 の荒 まくもおしからぬ夜のほとゝきす哉

(大) 来 ねや あれ 郭 公かな

(ノ) 来 ねや あれ 郭 公かな

\* (ノ) と(大) は「おしからぬ」で同一表記。

(彰) ねや あれ を 時 鳥かな

(明) 月なからもりくる ねやのあれまくをしからぬ夜の時 鳥哉

\* (明) の段階で、「をしからぬ」に改めたのだろう。

(伊)	ねや	あれ	を	時	鳥
(島)	ねや	あれ	を		
(祐)	ねや	あれ	を		
(書)	あれ			時	鳥かな
(三)	あれ				
(静)	あれ			郭	公
(内)				郭	公かな
* (内) は (国)・(大) と共通で「おしからぬ」と作る。					
(神1)	あれ				
(統)	あれ	惜	か	時	鳥かな
(統書)	あれ	惜	か	時	鳥かな
(続内)	あれ	惜	か	時	鳥かな
(神2)	あれ	惜	か	時	鳥かな
右 閑中書「(三)(彰)					
(国)	竹をうつ音	にはあら	て雪折にねふりをさます床の上	かな	
(大)				哉	
(ノ)				かな	
(彰)				哉	
(明)	竹をうつ音	にはあら	て雪折にねふりをさます床の上	哉	「三五ウ」
(伊)				哉	
(島)				うへ	
(祐)				うへ哉	
(書)				哉	
(三)				うへかな	
(静)				かな	

(内)	をと	うへ哉
(神1)		
(統)	かな	
(統書)	かな	
(続内)	かな	
(神2)	かな	

\*以下、夏冬(六十一番〜百二十番)・恋雑(一番〜百二十番)の翻刻と校異は次号とする。

注

- (1) 『寛政重修諸家譜』・『日本系図綜覧』(日置昌一編)、『国史館日録』等により作成。
- (2) 井上敏幸「西国大名の文事」(中野三敏編『日本の近世 第十二卷 文学と美術の成熟』一九九三、中央公論社)参照。なお、井上氏には、直條の編纂である『桑弧』(福田秀一氏との共編。一〜四、古典文庫、二〇〇一、解説は井上氏、編著として『鹿島鍋島藩の政治と文化』(共同研究報告書、二〇〇八年、国文学研究資料館発行)もある。併せて参照されたい。
- (3) 二つの奥書をもっており、冒頭におくか、それとも、⑨三手文庫本の後に置くかで悩んだが、一応、冒頭に置いた。だが、本文の校異では、⑨の後に置いている。
- (4) 当初、これを花押の消し跡かと考えたが、二〇一三年十二月二十一日、和歌文学会例会で発表した折、佐々木孝浩氏から「在判」の消し跡と考えるのが妥当ではないかとの意見に接した。おそらくそうであろう。この場を借りて、佐々木氏の学恩に心から感謝し、お礼を申し上げる次第である。
- (5) 『国会図書館本』『松下集』一松下集 釈正広には「応永三十一(一四二二)年九月五日清巖六角本洞院と高倉との間に頼辻子奥草庵有て住給御年四十四歳の御時正広十三の年より仕まいらせて次の秋八月春日西院と町との間南頼に草庵を立住給ふ同三十四年正月十八日勝定院殿御隠有て普広院殿の御代に成て清巖閑居の身に成給て其草庵も住はなれて一条室町の武者小路に小庵の侍けるに年一とせ住給て次の年の夏のころ今熊野の南の鳥居のししの脇に小庵を結て居給ふ応永も三十五年に改元有て正長元年になり又改元永享と号す同二年正月二日試筆に梅花の哥をよみ侍て老僧にみせたまつる(中略)長祿三(一459)年五月九日老僧七十九歳にて此世をさり給ふ」うち

所々よりの訪の哥返哥ともよみ侍りうた又経文の哥とも詠せしかとも取ちらし侍り四十九日過て右京兆より参へきよしあり(中略)応仁元(一四六七)年五月のすゑつきた都やふれて後住ところ侍らて南禅寺東福寺などにやすらひて後南都にくたり南里といふところに小庵ありて年をとり侍るに」とあるように、内閣文庫本に相応する記事をもつ。また、国会本については、朝倉治彦『図書館屋の書物搜索』(東京堂、一九八七年)によれば、「近世中期の雁皮紙による影写本六冊で、原本は古写本と推定される」という。私は、原本は正広自筆本でなかったかと推定するが、稲田利徳氏は、「楮紙薄様」とする。料紙の裏にややざらつきがあるので、稲田説でよろしいかと思われる。また、影写本であるが、親本は自筆ないしは自筆にかなり近いものであったと思われる。

(6) 「松下集」(執筆稲田利徳、『和歌文学大辞典』、明治書院、一九八六年)。

(7) 『山家集』中・九二九に引かれる寂超詠「もろともにちることのはをかくほどにやがてもそでのそほちぬるかな」の「かく」が正徹詠の「かく」と同じ用法だろう。かき集めるという意味である。

(8) 各伝本について、調査方法について述べておくと、国会図書館本は電子データ+実見、大谷文庫本は紙焼き写真+実見、彰考館文庫は国文学研究資料館での紙焼き写真を閲覧、明星本は写真+実見、伊達文庫本は国文学研究資料館より取り寄せた紙焼き写真+実見+写真、島原松平文庫本は実見+写真、祐徳稲荷中川文庫本は国文学研究資料館より取り寄せた紙焼き写真、書陵部本は書陵部より取り寄せた紙焼き写真+実見、三手文庫本は国文学研究資料館より取り寄せた紙焼き写真、内閣文庫本は国文学研究資料館より取り寄せた紙焼き写真+実見+写真、神宮文庫の二本は国文学研究資料館より取り寄せた紙焼き写真、統群書類従内閣文庫本は国文学研究資料館より取り寄せた紙焼き写真である。

(補注) 脱稿後小川剛生氏より以下のようなご指摘があった。『蔗軒日録』文明十八(一四八六)年八月十七日条に「三百六十番(上下)七百二十首、晴雲哥集「今年七十五歳」、今尚自集云々」(大日本古記録)とあるというのである。ここでいう「晴雲」を大日本古記録は、十七日条で「飛鳥井栄雅カ」と傍注するが、小川氏が参照される稲田利徳『正徹の研究』(中世歌人研究)(笠間書院、一九七八年)が考証したように、正広でよい。『蔗軒日録』文明十八年十二月三十日条では、晴雲と『蔗軒日録』の記者である季弘大叔の和歌と漢詩の贈答を載せるが、和歌は『松下集』と一致する。小川氏には心からお礼申し上げたい。この時期も正広は『自歌合』を改稿していたのではないか。

